曾補訂諧歲時記纂要　豐亭主人纂輯
江戸　藍亭青藍增補

秋

漢書律曆志、少陰者西方、西遷也、陳燕遷落物於時為秋、秋、襲也、物斂收乃成熟也、少皞帝禮月令其帝少皞、注云少皞、白精之君、金天氏也、

蓂收 神月令其神蓂收、注云蓂收、金官之臣、少皞氏之子該也、

白藏 尒雅秋為白藏、一云氣白而收藏萬物故曰白藏、

金商 秋五行屬金五音屬商故有金風素商之称、唐高宗九日詩云、端居臨王宸初律啓金商、

明景 元帝纂要秋景曰明景朗明義同、

籟 謂秋声也、増韻爽清快也、尒雅吹物有声曰籟、

爽則 月令爽則法也、言金氣始肅萬物之此凋傷猶被刑戮之法、

廣義

七月

立秋 節 月令廣義孝經緯云大暑十五日斗指坤爲立秋七月節 韓文是時新秋七月節炎氣除孟秋初金神按節始也初也共也 廣韻孟勉也始也又 中院通茂公御說和歌ふる冬謂新秋也 **初秋** 初秋ハ七月十四日までといへども立秋十五日斗指申し **處暑** 十月令廣義立秋後暑將退伏而潛處也處上声止也暑氣止也是七月中也 清浦奥儀抄此月七日ゝゆふべとよめる **文月** ふつきとて文どもをひらく故ふ文ひろげ月といふと暑せうそ 藏玉七夕のあふよめ空のうげうげ月文ひろげ月有家○文月 藏王鵲のよを暑ゝそふつきともいふ **機棚月** つそのそゝもろせよなゝぎと月のこう待えう家隆 藏王なゝそこれちぎりのつふ **女郎花月** 月令孟秋ゝゝ名をそゝ月ゝそゝゝゝ月凉風至 **盆秋** 經曰

八月

葉月 此月肅殺の氣を生じ百木葉こ落こ故小葉落月といふ 今暑ゝて葉月とのへ **南呂** 律 礼記律中南呂高誘註云南任也言陽氣内藏陰侶 **白露** 節月令廣義孝經緯云處暑後十五日斗指庚爲白露言陰氣漸重露凝而白也 同上白露後十五日斗指酉爲秋分陰生於午極於亥故酉其中分也仲

毎年七月十五日、爲父母設盂蘭盆供十方自恣僧、 **相月** 尓雅七月爲相疏云七月得庚則相 淮南子一葉落而天下知秋 通 甲書梧桐立秋之日一葉先墜 **蘭月** **蘭秋** **肇秋** 纂要七月曰首秋上秋肇秋蘭秋 月令廣義提要抄云 和尓雅此月諸人詣蘭月云 **親月** 親墳墓故曰親月 **餞月** 餞字棄曰送行燕說文送去也餞と訓じ暑の去を送る意あり、

月之節ヲ為秋、分秋ハ為陰中ノ陽、仲秋ハ陽適中ニ故晝夜長短亦均焉、

壯月 纂要八月ヲ為中呂桂月ト又曰壯月、

桂月 同上八月亦曰桂月、桂の花の

いらく月 芋環ふ出せり

難月 芋環ふ出せり 唐類函

出處未考、

中律 出處未考、

八月乃難以達秋氣云難ハ

秋風月 藏王萩の

おふやらひちるを、難月の誤ならや、秋風ハ葉を露竟

みぞれ音ふるや、身ふるゝ

月見月 藏王名ふし

そゝのしあき風の月 定家

おいぶ秋の半

の空をみて、ぞのうたもと

雁來月 月令仲秋之

ある月とうるふ長明

月鴻雁來、

九月 律 礼記九月律中無射高誘註

無射 云、無射、陰氣上升陽氣下降、

寒露 節月令廣義孝經緯云

萬物隨陽而藏、

秋分後十五日、斗指

無有射出見、

霜降 中同上寒露後十五

辛為寒露言露冷

日、斗指戌為霜降

琴而將欲疑結也

霜始露凝結 季秋月令季秋之月云

季秋 通名志

而為霜矣、

紅樹 小出せる人

疑らくハ紅樹月の誤ならん藏王ふみわくべ

ろ〳〵ころとても、紅葉の月の色とそふらん後鳥羽院御製〇

来熹詩云秋山有紅樹、忽憶田野中〇韓退之

詩云春風紅樹鳥眠處、似妬歌章作艶声〇

玄月 范蠡曰王姑待之

九月の異名ハふるべうぞ、

月、九月也、

至于玄月註云玄

長月 夜長月とそ

素秋ハ九月ふ限らず、

月也、長ふ義ゝ、

秋の總名ふり、素ハ白

素秋 又菊秋やらふ、

ふり四時と五色ふ配もるふ、秋ハ

白ふ中るもそふ、素秋の名ハ、

菊月 月令李秋月

菊有黄花、

晚秋 對早秋云紅

故曰菊月、

梢の秋 李吟云紅

木深月

寐覺月 藏王ひく

紅葉月 證歌紅樹

ともいふ、

の下ふ出つ

ふじ枕のねざめ月、秋ハ

小田苅月 藏王

しくぬ長き夜をぞら家隆

ハ鳴うのくまの

露きげく袖うち拂ふ　色どる月　捎の秋といふもおかし

小田うりの月　頭駄

い

七月

糸織姫　棚機七姫の内ゝ　異名分類　旧事紀ゝ令天棚機姫神ニ織神衣ヲ織ル是ナリ

犬飼星　志の部二星　仙覚抄　あふらべし、

石枕　真の石ゝあらぞ玉ゝなむとこの石ゝ夜の玉の枕とこそ　いと枕の条ゝ出

芋の葉に露　藻塩草　露

曬衣裳　星のうし物ニ〳〵小袖

取草とハ棚機の歌と書付るゝ草の葉の露をそ書ゝ云ゝ

曬　四民月令七月七日麪を作り藍丸及び蜀漆丸と合し、經書及び衣裳を曝し、俗ゝ習ゝと然り　世説　郝隆七月七日鄰人とゝもにハ皆衣物と曝を隆仰ぎ臥して腹を出す、人其故をとゝふ曰腹中の書と曝のゝ〇星のこのし物、衣裳と曝すも七夕ゝ巧ミをこもんゝ為ゝ、　貫之家集　世とゝうて我うゑをやるらん秋きても露ゝく神のせにまとつめゝ何ごゝろまし　舟内侍　荒野集　七夕よ物うゑともゝ

越

池の坊と立花　洛の六角堂頂法寺雲林院ゝ三ゝ條の南ゝあり、三十三所順礼の一箇所也、近世僧專光製品の花枝と一瓶のうちふくて山水の景象と損ずるとを得ゝり、和俗ゝと立花とゝゝ今ゝ至て代々ゝとゝと玩ぶ僧俗此徒弟とゝもゝ多し例年七月七日立花數瓶砂の物等ゝあり人爭ふてこれをとる、ゝと池の坊の立花とゝふ是ゝ又二星ゝ供ゝるの意ゝあり、

伊勢踊　滑稽雑談　いせどゝろ

とゝむ〳〵より侍るとゝ

生身魂　蓮の飯　鬪蕙　さゝし鯖　倭華

〇世ゝふ松坂音頭ゝあり、本朝の世俗、七月ゝゝ生ゝ二親を供養ゝて生身魂名づくゝゝも盂蘭盆の修行ゝあり、　盆經　願くハ現在の父母とゝて壽命百年病ゝく一切苦腦の患ゝゝらゝむ是七月十五日僧自恣の日、現在の父母の壽命長久と祈ゝ發願の文ゝあり、是生身魂の修行ゝり、　和漢三才圖会　刺鯖中元の具祝用とゝ但し背より骨ゝ傍て割開きこゝとゝ絕ゝて、三枚と一重とゝゝこゝとゝ一刺とゝゝ〇同書ニ云蓮の飯考妣の靈前ゝ供ゝ又以て親戚ゝ贈るを礼式ゝるゝこゝと称

して生霊祭といふ、荷の葉と以て蒸せる糯飯を包み、稲
観音草と用てこれと縛る佛名これ以て好とするの、

妻 稲つまの事 和漢三才圖会 秋の夜晴て電ひかり常に
もかり 俗傳ていふ此時稲實る故ふ稲妻稲交の
名あり 御傘 稲光ハ雑あり、いね 稲の殿 稲妻ふ對して、
説文 電ハ陽の激曜するこ、稲の殿といふ
べし、 續猿蓑 獨りて留守もりをこそ稲の殿 一茶、 稲葉の雲 詩云多
秋凡ハ田面ふ冬をさそふこといふごの雲の露ぞ〳〵 稲
る〳〵中院通茂公〇稲葉のおひそめるより景色とのうつる 稲

の花 夫木 ゆふぐれといへばまがきの花もかろしふ我家の 糸萩 大和
門田の稲の花の浪よる 後久我内大臣

隠元豆 本草 近年中華 より来る、
花紅ふ盛久、 春子と植秋の末ふ實多く花紫
し、夏生もの嫩きと紀葉ともふ煮食ふ京都ふて隠元豆と云、
筑紫ふて南京豆といふ〇此種黄葉隠元禅師来朝しく
諸種を持来まる、其一種こ、

稲眷虫 和漢三才圖会 蠶蚕 春秦、和名以
故り隠元豆と名づく、

称豆岐、古萬呂俗云祢宜按ずるふ蠶蚕、蚕蛾斯ふ似ど小く、
長さ一寸ぐらひ、青色尖ごとくる首兩眼の間廣く但し蚕斯
ハ兩眼の間狹しこと以て異りとするのみ、社人立烏帽子
と着くる状ふ似り、故ふ俗呼て祢宜とふ小兒両足を捕ら
ばバ身と伸して首と俯き仰ぐ稲と眷形、似ごう故
ふ和名稲眷とふ古萬呂と八蚕蚕の類の和訓の總名、 蚰蜒

冬蚰 本綱 蚰蜒ハ總名あり數種あり草の上ふ在と草
蚕とふく冬ふ至て土穴の中ふ入夷人炙てこれと食ふ、
辛く毒あり其類土中ふ乳ち深く其卵と埋ひ夏ふ至て
始て出づ〇按ずるふ蚰蜒方もる首形、蛙雑ふ似て小く、
青白の色田の稲ふ生る夜ハ珠ふあり、朝ハ梢ふ上り、稲の
露と飲む故ふ稲子と名づくこれと取て炙つて食ふ味甘
く美あり小蝦の如し形同うして灰色 本草綱目

田野ふ在て地ふ跳る者即ち土蚰蜒也、 蝗 蚰蜒類解

三云蝗亦蚕よ類して、方首ふ王字ありて冷氣ふ生ずる所、
天と蔽ひて飛ぶ性金の声と畏る、一ふひふ八十一の子と生
ま冬大雪あるときハ土ふ入て死も、 和名抄 蝗 和名分波太 天
和本草 管子ふ凶年の五害水旱凡厲虫蝗といへり虫ハ

蝗に似て小く青色を
首は兜を着るが如く稲葉と食ひて大に害をなす夜松明
を燈し鐘鼓を鳴らしてこれを送る

芋虫 大和本草 蝶、又菜の葉よ
り大なる拇指の如く、長さ三四寸あり、芋むし
といふ青色又褐色にして、後ふ化して鳳蝶となる

蟷螂 時珍曰、両臂斧の如く、轍ふ當て避ず、故ふ當郎の名を
得たり、又螳螂首と臞臂と奮ひ頸脩く大腹二千四足、
鬚と以て鼻ふ代ふ人の髪と食ひよく蝉と
捕ふ、深秋ふ子と乳房と作るふ枝の上ふ粘着て即蝶蛸
也、房の長さ寸ばかり、拇指の如し其内重々として隔房
ありて房毎ふ子あり、蛆卵の如し、芒種の節後ふ至て一齊ふ出
て蜚ふ化す、〇時珍曰、今人疣と
病者往々螳螂と捕へてこれと食しむ、いとぐるまと
云ふ、いぼむしりの和名そふいひつたへたるなるべし、**竈馬** ニ
名一物、この部蟋蟀
蚱蜢の条ふ註せり

兼三秋物

居待月 藻塩草 十八日ノ
万葉ふ座待 **絲芒** 巣細く絲線のごとく、長三四尺
月と書り、一株ふ数百の茎叢生して、秋莖
と抽で花穂をなす、**色草** 秋の千草ともいふ、**芋** 時珍曰、芋花とひら
間ひらく者あり、莖と抽で花を生ず黄色、考ふ長薯
あり、これを護る半辺蓮花の状の如し、〇粒芋、唐の芋、
青芋、螺芋、甘藷ホの種類あり、**田舎杉** 形四く諸
頭字の部よりもちて註しあり、杉ふ似より大
ふして渋し、酢し枝 **犬殺梨** 和漢三才圖会 北國
ここいらもある塔材ふ、最多し、奥羽津軽
秋田の産他國ふ倍して大あり、周ア一尺四五寸、俗呼で
犬殺と名づく、狗子樹下ふ有ときこれを梨落まで撲ふく
死ぬ故ふ名く、**稲** 禹錫食經ホ 守屋州ハ
雅云稲、捻ル、**稲刈** 穫也取也、**稲扱**
古い麦稲の穂と扱ホ二ツの小き管と以て繩と通し繋ぎ
こゑと握り持穂と挟ミ扱、近年稲扱と製そ其捷ふる
こと扱竹ふ **稲舟** 古今 最上川のふれバくらる稲舟の、
十倍そ、あらそ此月そう〇出羽

國家の小水にそゝぐ〳〵て舟と引のぼるふ舟のうしろめたふ
うぐ人の物とりもと言て、うぐうぐふる似されバいく〳〵又一説ふ
稲とつくる舟ふよせ〳〵よむふりと【藻塩草】こえん 御傘
遮ともきくる雲ふ稲の面の平々とあるを申もよふて
夜分も居所をとりうぐ、〇又新蒙古織る遮とも、又
かぶる、稲とて木の枝ふぐ〳〵拘りねとうけるとも、稲遮
とうめり【万葉】玉ぼこの道行つるこ稲遮もきてても人さと
うよ〳〵もぐぬ人丸【新古今】秋の田のうねの床の稲むし
ろ、月やどるともちける露うぬ 定雅〇大こ是みく心
得べし、【和漢三才畫会】鰯 俗字鰮、和名伊和
之、性柔弱故ふ俗字弱ふ従ふ與
【鰯引】裂鰭 訓乃相通ふ中畧 群行して至る時、海波稍赤し、漁
人豫知て網と下しそなと来る、鯨好て鰯と吃ふ為ふ逐
るふ者数万、群とおゝて浪樓のごとくそなと取て膾ふ作
つて炙として食ふ又脂と取て燈油とす、〇鰯引とハ網
と引の義裂膾とハこれ魚刀と用るよ及ぼて指と以て
そなと解故ふいふ【本朝食鑑】一名沸紫或ハ紫といふ本朝

宮闈の兒女鰯の賤名と忌て御紫といへ、【鰯雲】秋天
鰯の塩糟其内色紫黒故ふ名づくる、【鰯先】
ふるえとする時一片の白雲ありその
雲段々こうて波の如しこれを鰯雲と云、【八月】【芋名月】
つの部月見
の条ふもべし、【十六夜月】【既望】【古今】君やさん我やそ
もさゝねふ〳〵、〇いさよふ
月、暮てのちまでいでゝいざよふ意ふ十六日の
ふ月の雲芭蕉〇此句意ハ世ちくと月ハ出さるとも、雲
のふふいさよひてこゆといへる曲節ふり、【蔡氏集傳】月
【相望】むことを望といふ既ふ望む十六日ふ
【羊肚菜】【和漢三才畫会】羊肚菜今
多く生ず其纖の表褐色端曲り捲裏ハ黄白色無數
云兎口蕈八月の中遐地ふ
【石蕈】【同上】状木耳のごとく黒色裏灰
白色、蜂の頭巢の上ふあり其色得ざるし、【稲】
【小屋】【同上】守舎未と看庐あり〇【稲木】【稲掛】
田間ふ建て猪鹿と追ふ処と、

稲干 多識篇 喬杆 伊奈加計 ○稲木、俗稲掛とのふ、禾を取こと二ふ錢を用てこれを鐏り、田中ふ於て禾と上ふのけて乾すもの、稲束 和漢三才圖会 稲と刈て束ねて一把二把こう是あり、又稲塚あり、苅稲と束ねて後積て堆くこと、恰も塚の如し、是と稲塚とこ云、稲負鳥 古今 我門ふいこふおわせどり 凡ふ鳶ふきふそくと論ぜどもおそくも心得ぞ、おそく皆いふ足らぞ、庭さきのことをりをふるいあくまり、実ふ秋の半もぎて来鳴かのまり、鶺語抄 にわとを稲負鳥のをこぞ、八人ハ恙路ふまどふざらまり、○鶺鴒 稲負鳥、庭さきふそさぬ

十坊あり、その内十五日　八所明神の社ハ、南坊と別當す、**岩倉祭**　洛の北、長谷村の西岩倉よあり、王城の四隅ふ岩倉を置まふれ其一なり、**拾芥抄**　大雲寺　岩倉觀音　○親長卿記ふ云、文明三年三月廿九日、岩倉長谷の觀音ふ參る、十一面圓融院の御願、日野中納言文範卿草創なり、○鎮守、岩倉大明神、所謂八所とハ、八幡　加茂　松尾　山王　住吉　春日　新羅　大座是ふ太神宮　貴船　稻荷　平野と加へて、以上十二社ことと十二所明神と称す、是大雲寺の鎮守ふ〳〵そ、土人本居神ことそ、例祭九月十五日、神輿遊行をこと」を勤む、大雲寺衆徒四人名代ことて公人法師二人供奉、夜宮ふ大炬火二ツ立、深更ふ及て角力五番あり、**滑稽雜談**　俗ふ岩倉の尻くき祭といふ、夜ふ入て神供を奉る、一村の内新婦ことえらひて、婚礼の服と着せしめ、神供の器と頭ふ戴き、神前ふ至ることまでこもること、立まりよ、新婦ことまでこもること、立まりよ、故ふ尻くきとのふ、

一宮祭　十五日○河内國丈野郡北技方村よあり、祭る神牛頭天王八王子、北野の天神、摂社、帝釈天王、服立寄姫大明神、浅原大明神、鎮座年暦詳ふ〳〵そ例祭九月十五日、今ハ十六日神輿出そ、神輿神湯ホあり、氏子八郷坂村小倉村　招提村　田口村　甲斐田村　中宮村　禁野村　濃村是社僧神宮寺、及社家岡田氏記そ處ふ、又一説ふ一ノ宮平岡大明神ハ、河内國河内郡ふあり祭る神天の児屋根命姫大神、香取神、鹿島神、若宮の社末社七社、神武天皇の御宇鎮座例祭九月八日九日社務水足大炊下祢宜神子五六輩、皆農民ホそことを兼務ひとそ、

伊勢御遷宮　[紀事]　丸大

社造替毎ふ陣の義ありて、時日を定らる、勅使あハ伊勢大神宮、春日の社廿一年を經るときハ必造り替あり、遷宮の時納る所の神宝、行事官、調進をこの月伊勢參宮の人多く京師と出て、十六日の御祭會並ふ御遷宮ふあそんとす、九泰宮の人、先亜山の國阿漕の像ふ詣てその杖屨と戴拜す、相傳ふ國阿漕く太神宮を信ひに時々木履と着杜杖とを携て參詣とそ、終ふ行路の難あり、故ふその福よ做ひて以ふ安を祈るな、〇二十一年毎ふ遷宮あるが故ふ十五年

ゐふ　ことき木引かことあり、三年ゐて木引成て、又三年木荷のことあり、材木ハ木曽山並紀州大杉山より出ツ○

内宮御鎮座ハ垂仁天皇二十五年三月、外宮ハ内宮御鎮座の後四百八十四年と經て雄略帝の時並跡ゝ、

色ある風

九月の風なり　新古今　うのおもふいろをき風も

ふるさと秋のうつろふ　久我内大臣

隠君子

菊の異名あり　范至能菊譜序　山林好事者或以菊比君子其說以謂歲幸晩婉草木變衰乃獨燁然秀發傲睨風霜此幽人逸士之操雖寂寥荒寒而味道之腴不改其樂也　愛蓮說　菊花隠逸者也

いあて草

菊の異名あり　藻塩草　長月の九日ほさくいあて草花八重そ

万代ぞいつ栗　其實苞中に在て未地に墜　無花果　和漢三才圖会　其實栃の如し實

毛毬、和名以加

とりふ、一月ゐて熟す、故ゐ一熟と名づく、その樹枇杷ゐ似て木窄く、俗に唐栃

把ゐ似てとりとりとを然らず漿ありて葉苣麻ゐ似て小く、皆色淡く潤ふ文理隆明あり、五痔を治するとを

識て魚毒と治するとを未だ聞ず　櫟　和漢三才圖会　櫟ゐ似て花ハ栗の如し實もとゝ小く船の櫓ゐ作る　いろ〳〵大小木硬くして多實とゐて秋とも

色見草

藏王　秋もみぢ

くもりき山のいろ〳〵見草ちらまがふ

色不變松

荀卿曰隆冬を經て凋まざる、風ぞふく、貞と得とりべし　新拾　いろ〳〵なる色の山のふもとの松の松君とゐ千世の友とゝゝ〳〵ん　入道前内大臣

岩蓮花

大和本草　岩蓮花俚俗の名之其草の形葉のめでたきハ恰も蓮花の開るゐ如し異名之或ハ云佛甲草是ゐ

鯛の黒漬

と非ず　豫州の産ゐ宇和鯛と称そのあり、製両鰓と切削て鰭とそ、鯛ゐ性腸の中ゐ黒汁あり、塩水ゐ和して其魚黒し、ゐとを黒漬といふ、

道恭

九日　迎鐘　槙賣　建仁寺異

山城国名勝志　六道八五條の末北、寺大昌院管領也、薬師堂あり是珍寳寺の本尊、○

雍州府志　珍寳寺ハ弘法大師の開基ゐて、元葬場ゐ

七月　六

小堂ニ地蔵ヲ安置シ、世ニ六道ト称ス、傳ノ文ニ此ノ所ヨリ親ラ六道ニ行テ帰ラヽヤト云ヒ、故ニ小野堂ニ此ノ所ヨリ六道ニ通ヒ、是ニ依テ毎年七月盂蘭盆前九日ニ男女参詣シ、紀事 今日諸人六道地蔵ヲ詣テ、男女鐘ヲ撞テ聖霊ヲ迎フルトテ、各槙ノ枝ヲ買テ携帰リ又新穀ヲ買テ聖霊ニ供ヲシ、是ヲ私ト称ス、〇六道参ハ槙ノ枝ヲ買ヒ、家ニ入リ、霊前ニ置ク、俗聖天槙ノ葉ニ乗テ来ルト云フ、是聖天ヲ迎フル意アルベシ、古事談 珍皇寺ノ別当某云、当寺ノ鐘ハ、慶俊僧都ニ〻ト鋳ル、慶俊入唐ノ時留主ニアル僧ニ、ヨクヽ此鐘土中ニ埋三年ヲ経テ堀撞ベシ〻〻衆僧三年ヲ待ヒ堪ヒズ、終ニ一年ヲ過シテ堀撞ニ掛ク、撞ニ其声唐ニ聞ユ、慶俊日我寺ノ鐘声ニ違ハズ、予念ズラク三年ヲ待テ是ヲ掘撞上ルル時ハ撞ギテ六時ニ声ノ出ルベシ〻〻ト歎惜セシ、〇カヽルノ所謂ニテ、聖天ヲムカフルヲヽヽ撞ニ、是ヲ迎鐘トヲヽ、〇六道ハ桓武天皇延暦十三年長岡ヨリ今ノ京ニ遷サセ玉フトキ、諸人ノ葬場ト定メヽフ、本尊薬師ノ作、七仏薬師ノソノ一トヽ、迁都記ニミエタリ、傳教大師ノ作ト云ヒ伝ヘタリ

初涼 王劉練詩ニ云、昊天清、初涼 旦ツ高秋風発ヽ

墓参 七月朔日ヨリ十五日ニ至リテ各祖考ノ墳墓ニ詣ルヿヲ唐山ノ人清明ノ日ニ上墳祭掃ニ同〻〇源順家集ニ、七月十五日ヽヽせ山寺ヨリまうでヽる所ニヽふのこめとをれる蓮の葉をひろひ露おく山ニヽふ我いきゝゝりヽ是盆の墓参ヽヽ

和漢文撰 前文畧之一家ニ

ヽふ杖ニヽもヽ髪の墓まゐりヽヽ

評ニ云故翁伊賀の西麓庵ニヽて、例の文稿トヽらひそめ今思ヽふ白髪の亀祭ニヽ其日の感情ハ演ベキまで発句ハ祭る姿にあらずヽ此故ニヽ参の字ヲ以テ歩行の様ヲ形容セリヽふ當季の詞モ慥ニヽもヽ増テ切字の入所ヽもし此等ヽヽ有様歟ト云テまゐるヽヽと云ヒ次テ俳諧の蓮の飯 蓮の葉ニ飯ヲ盛ルヿ下ノ旬歌モもるべきもヽ

花燈 造リ花ヲトモシテ美ヽヽ餝ル

籠 貞徳曰ヽヽ出の鷹トハヽヽめてつるヽと、初鷹トモ、賀鳥狩トヽヽまゐり鳥屋出の鷹トヽヽ、夏の羽のぬけヽるヽ鳥

屋よこめて羽の出そろひたるを盆の聖灵の箸ととりて夜烏屋より出をふより箸鷹とも申とぞ○小鷹狩の条をも見合もべし

鳩吹 鳩ととるとて手を合せて、鳩の声のやうふきまねをもよふす 八雲御抄

歌林良材 蒸塩草 神中抄 水説同し

花火 和漢三才画会

炭懐集 名月や誰が吹おとす夜の鳩 酒堂

秋 和漢三才画会 又夏月河辺の遊具とそ 御傘 正花と持へし

萩 竺花ハ花史よるる如しハ枝葉長く垂地と簇ふ狀糸櫻ふ似て一極三葉束の葉ふ似て又南天燭の秩ふ似て尖らず柔軟之秋小花を着淡紫色俗専ら萩の字を用ふ奥州宮城野方二里ばかり萩生茂りもり山萩あり人白花の者あり白紫開分の者あり○或書ふ宮城野の萩ハ草ふあらず木萩之ふ作る木あり梢ふ青き枝生てその枝ふ花さくもあり○ものの萩、鹿鳴草、古枝草、糸萩、

萩の錦 錦ふ似小萩、さて萩ホ其頭字の部ふわちて詳をそこにいふあり 新後拾

秋ぎりの花のふもきの露のたてぬき 法皇御製

萩殿

萩の戸 禁秘抄 萩のらを色く秋の方貳間の前 五社百首註 菊ノ萩戸同しこと、

蓮の實とぶ 蘇頌曰其筋秋水ふ沈む石蓮子ともて、○山谷詩倒載奴蓮苞ここもも蓮の子の房中より枝出る穴と勒と見立しこと、

初嵐 和漢三才画会 山の氣を嵐とふ嵐酉書ふ山嵐不正の氣こいふ是あり今初秋以後朝夕山より吹風を俗に嵐と名つく 連哥新式秘抄 初嵐ハ七月末より八月中ごろまでの風まり、

絡線虫 六月の内より鳴初て七月中ごろまで、野義の中昼盛ふ鳴く其声ギイ、スとらふ如く、一二声の内ふ、チョンと舌打を、谷是を蛩と云て小篭ふ入て市ふ賣て小兒の翫とそこの形自蚰蜒ふ似て大きり、是もこおろ〳〵ギイ、とらふ機織の音、チョンと筬打音あり又ギスともいふり 續猿蓑

蚰蜒 夏の附合ふ、砂を這ふ蘚の中の絡線のこと 沾圃

蚰蜒の虫 長サ三四寸、身もふもこ痩て、方ある者両額ふ眼あり、目の上ふ二ツの鬚あり、翅灰赤色黒

點あり、腹の下白く善跳て捕へがたし。

櫨 和漢三才圖会 櫨は木て黄色を深く〇今の俗これをぞめきといふ、むし天工の御袍黄櫨染と称も是なり、皮と深て上り碱水と用ゐ器染ゆ黒茶色となりて其葉小く浅雪白色、莖微赤し三月小白花を開き、細子と結ぶ秋ふ至て紅葉を、つく笹色漆の類ありて葉柳の如くあつて滑く元山末、今世子を採て專ら蠟燭ふ作る。

依て多く平原の地ふ植て利とす。

兼三秋物廿

日亥中月 廿日の亥の正刻

ふと出る故あらん、

簇芒 袖中抄 花芒欸冬と同じくひきこまり、或ハ万葉裏書ふもこ薄と、穂う出て簇とさゝげくるゆゑみる薄といへど、能図考しけると

花野 千草の花の野ふ咲そろへるこいふ、

ぞ云、

用ゐ、花野といふときハ野、

芭蕉 大和本草 李草に体とあつて花用ゐ心得し、

湿草ふ載せ軟る地ふ植て茂易し、春巣を生じ、秋よ至て止む、冬根莖枯ぞ年々発生を、冬と歴て大ゐ黄花と開く極めて稀、東鑑ふ其花と優曇華といふ、

葉雞頭 雁来紅をいふ、かの部見るべし、

薑 和漢三才圖会 生薑音姜、今俗多く姜字を用ふ剌美蜀椒奈留波美萸椒以多知波之加美と以て考ふるふ往昔波之加美と云しか訛ハ辛景の憩名之、

蓮芋 其葉荷葉ふ似て巾く、其根茎の形の如し、茶美ゐ、或ハ呼て栗芋とらく、按るふ水中ふ産るれと蓮芋といひ園圃ふ種るものを栗芋といふ、

彈 和漢三才圖会 彈塗魚俗波世川の未海の条ふ出づ、

異名 **鮠鈎** 近き處ふ多くこれあり、常ふ水底と昏行ふ鰡と以て餌とす、二三寸許の魚ふ鉤の鍾と着、鈎と地ふ附しむ、微動の響と候て竿と揚く、秋月貴賤以て遊魚の一ツとす、形色鯆ふ似て小く細鱗體暑滑ふして口濶く腮大ふ眼上ふ向く、斑黙微黒と雑ず、尾ふも又小斑あり、虎彈魚納彈魚飛彈魚ホの類多し、

八月 **八朔** 田の實の節供憑の節供

特牛の節　紀事　凡毎月朔八吉日あり、て、相賀ぐこと中田面の節　華と同し、今日殊ふ八朔と称し、又特牛の節と称し、又田実の節と称し、又田面の節と号し、又中世農民間の初穂を　恭敬ふ献ぜ故ふ田の実の節ともいふ、世ふ又其訓と借用て、憑の節供と称し、蓋君臣朋友相依て頼の義ふ取、君臣朋友の間互ふ贈答の義あり、今日貴賤各白帷子を着し、互ふ慶賀を修ふ、公事根源　八朔の凡俗、後嵯峨院潜龍の時、外戚源の通方郷の真丁ふ在〳〵ふ、近習の男女密ふ斯義とふ〳〵て、閑素と慰め奉る、後皇位ふ即ふ不来嘉事ふ、て、賄賂ふ貪ること〳〵てい〳〵ふ害

初月夜　或説ふ四日五日六日迄をいふ、〇書藍曰、仲秋の月ふぐらぶ、初月と賞ふ、八三五の月を待ちろうりいふ、あるべし　拾芥集　栗柿とめでそくあるな初月夜半残、初潮　十五日の潮といふ、一説ふ初潮の字ハ菓月の潮とよむ、五雑俎　海潮八月獨大ふ、何ぞや、潮ハ月ふ応ずるもの故ふ、月望ときこ潮盛ふして八月の望尤盛ふ、

御傘　伍子胥ふ死霊八月十五日夜ふ凡波とおこすと、

箱崎祭　十九日　神社考　筑前國那珂郡、此社ハ

祭る神三座中、應仁天皇東ハ神功皇后、西ハ武内宿禰ちう、仲哀天皇三韓と討んと欲しまふ神功皇后とふ、筑紫橿日の宮ふ至ふ給ひ、軍旅と催ふこの時、天皇崩御あり、この時皇后懐妊臨月あらんとふ乃自ら男子の貌とふ、弓鷲矛鉞をとろし、呪ふて曰、靖、征伐の後降誕にれと、三韓ふ〳〵平定し、筑紫ふ帰りてあひ、男子降誕ふ〳〵應神天皇是あり、ふこの地ふ遷ふ宇弥邑とい、眇衣を営ふ籠ふて地ふ埋ふ松ふ植て標ふふ、そ、その地と呼て箱崎とふ、醍醐天皇延喜廿一年六月廿一日、託宣ふよふて、宮と営寄の松原ふ建ふる例祭ハ月十五日ふ、〇古老傳ふていふ昔この松原ふ戒定慧三字の寶と埋む、故ふ箱崎と号ふて、松とその所ふ植て標とふ、その松猶在とふ、縁起　昔・白幡四流、赤幡四流、虚空ふり降其所ふ松を栽て標とふ、故ふ八幡の号あり、て、諸説ふ異あり、

花畠　貞享式　御傘ふ正花あり、春迭ふ細ふ穿數傘をれバ種々の理

屬あるべきこと、その分ちて置方がよきこと、如何ある
事あるべきまでを、今按ずるに花檀も花畑も、次ぎて秋に定
むべきなり、○花畠 初花初櫻といふに同
八草花多きをいふなり、初紅葉 新拾遺 ちりくる山
木々の梢のもみぢけきこの
もみぢ葉にやまがつおばする 宗良親王
蕃荷菜ホの諸名あり、本綱曰二月宿根より苗と生ず、初
清明の前ここを分つ方なり莖赤さ色其葉對生ス、初
時形長くて頭四ツに長ぎるホ及て次々其莖葉甚う
似て尖こ長し冬を經て根枯ず、春種と下す、長じて
花紫 花彙 大和地方多く藝
苗の高さ一尺以来葉ハ謝落金の巣ホ類し
て小ふり、又俗ホよぶ琉璃草ホ似くり、差互して生ず、三月
花と開く、梢の葉の間ホあり、形狀四く瓣五出ヤて内
ホ蕊鬚あり、又瑠璃草の花ホ異ふることあり、くさぐさの
色白し、又粉紅及び黄色のもれあり、下ホ長甘莠あるて
ごとくく実と結ぶその形四くく
大なり、秋ホ至て熟す、黄白色あり、○按ずるホ御傘

ホの俳書ホ花紫と秋と、若紫と春とを然るホ本草花
彙ホの説三月花と開くとのみ、紫草と種て試る人あり
て曰、此草秋種るものハ春花と開き、春種るものハ秋花さ
くとぞ、御傘ホ花秋ありとぞ、
○絹帛を紫ホ
染る者此草多、花芒 和品 濱木綿 万葉 青ホ似り、俗濱おもとといふ、
の条ホ出ル、濱木綿の花
天和本草
海辺ホ生ず、七八月白花と
數花あり、季秋実と結ぶ花咲る跡ホ數顆ここのとぞ、一類の
大さ胡桃の如く、内ホ核あり白肉あり、中
西土ホもあり、濱芭蕉といふ、紀州熊野ホ多し、萬ニ雪寒ノ
と畏る、宅中ホ植て八冬月葉まて厚く色こ或ハこもる
ておおふべし、盆ホ植て屋内の暖こ処
おくべし、海濱ホありて八、潮風温ありて雪早く消る故
なるべし、二種あり、一種ハ葉柔く薄く其莖の皮多く重
まり皇百重をとぞ、一種ハ葉つくく
莖の皮重ぞ 万葉 三熊野乃浦乃濱木綿百

重成心者難思直ふ不相鴨人九 滑稽雑談 此者未俳書ふ載ず然ことのへどを古哥ふ多くよめり九花と以て季ふ用ふ、

針蕈 和漢三才画会 鼠茸ふ似て繊ふして、灰白色平地ふ叢生し、長さ二寸ぢり、

初茸 同上 浅山松樹の陰處ふ生て狀松茸ふ似て小く、初生とり傘ありて、内ふ細こ刻あり、内外赤黄色、立秋の初ふ出つ柔みりて味甘く、諸茸より先ふ出つ故ふ初茸と称す、

白雁 白雁全体白くして、翅翮黒く、觜と脚と赤色、其肉脂少し、九中秋白雁先来て雁金ことふ次て遅し、春ハ真雁又ことふ次て先て歸り白雁ことふ次ぐ、

初鰍 和漢三才画会 鮭ハ鰭の本字ふ似て円く、肥大なるもの二三尺、細鱗青黄赤章腹淡白く肉赤し、細刺あり、脂多く味厚美し、頭の枕骨軟りて瑪瑙の如し、氷頭と称ず、味亦佳し 天和本草 本邦東北州の大河ふ多し、南州ふいこるもあり、和名抄曰鮭和名佐介、俗鮭字ことふ同上 其子二胞あり胞と用ふ非ず、

鰤 鮭の子し 同上 中數千粒、明透上ふ一紅點あり、鰤とい、又筋子甘子と云ものあり、

放鳥 祭の条ふ詳ふ

瓶廻 紀事 この月九日小兒小石と以て海螺の殻と穿ち、鉛と鎔して売の内へ入まゝ或ハ洲濱飴と売の内へ売て、其力と助け、各緒と以て海螺ことを纏ひ勢ふ乗して臺中ふ投入ことを運轉せしむ、その力つよきものハ其力弱きものことを盆外ふ出ことを互ふ勝負と爭ふことなり、和漢三才画会 いづれの時よりか始ることをしらず、田夫野人の玩ぶ所ふり海螺の売ことを用て、頭の尖ことを碎き平げ尻の尖りと摯て四め糸繩と巻て引てこまと席盆の中ふ舞せ、二三の螺と以て勝負とふて打出さるゝ者と負とそ、その先ふ入るものを伊加と云ふ、一打合て同く出るものと乃宇と云ふ、又一打合て同く出ることの有ハ張とふ、張のときハ伊加と勝とをそ、

九熊野よりいづる海螺夏ふ堅し、

廿日〇婆利女の社ハ洛陽高辻の北室町の西ふあり、祭礼昔ハ七月ありしを中ごろより九月廿日とそ、

雍州府志 繁昌の社、元針才女と祭る所なり、毎貝八舞才天あり、針才女と繁昌と、和語相近し、依て誘導する
あり、宇治拾遺 むうし出雲の前司ごふ人のむすめ、此所にてうせぬるふ葬をさめんとて、鳥部山に具し行
きてをさめ、その死骸のうへの所ふるうへ後八さらふ動ふ出べく
もあらざせんうとおもひて、此野ふをさめ侍りしふ、その塚の
あたり六七間ばかり八人も住つべき所ふ、荒地ふて有りを後ふ
何人やらん、社と建つるよし侍りし故有て辯才天と祭れり、
蠶簀内傳 牛頭天王婆喝羅龍王の三女と娶てふうり、
その名と婆利女と云、〇安藝嚴島の弁才天女婆喝
羅龍王の才三女ふるよしいひつたふ志の是ハ婆利女を
弁天といつるもまた故ふ死ふひらそ、〇大閤秀吉あめ
社と東山佐女牛の八幡宮の傍ふうつさむ且でも甚ざ
祟ふをふれふれふ、ふもびかやの所ふ安置そと、
花の弟 異名多類 花の才とらふハかろく
おくりて咲ゆるをふふとぞ、夫木 も草の
えもあのおとうとまろめと八重ど
くふのこみゆる志く萄頭胎

榛 時珍曰榛栂低く
小ふして荊のど、

秋はに

巌生を冬の末花とひらく、穂の花の如し、條をふし下あ
垂る、長さ二三寸、二月葉と生ず、初生ハ櫻桃の葉ぬとし
皺文多くありて、細き歯及ひ尖ありて、其實苞をふす、
三五相粘、一の苞ふ一ツ實々として榛の實の如し、下壮
ふ上鋭し、生ハ青く熟ずれバ褐ふ、其殻厚くして堅く、
其仁白くて圏く大さ杏仁のとし、赤皮ふ尖ありて、
然もども空あるの多し故ふ誘ふ十榛九空〇その
葉悉く皺む、依て和訓ハレバミあり、実を以て秋李
と

柞 さくらせ 山木あり高さ者二三丈葉ハ柏ふ
似て秋紅葉し冬落つ城州柞のふく名所あり、
且奈良の西南ふ祝園といふ所あり、城州の内し元柞
園ふ後祝の字ふ改む祝園の神社春日大明神ふ此神の
森皆柞の木ふて秋甚と紅葉を、他邦ふも稀ふる木あり、

乗掛、乗合船 摂州大坂
ふあり、江戸へ積出も綿ふそのほか
ありて、江戸へ着岸の遅速と以て損益ふ定む商賈專
ら勝負を專ふ、

初鴨 貞享式 此名八全く新撰あり或ハ
賞翫ともを加減ともいそん今按ずふ

奉膳式あと雁鴨と並あぐらゐ、賞さる処ハ秋冬の差別あり、こゝにても見聞の姿情と論ぜず、初雁といへハ風雅と思ひ、初鴨といへハ凡味と思ふ、是と天眼ともいへ、へらず、聲ハ初雁と音ハ喚ともに風味を先ハ思ふべきや鴨の冬あるハ勿論なく、初の字をこゝ〳〵秋とあるを見るべん、

七月

庭の立琴

江次第に巧奠ハ御所うら筆一張を申下し、東北西北の机上の妻ハ置く、註ニ延喜十五年の例和琴を用ふ、裏書ハ云柱を立るハ三撫あり、常ハ半呂半律を用ふ、秋の調子あり、公事根源頭書半呂半律とハ、樂書ハ云黄鐘調大食調ハ律呂の調ニ半律の調也、

肌寒

秋声賦其氣慄列缺入肌骨

新綿

藻塩草ハ夫木ハ琴のあさりふ引ハさくらふの糸寂蓮ひととせ七月十六日あり、内裏の貢の綿あり、〇俳諧ハ二百十日ハ貢もぎらざれバ作者ともろ〳〵正月の節立春の初日よりぞへて二百十日とり此ころ秋の最中あて、金氣殺伐の氣慮動ける時ニ故ハ必凡

雨あり、此時節中稲の花盛とをそのその花をとなへとをを農民恐る、

續猿蓑 翁草二百十日も差ハ暮雫

廿六夜待

江戸の俗今月廿六日の夜月の出ハ三尊佛の影向を拜むとて高輪ハ群集也、此夜ハ藩邸居手踊或ハ音曲ハ人藝うつし繪等を仕組者あり、是ニ一夜藝者とり、酒樓ハ月を待客是を招て與とをを又虫賣菓飴餅いろ〳〵の商人来てハ賑ハひ、土人幇間虎八云、土人廿六夜祭と称ふ其由来を尋ねふ審ハ〳〵近村の民此處ニ来て海岸ニ出て月のいづるを待〳〵こゝへ生ける蔬を苅取圓座として月のいづるとハその名残ありべし、

今聖灵棚ハ敷ける蔬を敷物ハ賣ハその名残ありべし、

とゝ云此外田安の臺湯島の社地群集をなし、高輪の賑ひハ及ぬ、

兼三秋物

八月

庭たゝき

鶺鴒部

和名毛呂美今俗濁酒といへ、

九月

鬼笹前

良安云衛予和名久曽末由美

似栃

御所拂ハ似て肥満爾ハ云、味大ハ劣る、

濁酒

醪ハ汁滓の酒あり、

百子姫、糸織姫、朝顔姫、梶の葉姫、ともし妻、梶の葉、天の川、秋去衣、石枕、九枝燈、庭の立琴、紅葉の帳、火取香、願の糸、衣裳と曝す、芋の葉の露、索餅、銀河、銀漢、雲漢、烏鵲の橋、紅葉の橋、年の渡、二星の屋形、乞巧奠、乞巧針、乞巧瓜、七箇の池、百箇の池、妻迎へ舟、妻迎へ舟、七種の舟、以上各頭字の部ふるもちて註を、

星のかし物

といへる条ふ注を、

星合の濱

増山の井 伊勢ふあ

ア、星の逢ふ所ありの晩、東西の本願寺末流並家礼花数種と以て船の状を作ア又槽の形を作ア、中ふ草花数品と建て、御門主ふ献ぢらるゝを堂上ふあらぐおく今日七日諸人ぐれとらる、

盆市

草市 荷の葉賣 麻うら賣 盆太鼓賣

紀事 凡七月街市ふ太鼓團鼓、大小、加伊羅木、三尺手拭、寺特頭巾、作髪、金銀箔の紋所ふと賣、是盆踊必用の具へ又盆前截子燈籠竜、金灯籠竜、草挑灯、小行灯を賣、是皆中元の夜点ぞる所へ又索麺粟

其葉秋ふ至て紅葉す、面色丹の如くやゝて青赤相雑ぢ、錦の如し、故ふ俗錦木といふ、子を結ぶ一顆ふして実ア小正うて紅ありて、信州野州の山谷ふあり、

七月 星合、星の契、星祭、星の手向

周處風土記

七月七日の夜庭と洒掃ーて、露ふ几筵と施し、酒脯時の果と設ゝ、香粉と河鼓織女ふ散し、云ゝ注ニ云二星辰会をるふ当て、夜と守る者皆私願と懐ゝ、或云天漢の中を見るふ爽爽ぞる白気あり、光曜五色あり、此とりて徴應ぞそ、見る者拝ーて願ふふ、富を乞ひ、寿を乞ひ、子ふさい子と乞ふ、唯一と乞ふるを得、兼求ぢと得ざて、三年ふーて是とりふ、願る其作と受る者ありの、〇牽牛、犬飼星、織女祭、河鼓秋さり姫薫姫さゝがふ姫、

斎諧記 天の河の東ふ織女あり、乃天帝の子ふして、容と理るふ遑あらまて、天帝其獨居て憐ゝて、将ふ嫁せんとーて、河西の牽牛と夫ふ與ふ嫁しして後竟ふ女工と廃ぢて、天帝怒つて責て河東ふ帰らしめ、惟一ほーまつ年ふ一會せしむ、

乾瓢、茄子、角小豆、空閼刺、木醪枝、鼠尾草、荷の葉と麻から、大小の土器、供饗、破子、うんもあうけ、ホと賣是民間聖霊会

穂屋

みの部御狭山の處用ゐ、祭の條ゐ出づ、鳳仙花 時珍曰其花ゐ鳳の形の如しゐ故ゐ名く、頭翅尾足具まり、翹然として二月子と下し五月再び植べし苗の高さ二三尺莖ゐ紅白の二色あり、大指のごとし、中空ありて脆し、葉長くして尖つゐ桃柳の葉ゐ似て鋸齒あり、梗の間ゐ花とひらく、或ハ雞色赤褒易ゐ狀飛禽の如しゐ夏の初より秋の尽まで、開謝相續て実を結ぶ、

木瓜の子

時珍曰其實ゐ瓜の如くゐして皺あり津潤ゐ味不木ゐるゐのゐ木瓜ゐ異ハ乃ち花の落ゐ處、臍蒂ゐあらざる木瓜灰ゐ焼て池中ゐ散す以て魚ゐ毒ゐ殺ゐ、和漢三才圖会 世ゐ木瓜と称ゐるもの、本草の註ゐ合ざる事多くこゐに出す、

桃ふうて木瓜ゐあるゐ、武州江州ようり多くこれとゐ出す、

薬肆以木瓜ゐ充ゐ近頃唐木瓜とゐふ者あり、人其花ゐ愛ゐも是真の木瓜ゐあり、

穂掛

藻塩草十 田舎の稲のとう初め、新らき藁のすりめとゐふものゐ又て穂と組合せ、門戸ゐと倉やもゐ掛て神ゐ奉るゐ、ほのゐとゐふ、

灯

和漢三才圖会 酸棗 時珍曰五月小花と開く、純白黄ゐ赤白色ありて蒂ハ青し、宿根ゐより自ら出ゐ小児中ゐ入ゐ薬ゐ以て舌上ゐ含て厭吹ゐ、

兼三秋物 鬼灯

和漢三才圖会 酸棗 時珍曰五月小花と開く、純白黄ゐ赤白色ありて蒂ハ青し、宿根ゐより自ら出ゐ小児中ゐ入ゐ薬ゐ以て舌上ゐ含て厭吹ゐ、

音あり、〇今の世ゐ女の童のうそぶき吹ゐ、栄花物語 野分の巻、つづきこそ初花の巻、寛弘五年の所ゐ、御色白くうるはしうほづえ

南瓜

源氏物語 野分の巻、つづきこそ

ゐとふるまで事ありてと醍醐ゐ出ゐ、三月種ゐ下ゐ、沙沃の地ゐ宜し、四月苗ゐ生ずる尽ゐ、蔓ゐ引ゐ甚ゐ繁し、一蔓十余丈ゐ至ゐ、地ゐ近て即着、其葉中空其葉の狀蜀葵の如く大ゐ荷の葉の如し、八九月黄花とひらく、さゐ西瓜の如し、皮の上ゐ稜あり、甜瓜の如し、一本ゐ数十顆と結ぶべし、其色或ハ緑、或ハ黄、或ハ紅あり、霜ゐ経て収むべし、暖處ゐ置けハ留て春ゐ至るべし、〇一種 南京瓜 一名東瓜 一名唐茄子 本草南瓜の下ゐ所謂倭瓜

是ほらのもと形螺ふ似て大く、螺芋と云故ふ名つく、ほど鶫その部鳴のほと条ふ出ル、星

月夜 【さくら世已】闇ふ星の多くて明るき夜とい人、あり、只秋季あり、【東花式】古抄ハ星月夜の名をあげて、只秋ありとぞ云捨て月ふあらざる、発句ハ素秋やとときい、其三句ハ素秋やとて、七句目の月の座ふ他の季ふて異名とまぎらハ例の好あり、ことぞまぎれ故是ハ秋ありて月ふあらざる、発句ハ脇寺三ときこふ此名目ある

八月

誉田祭 十五日 河内國長野山護國寺地藏院

翁芭蕉の遺訓ふ、

の縁起ニ云當社ハ人皇十六代應神天皇の御陵あり、母后神功皇后の御胎内ふ御ハ十一年仙齢百十一歳の春、大和筑前の國ふ於て降誕、御腕ふ靭の形あるふ故ふ誉田別の皇子と号し奉る、是ふ矢の家と守らるゝ事、此時ふ顕ハるゝ、治世四十一年、国豊浦の宮ふ崩ぜ、玉躰を瑪瑙の棺ふ納め、河内国藁伏の岡ふ葬り奉る、三十代欽明天皇の勅ふよつて宅殿と營ふ三所の神明と祀る、所謂中殿ハ八幡大菩薩、左ハ仲哀天皇、右ハ神功皇后ふ、世ふ神祠多しといへども當社ハ王躰と納め奉るの霊廟ふて八幡宮の根源威験深きとをもつて、先ッ十四日の夜奥の院の御廟前本堂へ鳳輦と行幸ふし、翌十五日午の刻還幸舞樂あり、四月八日若宮祭申条児舞隔年ふ行ふ放生会ハ當社ふこゝふ始よし、但ふ社説の趣を記ス、

放生會 やの部ハ幡の条ふ出ツ、

菩薩祭 廿三日

肥前國長寄ふ於て、来舶人船神と祭る、八月廿二日ゟ【和漢三才画会】舟の神と媽祖娘々とまつるといふ、唐船長寄ふ来て、往々祭る、

【俗ニ】と舟菩薩といふ、唐僧の俗ニ云ふ、船中の品物を水揚する呼の神ふまつり、船中の品物を水揚するをもつてかくいふ、○長寄ふ唐人寺とて四ヶ寺あり、福州ハ石尺町崇福寺、南京ハ寺町興福寺、この三ヶ寺昔ハ唐僧住ス、今ハ看主持ふ外ふ目付寺ゟて筑後町ふ聖徳寺いよあり、昔ゟ和僧持あり、ぼさ祭の日ハ、和僧も唐僧衆ゟて法事修行あり、本尊ハ観音もあり、此日来舶人ゟこの寺院へ参詣ス、其異体をうんとして諸人群集をやく

ハ、四箇寺こ
ふ黄蘗渦さゝ、穂北
ふ似さゝ、故ふ名く
まこ花芒ともハ、牡丹の根分 和漢三才畐会 夏月川の紀と採晒し
乾こ、古き畑の土と細き沙と以上三品節和ハ九月紅き
芽と出こと移し栽べこと培ふふ冀溺と用ふへ
らご冬月油渣と用ひて少こ根の傍ふ入
ゑ或ハ鮮魚の洗ひ汁と灌ぐも亦佳ゑ、頬赤鳥
正字未詳 和漢三才畐会 状雀より小く背の色も亦
雀のごく、其頬赤く胸白くして嶋鶫の支あり、声
喜鴨ふ似て細く高く、畫眉鳥 同上 俗頬白鳥之
常こ蒿間ふ棲む、書 状ち鴬ごう大く、
灰赤色、眉白く畫くか如く、頬亦白くして間黒し、
背上ふ黒點あり、翅尾畧黒く、尾の両端ふ白毛あり、
腹微赤黄色臆下ふ赤き斑あり、其足赤黒く其声
四滑ゐて多く囀る、小鈴の音ある者、其声と謂て
行鈴諸鈴
の名あり、九月星見草 菊の異名あり 藏王
庭もせふさくてふ

ろ、ゐ、ほ、へ、と、ぐさゆ、ぐさめ色をもが花あぞこゝ清補○
異名ふゝそも星ふゝせてよむもゝ 古今 ゐさゝこの雲の
うつふてゝる菊ハおもつ 鵜上ヶ
ほこゝぞゐもまくゐる、 つくせこ 人
然ゐを生ぜ蔓草こ、巣朝顔ふ似て小白花こ開こ秋
実と結ぶ秋季ともるゆゑ 実甚ぜ紅こ鴨好んでてゝ
○時珍曰白実ハ其花をゐ 家の垣根ふ目
子 校量類珠功徳經 諸陀羅尼及ハ仏名こ念誦ゐる
ゝあり、木患子ハ千倍あり、浄土ふ生ぜんこと求め
ゑ此珠を受よ水精ハ百万倍あり、菩提子ハ無量倍こ
つくせこ 昔洛東建仁寺の、千光国師、宋ふ入此種と
得て歸朝し、筑前の香椎報恩寺ふ植ゑゝ
傳ふゝゑゝ、後其種を京師の寺々ふ傳こゑこゝ植、
泉涌寺六角堂獄山の西塔ふゐあり、宇治の興聖寺ふ
予こゑと見る、一樹小巣二色あり、一ッの巣ハ椋ふ似て厚
く大く又一ッの巣ハ木犀ふ似ゝり、其巣ふ莖ありて莖
ゝり嫩ゐる細枝と出しそゑふ花さゝこ実こ結ぶ、

其実淡黒堅硬くして念珠とす、香気芬々たり、典、聖寺の僧曰、是経に説る菩提樹あり、天竺此樹下に於て仏成等正覚ありといふ、樹の高さ一丈ばかり、枝梗のごとく、百日紅に似て甚だ奇樹なり

杜鵑草

大和本草 品彙に紫萼に似て短く小さく筋多し、又篠の葉に似、又蕙に似たり、秋開く、六出あり、中より蕊出て又花の形をなせり、蕊ごとに小紫の黙ありて、杜鵑の羽の形に似たり、淡の黙ありぞうの如し、莖の高さ一二尺ばかりにて、

兼三秋物 辨慶草

和漢三才画会 景天和名以岐久佐 俗よめり 辨慶草 本綱に景天極めて種易し、枝を折て土中にさせば、即日便ち生ずる、二月苗を生ず、脆き莖微赤黄色を帯び、高さ一二尺、ともと折れば汁あり、葉淡緑色にして光沢あり、柔に厚く状長き匙の頭及び胡豆の葉に似て尖らず、夏に白花を開き実を結ぶ、連翹のごとくにして小く、中に黒子あり、粟粒の如し、人皆盆に盛て屋上に養ふといふ、火と辟べし、故に慎火草の名あり、按ずるに景天、佛甲草に似て大なり、こまごまと折取て褥間に倒に懸ること数日を経て猶活ず、後地に栽れば亦活ずと馬歯莧に勝れり、蓋辨慶ハ源の義経の家臣にして、女童相伴へて強勢の士なりと、故に相比べてこれを名づく、以岐久佐も亦活の字訓なり、

布瓜

時珍曰、六七月黄花をひらく、五出微胡瓜の花に似て慈悲花と辨ず、其瓜大さすだれ瓜の如く、長さ一二尺甚しきは三四尺、深緑色、皺の黙あり、瓜頭鼈の首の如し、嫩なる時皮と去る、蔬に充老るときは大さ杵のごとし、

蛇蔓

和漢三才画会 大毒あり、故に人近よらず、

紅蔓

陰処に生ず、其繊紅色裏白く細き刻有て毒あり、蛇あり、故に穴に入、

八月

月令 仲秋月雷始収声蟄虫坏戸〇和俗春の彼岸に出、秋の彼岸に入ことの人あまねくとなへ来る事なり、

七月 とゝ〜妻

稀にとゝき妻と、故に織女年に一度まれにあふことをとゝ〜妻とよめり、稀少の義と

聚りて、男子大鼓と撃笛と吹踊とをなす、是と灯籠踊と又、頭上ふ載く所の灯籠、踊る女子の家々、春の初ふよりてと作て、互ふ其作る所の摸様と秘スル云々

鳥屋勝

鷹新毛と生じ羽翼全く備ふ、鳥屋と出るの時、逸勢特ふ秘をべし、これを鳥屋勝と云、〇去年よりハ色まさりハ

鳥居の火

せの部施火

蜻蛉

秋津虫 ウケロハ ヤンマ

邦の形蜻蛉よ似るを以て、秋津州と名づく、

和名抄 蜻蛉 和名加古布介 合布 中略 水辺の木蔭ふすゐてその尻を水ふ点し、閃々と電のごとくなれど、陽炎ふ比ていふるあり、

和漢三才畫会 蜻蛉ハ總名なり、大ふして青色ある者紺蠅、一名天雞、大ふして玄紺色の者胡黎、一名江雞、小ふして黄色ある者馬大頭、最大ふして身緑色、赤卒ハ小ふし、て赤きものあり、

富草の花

風俗哥 あらそふとみくさの

墾まで活法の書ふ、織女の異名のやうふ有べし、年七渡出ずるハ、いかゞしかあらむ織女の一渡る意あり、

万葉 玉燈

織女の年ふ一度天の川と渡る、

籠

一切經音義 燈籠又爐ふ作る、火の居所ふ允火と盛の器と爐といふ、

紀事 元中元燈籠を用ふる、寛喜前後ふ起て、今ふ至て相續て故事とを、定家卿明月記 近年民間ふ長竿と建てその末梢ふ燈籠と設け、紙と貼し灯と擧て遠近とりふることと見る、流星ふ似ふり、

五雜俎 宋の初ふ中元下元皆燈と張ること上元の例の如し、太宗淳和年中始てことやめ、〇本邦の俗、中元の夜家々燈と張て廿四日乃至晦日ふ至る、或ハ朝日より三十日ふ至るもあり、又白き提灯と出をもあり、〇高燈籠、折掛燈籠、花燈籠、禁裡御燈籠、キリコ燈籠、以上各頭字の部ふうちて詳を、舟燈籠影燈籠、舞燈籠、揚燈籠、

増山の井 ふうそふり其形容未考、

燈籠踊

紀事 洛北岩倉花園、両村少年の女子、各大灯籠と戴き、八幡の社前ふ集りて、是と灯籠踊と吹踊とふくむ、是と灯籠

そ多くて木つゝと入てこやこへまるゝ
らん云々稲の花をいふとしるべし、頼桐 天和本草 倭俗、
三尺ゐすぎごぞ、夏紅花をひらく、花繁多
ゐて盛り久し、美ゐて愛をべし、蓖麻 ひま
うせと 和名唐荏又からごま、葉ハ大麻の如し、甚ざ
大まり、夏冬の間花穂を抽て色黄と、高さ丈余ゟ及
ぶ、實あり大

蕃椒 才曲会

蕃ハ南蛮の義あり、俗ゐ云南蛮胡椒今唐芥子二月種
と下し、葉椒の如くゐて小、亦胡椒の木の葉ゐ似て和く
五月小白花をひらき、実と結ぶ數品大小長短実りさる
と四きとの種あり、初め青く熟をれハ紅あり、秀ゟ吉公
朝鮮と伐とき、彼國ゟり渡る故ゐ俗又高麗胡椒と
りゐ、〇天井守、蕃椒の一種、とぐく上をむく故ゐ名く
とぞ、猿蓑 附夕 たんごそう

唐の芋 ゐと連禅紫芋とりゐ蘇恭曰毒少し、

まもりいろ色つく、煮て食ふべし、時珍曰連禅芋甚大みて
子少し、〇茎紫色と帯ぶ味美く栗のごし、烏助 かの

部案山子の条ニ出づ

八月 富賀岡八幡祭 十五日 名所 記江

戸城南深川ゐあり、祭る所鶴が岡ゐ同じとりゐ別
當大栄山永代寺 台宗深川ゐあり、神体
ハ菅公の作まり、源三位頼政深くこゝろを崇む其後
千葉家ゐ移り、足利高氏ゐ傳へ、基氏持氏小至り、後
上杉ゐ傳へて、太田道灌ふくくこゝろ 磯石集
寛永元年、長感法印夢のごとありて、永代島ゐ宮居
を建立し、同八年成就を、〇深川の土人本居神とす、
祭礼八月十五日放生会まり二三十年ゐ一度ゞ祭ごと行ふ、
とよら 神社啓蒙 長門國豊浦郡亀山ゐあり、

豊浦祭

祭る神、中ハ應神天皇左ハ神功皇后、右ハ
仲哀天皇まり、 三十一社註式 人皇五十六代清和天皇貞
観元年、男山ゟ遷座の時行教和尚行宮を造てこれを
勸請を、後土御門院文明年中建立を、〇今八月祭ゐ、
三月十四十五日の両日亀山祭まりこゝを先帝祭りとゐふ、
安徳天皇の御祭礼まりと、阿弥陀寺ゐ御陵まり、海辺
ゐ宮まりその祭前後四日の間鳥飛ことを得ず、又平

家蟹赤間が関の海辺ふ上る、常ハこのごとなり、是ハ先帝の神祢月と里民ゝ乀り、又九月十四日十五日八幡春日社両社を祭る、國主より馬二疋を牽き競馬あり是ハ幡祭ゝ

烏頭 蘇頌曰附子其苗高さ三四尺莖四稜を作、葉艾ふ似て其花紫碧色、穗を作て其實細小桑椹の如し、黒色本附子、一物を種成熟をふ至て四物あり、天雄烏頭側子附子是ゝ

黄蜀葵 時珍曰二月種を下し、或ハ宿き子土ふ乀り生ゝて夏ふ至り始て長ゞ、葉の大さ蓖麻の葉の如く、深緑色岐子を開く、五の尖ったあり人の爪形の如し、旁ふ小き尖あり六月花と開く大さ椀の如し、蜀黄色、紫心六瓣やゝ側てり、且ふ開き午ふ収ゝ暮ふ落、亦呼て側金銭花と号す、其莖長きもの六七尺皮を剥く繩索とあをべし、

木賊刈 禹錫曰木賊苗の長さ尺ばかり、叢生を根毎ふ一幹花も葉もふゝすゝふ節あり色青く冬と凌て凋ゞ四月ごまを採、○時珍曰木骨と治る者、色と用て磋擦と免ハ光浄あり、木の賊とゝ似ゝ、和漢三才画会物と磋

と磋の如ゝ故ふ磋草と称ゝ

○本邦秋月ごろを採る、

胡黄連 千振和漢

三才画会苗の高さ五六寸、一根ふ数莖其莖細くして淡紫色葉地雷草ふ似て小く七月花をひらく桔梗の花ふ似て小く黄色、○千振大和本草胡黄連ふ同ゝ

酸醤酢 大和本草酸醤花の條下ふ云、本邦の八白花千葉の如ゝ、依て筑紫ふて菊ゞぞらごこの八中花ふ黄色ある者ありと農政全書ふ記せり、故ふ黄色の酢と酸醤酢ごらく、

唐黍 江戸の俗ごろもう

あゝとのふ春の日待意ゝぬ殿を唐黍ごの〳〵ろさん 荷分

九月杼の實 穉頌曰三四月花をひらく黄色栗の花ふ似て、ごくせゝ山木ふて丈木あり葉の大さ七八寸実ハ栗より少く大ゝ餅ふ作ゝて麪とゝて、山羊の食ともゝ、木ハ斑文あゝて、諸の器ふつくり箱ごもゝ甚美ゝ

木曽の山中ゟ多し、是を麪ともするゟ、其粉と熱湯をこね合て温飩のごく〳〵棒ゟ捲て温ふる内ゟ急ゟこと〳〵と伸ざ、其手廻ー〳〵と伸ざ、冷まゝ堅く縮つて伸ざる故ゟ、俗諺ゟ掾麪棒ふるといふゟ是ある也

桐實 のこ

天和本草 荏桐とも油桐とも云、タモと訛ぞ

るゟ非あり、桐ゟ似うり、其實大きゟあり、食ふべうらぎ、實ゟ油多し、民用をたもく、此油をぬりて青漆の如くそう法あり、〇時珍曰、虱子桐の實を荏桐と名く、虱子の實ゟ似るゟ因てあり、荏ゟ其油荏の油ゟ似うるゟ

和漢三才圖会 濃州江州多くそこと種、油ーうも同じ、煉成て漆ゟ代ゟ、志ゟりうる事を敗る其功荏の油ゟ同じ、煉成て漆ゟ代ゟ、桐油漆と名く、五色とぬるべし、常の漆ゟ白色ゟ塗るゟ水を漏さゞるこあとそで、又松脂とくそ〳〵舩槽と塗るゟ水を漏さゞるこチャンとりふ〇年浪草ゟ桐油、ダモ、同物といふゟ是ろ

唐栃 くくうせる 擗麻

いの部ろる也ー

團栗 魚化果の異名ゟ、どんぐり

ドングリゟ椈の一種小椙といふ木の實ゟ、椎ゟ似て大ゟり、味淡く食ふべし、椙の形狀ゟの部ろべし

七月中元 十五日 修行記

道書ゟ云七月中元ゟ、大慶の月、下ゟ降り心間の善悪と定む、諸大聖普く宮中ゟ詣、道士その日夜ゟ於て經ゟ誦し、一ゟの大聖ゟせこく灵篇を録し餓鬼囚徒ゟりふ解脫を得せーむ 五雜俎

道經ゟ正月望と以て上元とー、七月望を中元とー、十月望を下元とそ、遂ゟ三元三官大帝の称あり、是俗妄の甚しきゝ、

地藏祭 廿四日 紀事 洛外

六所の地藏詰あり、加茂卿泥ゟ池、山科、伏見、鳥羽、桂、太秦にゟこゝ九一日六所の行程十四里ゟ、文徳天皇仁壽三年、小野篁地藏の像六体を造て木幡の法雲山大善寺ゟ安置ゟ故ゟこの所を六地藏村といふ、その後保元二年平清盛、六ヶ所ゟ堂を造つこゝゟこゝをわのち置く、七月廿四日供養、西光法師こゝゟこゝを興ーし行ふ今ゟ至りて七月廿四日諸人六所ゟ詣そこゝゟこゝを地藏祭といふ洛下の兒童ゟ又各香花を街衢の石地藏ゟ供ーしてこゝゟこゝ祭る又今日六齋念佛の徒も又六所の堂ゟ詣て太鼓と撃鉦と鳴ーし、以て踊念佛をふもゟ、俗これと六齋太鼓と

称を、洛東光福寺千葉の一流ちりぬ、ふく風やさむしのらんふくれむいやこようる声のぬ、

本草 白菜、本艸ふ蘇頌が云春芽を生ご針のごし、俗ふこまと茅針といひ小児好て食ふ毒あり、血を破て血を止む是ご、

九月重陽

潜確類書 重陽、魏ご文帝の鍾繇ふ與る書ふ歳往き月来て忽ち復九月九日、九ご陽數ごて日月並び應ご故ふ重陽ごいふ、俗其名を喜ごて長久ごて宜ごんず、故ふ宴ごて高会ご享を、

重陽宴

公事根源 九月九日ハ節日ごて侍まご菊の宴行ハるゝこまご重陽の宴と申、九月九日ハ、月と日と九陽の數ふ叶ふがゆゑふ重陽といふまり、むごハ天子南殿ふ出御ありて、節会行はるゝ、上達部、御子達より始て、其道のハかせ撰韻給りて、文つくり文臺ふあて講ぜらる、十月の旬のそふあるもそけふも永魚さまふ例あり、又羣臣ふ菊酒ご賜はる、大ゝいハ五日の節会ふおまふ、御帳の左右ふ菜萸の袋ごとりけ、御前ふ菊瓶をおく、又茱萸の房ご折て頭ふ挿めご、悪氣ごさるごいふ本文あり、下巻

千代見草

異名分類 ちごうむ夜ちよひ草　菊の異名あり、慈童八百余歳の後出て、彭祖ご名ご替て、長壽の術ご魏の文帝ふ傳へ奉ご、文帝百歳の壽ご成さまつり、和歌ごも菊ふ千ご世の秋ご詠ぜらるゝご珍しうもご此意ちぎりぐきおて名付侍るおや、

契草

和漢 國ふ兄弟あるもの世ふあごべて、弟ハ筑紫へ行るゝごきご、兄庭前の菊ご、一本ご二つふごけつ、意ごうえとりハさがひふ此きくをごてものぐさむごごいふ、弟筑紫へもちつく下向ごて、此きくごうるおりご、この菊二ふ分しまふかご枝ごう

和漢 ふ花咲ゝるごいふ、

兼三秋物

律の調

索隠 曰按ぞるふ律十二あり、陽六ご一律ごこゝ、

黄鐘 大蔟 姑洗 蕤賓 夷則 無射 陰六ご

呂氏 大呂 夾鐘 中呂 林鐘 南呂 應鐘是也、名づけて律ごふ、〇貞徳日ごもれもらべ秋ごいふまご

呂の声ハ春よろしきべき道理あるまじ、其さこそあるなれバ呂を雅やかに云、

八月 龍膽（りうたん）　竜胆

和漢三才圖会 其葉、笹の葉に似て厚く、九月花を開く、花紫にして鈴鐸の形のごとく、上ひむく、花中ひ蒼子あり、又正白花の者あり、笹龍膽（さゝりんだう）ともあづく、八雲御抄 こもと草（りんだう）と云云 ○思ひ草 八重垣 龍膽とのまと露くさとの八通具卿説「道のくの尾花がもとの思ひ草今さらさまで物をおもふらん ○くさふ 真淵翁云、木丹ハ桔子の花也と出る是ニ、源氏をとめの巻ひ四季をいへるその夏の方ひ花橘撫子さうびなどふのみの花くさぐさうもてこもあり、是ニ乱夏ニくさふいくちれ〳〵あること明らか〳〵、○尾花がもとの思ひ草ハ龍膽と定家卿の御説なまじゐにを龍膽と心得るハ誤ともろべ〳〵ぐら〳〵おく〳〵

九月 鯉魚風（りぎよふう）　九月の凡こ 李賀詩 明前流水江陵道、鯉魚風起芙蓉老、

ぬ

兼三秋物 零餘子（ぬかご）　野山菜ともに草薢と蔓

葉の形狀混雜して分別をづ〳〵、草薢亦零餘子あて山藥のごと、故ひ諸説草薢と以山藥と以山藥ハ其蔓紫色と帶ふ、其葉四く尖あり、其花白色穂とふ〳〵して下ニ垂る、草薢ハ其葉四くして尖ハ其葉青色淡黄の小花とひら〳〵、暗て莢ニ結ふ、三稜あり、山藥もまこ莢とむらぶ故ひ見易らぞ、

九月 白膠木紅葉（ぬるでもみぢ）　時珍曰 櫨木の形椿のごと〳〵、五六月青黄色の穂とあす、一枝ひ累々さう、七月實と結ぶ蠟書り、五倍子と結び成ま、

八月 縷紅（るこう）　くさぜんそ　蓼葉ともひ細く杉葉の如し、蓼より蔓と出し、八月ひ紅花と

和漢三才圖会 碧鳥俗ひらく形丁子ひ似て長さ六七分の花あり、愛まづし、瑠璃鳥（るりてう）　頭背翮上翠色頬頷臆云留里犬さ雀のごとふ〳〵して、下ひ至て純黒胸腹白く觜脚尾具ひ蒼色、其声圓滑ありて清く囀る、

る

七月 鬼の洞念佛（おにのほらねんぶつ）　七日より

滑稽雑談 洞八八瀬河の西の山中ゐあり、俗鬼の
まそ 洞といふ、口狹く中闊し、高さ二丈許、深さ三丈昔
酒顛童子、此洞こう丹波の大江山へ移ることしかゝを
昔叡山ゐ一童あり、僧徒其美しきと愛をと勸酒交歡の時
時人と殺血ととり、酒ゐ和してこれと飲む、一旦魅こをて
此洞ゐ入云々此話羅山詩集酒顛童子の洞ゐ題すとゝ
る序ゐ見えたり、雍州府志 毎年七月七日より十五日ゐ至
村中の兒女此洞ゐ聚まりて鉦と鳴らし、大ゐ弥陀の号と
唱ふることを先祖祭とのふ、 踊 らげ、軍士ふとりへて訝鼓戯とふし、
書言故事 王子醇 らめ默可と平
遂ゐ世よ甚だ行はる子醇西人と對陣せし時、軍士百
余人よ命じて訝鼓とふしめ隊ゐ軍前ゐ出さしむ、虜見
て驚き愕く、遂ゐ其ことと擊破る注ニ云訝鼓戯ハ樂人
雜劇ことをして跳躍とをるゝ世人皆こゝゐ效ふ〇本朝
の俗、七月十四日より晦日よ至る、毎夜大人小兒街頭よ
踊どふを、〇懸踊、念佛踊、題目踊、燈籠踊、伊勢踊、
木曽踊、小町踊、七夕踊ホあり、 折つけ燈籠 用捨
各其頭字の部ゐりもて註を、 箱魂

祭よむうー用ひー折りけ燈籠と江戸ゐハ絶ふ、中略 續
虚栗 貞享四年 親ハ鬼子ハロとうき蓑虫よ 其角 折り
附句刻 けもろ七月の文月 野馬中署 竹藪と折りけて、その俗垣よ
もると折りけ垣といふ、此燈籠と竹と折りけてつらる故の
名ありうりかれみそいなく家こみそつろうーとれぼーく、
よく竹とおーとめるるりかるとと又名のごく折りけて上を
ぐく形のところきてあり、とぐら 麻柯の箸 聖灵祭ゐ供ふる
一ッ一ッふ異ありしとぞ、 箸と 續蔗蓑う
ふーうる麻木の箸もとふるうし惟然〇特珍 送つ
曰大麻其稭白うして稜あり、輕虚燭心とをべし、
ひむの部迎へ火 女郎花、 茶花 和漢三才圖会
の条ゐ注を、 女陪之山麓ゐ生
も、高さ二三尺莖ふ稜理ありて莖ふ似うり枝兩々
對生し節の間ゐ葉と生ず、其葉三七及前故の葉ふ
似て細く長し、七月穗と生し花と ひらく、最細小正黄色
愛をべし、本朝文粹ゐ源順の詩云、如蒸粟俗呼為女
郎者是あり、隨て子と結ぶ花白きと者男倍之と名づく、
大和本草 敗醬 藻塩草ふ白花あると俗ふとゝこへし

とつゝ又オホトチハ女郎花ニ似て花白きこゝろとこゝをこゝなの花ともいゝ敗醤と名づけ〳〵ハ此花葉の臭將軍の損じこゝろゞ〳〵と本草ふいへり今試るふ然ゝ○此花を女子の艶姿ふさゝへて讀ゝ敗醤ともよ同じ古今名よめでゝこれろだりそゞこゝをへ〳〵われおちふきと人ふこゝろゝ僧正遍昭　續猿蓑　ゝこゝろへ〳〵鵜坂の杖ふくゝ萩の凡　大和本草　萩ハときゝつゝ馬莧　萩　萩の声　いふ淀川其外處々ふおほ山野ふも水辺ふも生ぜ、中実こよ〳〵ぜ〳〵少ハ其中とやゝ葦とほゞり生ゞ似るもれど水草ゝ〇萩の葉凡やうて音ふこと萩の声　おきふぐさ　大和本草　麥門冬の一種とも萩の上凡ことのふ、

翁草

ふゞ、暮春及び夏の初め純白ふり、故ふ翁草といふ後漸く青くふる、根小門冬あり、凡大葉麥門のごとくふて異草ゝ　滑稽雑談　桜もるふ、和名鈔ふど白頭翁と翁草と和らげゆり、然ゝどゝ本草綱目と考ふふ別種ゝ、白頭翁ハ俗ふいふ猫草ふ畧似ゝり、今云翁草ふハあらぎ、翁草ハ初生の葉純白ふり、秋月紫花とひらく、

穂の如く猫考ふべ〳〵又菊とゝゝ混をべうらず、九月の部ふ註を、

第切草

和漢三才圖会　初生地膚子ふ似ゝり、両々相對し枝ふ都ふり、莖葉こゝと捻めぞ汁ふり、須臾ふして葉色ま變ぜ、六七月小黄花をひらく單五辮ふり　細き三棱ふり、英と結ぶ三稜ふり中ふ細子ふり、藥ふ用ふ、相傳ふ花山院の朝ふ鷹飼ふり、晴頼と名づく、其葉ふ措一ゑを神ふ入鷹傷と被ふることふる時ハ、葉と按ゝてこゝろを痛ともこゝ愈ゑ草の名を乞ひ問ともゝて言ぞ然ゝふ家秘密ふこゝと露洩晴頼大ふ怒てこゝと又傷ゝ、草と名づく、〇又薬師こゝろ鷹の良薬とゝゝ弟切草と名づく、　慈鎮和尚禽鳥　白頁　秋の野ふきこゝろもあゝる書くをりふて〳〵鷹をやゝ〳〵もゝゝん、

旋覆花

生ぜ、多く水の旁ゝ

蕪頭曰二月以後苗と

近〳〵、長さ一二尺、以来柳葉のごゝ〳〵、莖細ゝ六

月花と開ゝ菊花の如ゝ深黄色、七八月ふ及ぶ、

兼三

秋物

鬼芝

時珍曰葉芽のごくゝて、長さ四五

天、甚ぞ快利ゝて人と傷ること鉾刀の

如を、芋生の浦伊勢ふ、和哥ふたへの浦、梨を、てそさもそよ一ふ、古今と、人のふらふそさ一ふ、小田守、晩稲守 山田守 九田と守る、稲と守る、人畜の傷殘ことを防ぐたをもふ、八月尾を、花の粥 大内記田原康富日記 文安五年八月朔日、卯云々尾花の粥の事、その由来何事ふるや、自然見及ぶのよ一問一めてあふいまぐ見及ぐぞその子細とふらぞれふ一返答一畢ふ、海人藻 八月朔日、小花の粥、内裏仙洞以下令用給、良薬、云彼粥調法、薄黒焼ヲ粥ニ入合也 後水尾院當時年中行事八月尾花の粥ふ、和漢三才圖会 白粉草 云々尾花の粥の事、その由来何事ふるや、自然見及ぶのよ一問一めてあふいまぐ見及ぐぞその子細とふらぞれふ一返答一畢ふ、朔日、小花の粥、内裏仙洞以下令用給、良薬、云彼粥調法、薄黒焼ヲ粥ニ入合也 後水尾院當時年中行事八月尾花の粥ふ、和漢三才圖会 白粉草 紫苑の事ふ、古今 秋ふ、

古今 とふのふらふふえさ一ふ、梨をてそさもそよ一ふ、古今 とふのふらふふえさ一ふ、梨をてそさもそよ一ふ、

なふ一のふてもれらそことねこうふらふ、

稲守 山田守 九田と守る、稲と守る、人畜の傷殘ことを防ぐたをもふ、八月尾を、

花の粥 大内記田原康富日記 文安五年八月朔日、卯云々尾花の粥の事、その由来何事ふるや、自然見及ぶのよ一問一めてあふいまぐ見及ぐぞその子細とふらぞれふ一返答一畢ふ、朔日、小花の粥、内裏仙洞以下令用給、良薬、云彼粥調法、薄黒焼ヲ粥ニ入合也 後水尾院當時年中行事八月尾花の粥ふ、和漢三才圖会 白粉草 紫苑の事ふ、古今 秋ふ、

朔の条ニ云、夕ふの御いもひ、初献よ、和漢三才圖会 白粉草 紫苑の事ふ、古今 秋ふ、

そ一てとぞふのふ色ききのもし、と供ふ、

紫苑の事ふ、古今 秋ふ、

の部ふるべし、

白粉の花 和漢三才圖会 正字未詳、春苗と生し冬枯る、高さ二三尺叢生ふ、葉淡青ふて柔く、白雞頭ふ似て微小く四一、其花朝以後萎ふ夕陽ふ至て開く、深紅色五出、單一、漸ふて蕊の長さ一寸余、亦紅花の中ふ紅の蕊を出ふ、細く糸の如し、蕚の本ふ子を結ぶ、灰黒色、微明椒の如くふて中ふ白粉ふふ、ふとまと採て婦人の面ふ塗、光沢鉛粉ふ優ふふ、〇中華の書ふふえぞ、外國の物ふんと、大和本草ふそふ、

車前子 蘇頌圖経 春の初の苗と生ず、葉地ふ布く、起の面の如し、羊ふ累一者長ふ尺余、中ふ數莖を抽て長き穂を作ふ、鼠の尾のふく、青色微赤き実を結ぶ、莩蔍のふし、今人五月苗を採て七八月実一採 滑稽雑談 此者苗或ハ花とふて、むふ吉来ふり実を以て八月の部ふせり、故ふ准べきふ、

尾花 はの部穂名 思の条ふ出ッ、

草 その部龍膽 ソラスケトロ 二の条ふるべし、

黄蜀葵 名一物ふこの部ふ、

落穂 詩經 此右滯穂伊寡婦之利注云滯、遺レ棄ふの意ふ、収成の際ふ滯漏の禾穂ふらむ、寡婦ふ是ふとりて利ふもふふ、此豊成餘ふそ尽ふく取ふ、又緑蓑ふふる」と共ふふる

ことを見えたり 列子

拾穂者行歌ス

落鮎

渋鮎 下簗

八月最長こと久ふ

通し、此時鮴苓子の如き者腹ふ満、其背炎斑の文と生を、刀刃の鏽くさび如し、故ふ鏽鮴しの入八九月湍の水草の間ふ子と生こ後漂泊ーて流ふ遠ひ下ふ死そ、是落鮎ふり、其下ふ落るものと特、簗と構て以てこれと捕へ名づけて下り簗とい入、

九月

九月ふり肉痩ー味甚劣る、

岡崎祭

十五日或ハ東天王祭、九月十五日、洛東岡崎まおり、名勝

十六日 忌 九月十六日祭礼云云 紀事 東山岡崎寄正一位東天王祭、神輿一基鉾七本ひ、その内一本の鉾劒ふ、大一疋と造こ、彩色と施そ、下ふ埴と以て鷹二連獺犬一疋と犬鷹鉾とい入、其傍ふ感神院の三字を彫刻そ疑らくハ旧感神院の鉾ふ云云當社ハ聖護院の杜ふあり、故有て吉田の地ふ移も、然るふ同神社亦岡崎ふ在を故ふ東西と以てこれと分つ、雍州府志 犬鷹の鉾ハ、村入神宝と称す

豺祭獣

月令 此記、戌月之ーてこれと祭む 侯祭獣者祭之於

天ニ戮禽者殺之食也、

弟草、少女草

菊をいふごとく草同前

と薬塩草ふ出多り、

梅と花の兄といひ、菊と花の弟といふ、故ふ名く、〇古哥露ま

でをあひおもへう一少女草、あらき風あをこ花ハあそび給ふ、

公羽草

菊とも松ともいふ、住吉の里ふ五位の松とて、年ふりてる松ありこの社松の神やあらけん、後ふハ化ーて公羽ふ成て住り、常ふ心ををゆーて琴とちらべ又庭ふ菊とうゑて愛ーる人公羽ガ三の我庭きし の松蔭もそのぞそむ、翁ガ草の花もさろあん、〇此故事ふよりて、松とも菊ともそもやふ公羽草といふ、

老母草

一莖と抽で淡黄ふ花と開く、

母草の實

三四月一莖穂の如ーふ結ぶ生ハ青く熟するとバ真紅、累々とーて天上南星の実ふ似て可愛 三才画会 万年青、葉芭蕉ふ似て蓬ふーて衰へず、其多壽と以て万年青と名く、 大和本草 落唇ふハ一切祝儀ふ用るよし、花鏡ふこれあり、

栗

熟せんとーて子出て、其苞自ら裂けて地ふ墜る物是ニ、

遲稲、晩稲

珍

日糎稲早中晩の三収あり、六七月収る者と早粳と、八九月収る者と遅粳とも、云云是遅稲ふり、時珍曰十月収る者と晩粳とす、云云是晩稲ふり、**落水**【芋譬拾遺】田のおもてより、水ところ〴〵に落ちて、畿内ふ八所々稲と苅て後、田ふ菜種を植るし故ふ両作所といふ、田の水を落すに菜種と植る用意、**おも**

すん【くさせこと】鉄懇の木と旧事紀ふ載たるあり、秋甚紅葉して、立花を好む者秘蔵して是あり、

わ

七月

早稲【せ】時珍曰、六七月収る者と早粳とふ食ふこと挟を、あら売べし、

童相撲【扶桑畧記】延喜元年七月廿八日丁丑、童相撲廿番を御覧、綾綺殿よおいて此事あり、【古今著聞集】延長六年七月六日童相撲廿番終つて群と奏も、

兼三秋

物

木綿取【桃吹】【和漢三才畨会】其実桃の如すこと桃吹といふ綿車と以て中の子と繰り去も竹と以て小弓を作り弦と挙て綿を弾くそれと匀と

し四ツふ裂て中ふ白綿と出

いふ、**若煙草**【和漢三才畨会】煙草　相思草　淡婆姑　淡芭菰　羅山文集　佗波古希施婁、皆番語也、云云　按ずるふ天正年中、南蛮の商船始て此種と貢も、以長崎の下も、五月移し植、新芽を摘去て虫ふと除くこと、毎旦怠るべからず、高さ三四尺、葉商陸よ似て長大、七八月葉と采て、藁苾を覆てこれとねさし、盒一宿して取出し、一葉ことふ繩ふもちゝみ、編ごとくにして後晒し乾し、一夜露宿して後晒し乾も、黄赤色となる、

楓蘭【和漢三才畨会】これとくさぐさ笑ひて止ず、云云若煙草是ありと、

八月

渡鳥　此月諸鳥異国より群飛して、山林江湖ふ来る是と渡鳥といふ、

九月

度會新嘗會　外宮十六日、内　内裏より初稲を伊勢両宮へ奉らせ給ふ、大嘗会といふ、即位の後日本國中の神々へ御饌を奉らせ給ふをいふ、新米と奉る故よ早稲米の御祭式、

吾亦紅　陶弘

景曰地楡其花子紫黒色、穀の如し、故ふ之玉穀と名く云云是花景ふいふワレモカウ、本名玉穀一名地楡比叡山薬馬及び近江ふ生ず宿根より二月苗と生じ初生地ふまん〳〵独莖直上、高さ三四尺、對し分つて葉を出す楡の葉ふ似て稍狭く、細長くして鋸の歯の状うを似て青色、七月花をひらく、穗子の如くふこ紫黒色、

七月 梶の葉姫

棚機七姫の内おう

異名分類 梶の葉姫

八雲御抄ふ梶の葉ふをの書も、皆由緒あるふ云云溪雲問答ふ芋の葉の露と硯の水とふ、梶の葉七枚ふ歌一首づゝ書よゝとそゝふ、是等ふようふ、

梶七葉

皆二星と祭る具、尊要の物と以名付とこえう、

年浪草 和俗七月六日、市中ふ穀の葉と貫、明夜詩哥を書て以て二星ふ供ふる所あり、又短冊ふ梶の葉と用て詩歌と書く、

和漢三才圖会 和名加知 俗云加波 按をるうち楮の皮今多く紙ふ造る、又布ふ織、往古ふ木綿と称ふ今も亦祭祀の人木綿鬘ふ被る上古の衣服ふ象る歟、今二星ふ供ふる時、詩哥と穀の葉ふ〳〵と牛女神と祭るの故ふ木綿の義ふ象るうゝ、〇菅章長高辻家朗詠抄ふ曰、昔余吾の海ふ天人下ゝ、羽衣を獵師ふ盗まれ心あらずゞ獵師の妻とをり、年月と經て羽衣を取得〳〵天上し再び人界ふ下ゝて獵師と共ふ天上ゝ、女八織女とをり男八牽牛とをる其再び天へ上るの時、梶の木の上より糸とお後し、是ふ取付て登る故ふ二星の手向ふ梶の葉と用い願ひの糸ふて五色の糸とゝ用ふと、云云暑ゝて愛ふ記、此事淡海志おき云云、

梶の鞠

あの部飛鳥井鞠の条ふ出つ

河鼓

志の部二星

烏鵲

の条ふ出つ

橋

澡塩草 鵲鷺記ニ云史記ふ云瓊ふ夫婦あり、夫を遊子といい婦を伯陽とい、偕老と契ゝ子八二八の候陽八三四の旬也と、云云此文のこゝろハ遊子十六歳伯陽十二歳より夫婦をる互ふ志切ゝ共ふ月と愛まるゝと限ゝをゝ〳〵夕ふ八月の出るゝと待て里ふ行暁八月の入るゝと惜ゝて高峯ふ上る伯陽九十九ふゝて死も遊子深く歎て月と形見とこゝろるほどふ或夜伯陽鵲ふ乗て空と飛やゝこゝろるゝぞ遊子殊ふ歎きて百三歳ふて

死せり天の是とゝめて烏小乗て天と飛行て銀河ゝ望て川と隔てそうそくせしと帝釈毎日此河ゝて水とゝび給ふ故ゝ水けがらを有て渡ることを許さず然りといへども七月七日ゝ帝釈善法堂へ御参ありその日あれば水とゝび給ひて渡ることを許さる年ゝ一度とゝども人間の五ゝ一日一夜あり此ときき烏と鵲と羽とをもつゞ橋とゝて彦星織女と逢ときゝ是と鵲のたゝしきゝ鵲ハ畿内東北の國ゝこゝろふ筑紫ゝ多し朝鮮より来らふや高麗烏と云鳩より小くつゞみより大く羽ゝ黒白あり尾長し本草ゝ載る鵲ゝこゝろふく合り門

茶 せの部摂待 **懸躍** 紀事 十四日より晦日ゝ至て夜ゝ入大人小兒街頭ゝ躍てとゝどうを催し或ハ又各同列ゝて相知處の家ゝ至て大ゝ踊躍とすゝ是を懸踊といふ掛らるゝ所の家再び踊躍を催して二三日酬ゆ

蜻蛉 うの部こんがうとんぼ 鎌切同物是を返しと称ゝ

螳螂 いの部 御傘 拍ちる ハ夏あり無言抄ゝ秋と有を辟事ゝのがやりの常盤木の散ハ夏ゝ今此國の人の申拍ハ初秋ゝ紅葉してちるものといふゝ此注よつてて無言抄ゝふまちるゝ

つゝゝゝそうり 増山井 夏の部 貞享式 此拍ハ御傘ゝ説ありて論語の松柏と證秋ゝ

とゝ畢竟ハ雞とゝもゝ名くれども爰ゝハ散字と結びて秋と定へきゝこと下裏

兼三秋物

桂 男 いへる條ゝ出づ

鳥来紅 葉雞頭 時珍曰雁来紅 葉笠葉

穂子ともゝ雞冠と同ゝ其葉九月鮮紅くるまごと望ゝ花のごとゝ故ゝ名く呉人呼て老少年ととゝ一種六月ゝ雁紅の者あり十様錦とゝづく〇雞頭や雁のくる時猶赤し 芭蕉 増山の井 雁来紅一説うまの花ゝ

枕草紙 ゝまの花ゝ

栃 時珍曰栃高樹大葉圓ほて光沢あり四月花をひらき雁の来と書とゝり云云

黄白色ゝ實と結ぶ青緑色ゝ八九月熟す〇栃 酢栃 白栃 胡桃栃 樹練栃 木淡栃 似栃 伽羅栃 山茱萸栃 筆栃 舎栃 君遷子栃 樽栃 樽栃 栃餻 藏器曰栃餻黄栃米粉を和しつゝ糗

蒸て小兒に與ふ食して下痢下血を止む、案山子 彈鳥却 和漢三才圖會 僧都添水 會 藝文類聚云、古者三皇の世ふハ人死して未埋葬嶺莽のまゝ畏ふ白芽を以しるしとし中野ふ投棄孝子其禽獸の食ふを視るふ忍びず、彈と作りてこれと守り、鳥獸の害と絶つ、按ずるふ俗ふいふ案山子今田圃の中ふ草偶ふ弓と持せ、以鳥雀と防ぐ〻備中國湯川寺の玄賓僧都の身そうまゝ秋晴まりて田ふ入稻と護りて鳥雀と驚りて勢そ、今ふ至て鳥雀と懼そ翁霊と僧都そ 續古今 山田守僧都 玄賓 和訓栞 傳燈録ふいふ玄賓そんばくふ人なり〻 玄賓案山子ありとそう鹿ぶしもふ是ふあり、信野ふて節分の夜いと〻豆ぶらとそ手と焼ぶしとらふ、焼ぶしの義〻、埃嚢抄ふハ炙串ともく とゝえそう〻と焚ハ臆測の畏るゝと傳ふる意もそ

増山の井 そもづハ添水と書て水辺ふもうけて水のちらと添て音と出を鹿おどしとそもづハ別の物ふれ〻、玄賓の山田守そもづと僧都よそふてよく給つる故ふ鳥おどしの人形と心得て、古哥ふとうめるとも多し、然もども実ハ別の物〻 石川丈山霞酒集 竹箒 夏餘

上短く下脩し桔槹ふ野方て首と下流小矯さふる故尾尻石と戴く、旋轉俯仰我戸々の声と発揮もそ、蓮心院云我巨八竹筒の鳴声と声韻九あらバ、うまーぬ

鎌鼬 朗恒秘藏抄 家の中ふ鎌そふ物と立て、又それふ鍛といふ物とたて〻、菅笠ときせて立さるとハ鹿の田とそまもるとこれと鎌鼬といふ歌ふ我宿のうゆめ立るもそーふやわがふ山田ふ鹿〻 半山紀聞 説々あるとご、山田ふ猪鹿のおかすらぬ、

鹿火屋 半山紀聞 つく所ふ小き家と作て、壁炭何そとの嗅きものふ火とそゆもし、烟とそて〻鹿とやらひやると心得べし、或ハ香火屋又置蚊火そもご、字とうて書る所もあるふよりて、まごふ人もあるとご、用ふべらず又火の字濁てよそて、顕昭う飼屋の説ふ迷ふべらず云云

かせぎ 鹿の異名〻 玉葉 山ふてくるかせぎのけぢきふ 赤染家集 朝ぼらすぎ

世ふ遠ざうるほどそもてもてるゝ、 臣房卿哥「かぐ山

肩掛鹿 巨房卿哥「かぐ山のそゞかご下ふら

とけて宵ぬく鹿八妻こひもせで旧事紀に二三復令中臣祖天兒屋根命忌部祖天太玉命内抜天香久山之真牡鹿之肩而取天香久山之波波加而令占兆古事記の説ごとくおほやけ神代ゆく所作りごとそもそもかの木八和名抄に云櫻桃和名波々加一名 延喜式に云九年中御卜料波々加木皮八大和国有封の社ふ仰て採てこれを進らしむ、片鶉 夫婦相そひぬ、離れて居るといふ、駈鶉 塩

草鷲狩 こゝに八馬上ふそ鷲と居て、うち立て鳥ふ合するといふあり、

八月 菅大臣祭 十六日 雍州府志

京四条の南、綾の小路西洞院の東ふあり、南北道を隔て是善公の宅地、その内北ふ菅神の祭あり、是菅神降誕の地ふ故ふ社を建てこゝに祭る、神社啓蒙 或人云此所昔菅家の舘之一夜飛梅の天神とゝ八是ふ、今ふ飛梅の跡この地ふありて、又説ふ文子の宅ふて菅神をゞめて、迁座の地ふて洛の人阿米神と称し例祭八月十六日、社辺の氏子是ごと祭る、神輿一基、童子素袍供奉、社僧 ふそごべ

亀戸天神祭 廿四日〇江戸本所の末亀戸村ふあり、

侍ふ同し、寛永三丙寅年ふ建立て、祭る所筑紫太宰府の神祭礼八月廿四日、本所牛の御前と隔年ふ菅家の末巣大鳥居信路神宝天國の剣といふありこの外後水尾院の宸筆安楽寺の毛硯、もみぢの文臺 大閤秀吉公の文臺之運の師昭叟よこもんとゝいし紅葉の蒔絵等神庫ふ藏、祭の日奉幣ふ、貝割菜 菜の条ふ出、神楽ホ、近来正祭ふ、

苅萱 大和本草 霜草 菅草 菰草 節穂 苔菫の如くして

小ふ宿根より春苗と生ず葉ふ青白のこと筋多くまばらふて本末ふ通ず、四五月穂と生ず、中華の書ふいまだ見ず、菅芽の類ふ、カルカヤ ともいふ、新撰字鏡 農家内大臣〇萬葉集ふ苅菅ふあらそ、秋苅とうたふる菅とゝ、和訓栞ふ雀多久とゝ、菅川、菅菅 菅 和名 加夜 大和本草ふ七草ふ、

菅の軒端 陸名抄 茅 和名 菅 和名 スヽキ カヤ 長短一種あり、短きを者とかやといふ、

御傘　萱菅、萱ヶ軒端植物よあらざれど、秋ももふるまゝに道理ふかゝるの名草ハ、秋の木子大切なる故ふ用ふがおきてとゝ　つくりせと　御傘編集の時、事甚ゝ煩数よつて、如斯了簡多し、屋根よ葺て何十年よもつもの、秋季植物ふハ用ひゞたし、宜しからざる丈ハ去べらべし、桂の花　木犀　南方草木状　江南の桂、八九月花をひらく、子ふ小粒木犀ありて、本草綱目　菌桂　叢桂の二種あり、菌桂ハ巣枝の葉の如くして尖り狭く光沢あり、三縦の文ありて鋸歯は其花ハ黄あり、白のと、叢桂ハ其巣よ鋸歯あり、枇杷の葉の如くして粗渇める者、俗呼て木犀　蕪頭草　曰薑　と云〇本犀の花、香気高く人をして酔ひ、蕪草　草ハ巣竹よ似て細く薄し、亦四小ゝ荊襄の人煮て黄色と深む極て鮮好之　和漢三才画会　多く越前よと出もて染家必用の物とす、按ずふ倭の蕪草竹の葉よ似ず芒の類ゝ江湖大浦の辺山中最も多し、

老鴉瓜　王瓜　〇時珍曰王瓜一名土瓜、其根土気と作し、其實瓜ふ似ゝり、故よ土瓜と名く、王の字何の義とふことをもらざれど、瓜瓠子ふ似て熟するときハ色赤し、鵲喜てこれと食ふ故よ俗ふ鵲瓜、老鴉瓜と名く、三月苗と生し其蔓髭多し、其巣四ゝ馬の蹄のごとく、六七月五出の小き黄花とひらき、蔟とあすゝ子と結ぶこと累々として、熟するときハ紅黄の二色あり、大和本草　其実まろく長し、王章と云王瓜の実ハ丈ともすぐるふ似ざるふ人家ゝり、故ふ王章といふ、籬豆　本草を考ふるふ人家の籬垣の側ふ三月種と下すに苗叟生ゝて延纏いて籬と藪ふ故ふ籬豆と名く、又和俗破墻豆とふ、此豆一粒と植ゑハ豆八升と得ると、破墻と八升と音近し故ふいふ、

芥菜蒔　時珍曰芥数種の皆八九月ゝ種ゑ、

鴈　月令　仲秋月鴻雁来賓ゝ〇時珍曰雁の状も、鵝ふ似て亦蒼白の二色あり、今人白ゝして小あるもの、と以て雁とす大あるものと野鵝とす、雁ふ四徳あり、飛ときハ序ありて、前ふ鳴て後ふ和ふ其礼也、寒きときハ南より雁門ふ帰る其信也、偶と失ひて再熱きときハ北より南の衡陽ふ止る

ひ配ぶるも、其節也、夜群宿して一奴巡警をを書ハ蠱と
啄て繒繳を避く、其智あり、捕る者そもと拳て嬉とし
て以其類と誘ふ是一愚ふ南ふ来る時、瘠痩て食ふ
べくもも北ふむふ時肥故よそもと取べし、○白雁、鴻
鵠、海雁、たのむの雁、代りる雁、二季鳥、以上頭、字の
部ふわりて注を、○そらはぐらふ一種あり、目ふち黄
ゃて其外ハ雁の如し、○雁の書 漢書 匈奴前漢の
新方雁ハ頸長し関東にあり、雁武字ハ子卿
杜陵の人武帝の時節を持て匈奴ふ使ふて單于ふと降
さんと欲し武を幽し大窖の中ふ置、漢武と永し匈奴説
て言武死をと常恵漢の使者ふ教てをつむ天子上林
中ふ射て雁と得たり、足ふ帛書と係ぐ、武其澤中ふ在り
と是ふ由て還ることを得たり、古今 秋風ふ初りうるそ
きこゑあるたり玉つさをうけてきたりん 友則 瞻野落
著ふ荷分う文や 雁陣 本朝無題詩 雁陣数行
天川雁 其角 微月冷虹橋一道遠夫晴
茂 雁金 和漢三才圖会 所謂雁金とハ雁之鳴也
明 万葉集ふ多く此三字と用ふ然ども又雁

鳴者今者来鳴沼と詠ずるときハ自ら雁の名となるふ
ふ似たり、遂り雁金の二字と用ひて本意と失ふ云
雁字 山谷詩ふ云雁字一行書絳霄 ○談林
流発句 阿蘭陀の文字う横ふ天う雁、
鳥 和漢三才圖会 好て檀樹ふ棲ひ故俗呼て檀鳥
とふふ又懸巣鳥と名く形鳩ふようふして一頭背膜
共ふ灰赤色眼の辺ハ白色あり 翮及黒其小羽ハ青黄
の斑あり、啄二寸許稜ありて黒色脛亦黒し能鳴て諸
鳥の声とをなし又人の言とをすす商家除夜
元旦ふ爰つと食ふ以て借て取の義と祝ふ、 河鹿 和漢
歳時記 蛙く好そて山川ふあり、夏の季より秋ふ至り
て鳴声おかしくてのどやかなる詠ぜり俗傳
ふ西行ふ哥ありとふものハ臆説ありて考ふる所
あらず、その声鹿ふ似るとて、俗呼て河鹿と言ふ、 鯔
同書云正字ハ黄顙魚杜父魚の属之水底ふありて鳴魚
あり、故ふ此魚と誤りて河鹿と称も諸國ふあり、伊勢
越前越後加賀近江山城ふよ多しその土地ふよりて
名もうつり、形も声も大同小異く、石伏 コリ 石久ヒ 石モチ

又川オニセ伏見クチナハドンヨシ伊ニル巻幾ムコ近江アラレ魚前

この外おも猫あり、近ごろ山海名産図会こゝに書ヨ委しく論じくまいこゝに畧記まて、○青藍云ふ焦門の先哲のよる
るうゐい蛙ふあるを猿蓑あやまりてききうなこゝる
鯖ふれ

九月 桂の宮相撲

嵐葉 八日桂の宮相撲 今昔物語 天曆の御時ふ震旦より渡
月 僧長秀ときんいひくる元医師ふあんありくる桂の宮
の前ふ大ある桂の木あり、五六桂の宮こゝ人りくる
長秀唐の桂心ふまきふんりとゐう 雍州府志 桂の宮一
町ニテ○神社 神田明神祭 十五日○神社江戸湯
第宅詳ならず、 島ふあり、祭る所
の神二座 神社啓蒙 大己貴尊鎮座ともゝ将門の社ハ
本殿と去ること百歩ぐらゐ、○大己貴尊ハ人王四十五代聖
武天皇天平二年鎮座ゝ将門の霊ハ六十一代朱雀帝天
慶三庚子年二月十四日、将門滅亡もその後怨霊ちぐく
祟あるふ依て、延久のころ一遍上人三世真教坊将門の
霊と以て神田の神社ふ合せ祭る當社もゝめい今の神

田橋の邊ふあり、此所いやしく人芝崎村ゝ今ハ至てしく祭
礼の日、神輿をゝらく此所ふ留めて奉幣ありて祭礼九
月十九日、猪町山王と隔年ゝ神輿二基引山三十六本踊
屋甚太神楽ホこふ従ふこの祭の練物ふ頼光大江
山入の形状を摸して、二間余の鬼神の頭を造て臺ふ
のせて數人ことゝ荷ふ、引山の外今ハ是ら神事ふ預るの
町、内神田、外神田大傳馬町濱町辺日本橋通り町、前後
都合三十六町ゝ神幸の町々ハ夜宮ともう桟敷ふ構へ種々
の提灯ふ出して甚賑へゝ、神輿渡御の町ハ本社より鎧
倉町通り、飯田町より田安御門ふ入 上覧所前、常
盤橋十軒店通り、筋違御門ふ過て、本社へ還御ゝ大抵
祭式山王祭ふおよばずともう〳〵ハ神事能あり、今ハなし、
神主芝崎大隅守社 廿一日○摂政西成郡
家五人巫女ふあり、 大坂博労町ふ
あり、祭る神三座、才一稲荷倉稲魂神第二祖園素盞嗚尊第三
平野仁徳天皇後三条院延久三年勧請、俗ふ仁徳天皇の祭
ともゝ毎年九月廿一日神事神湯ふあり、氏子醸ゝ醸ゝ
互ふ相贈ゐゝ、社説ふ仁徳帝の社ハ、元大江橋の東上

町の内ふあり是ゟ〻〻皇居の跡あり、秀吉公の時上難波ふ迂も、桂川の御祓の部野の宮の別と〻〻る条ま注も、かもよもぎ 和名抄云蒿 良子浅茅 加波良木 波波岐

天和本草 順ゟ和名抄よからようぐさと訓ぜ、但野菊をもべし、かこみ草 名ゟり、

藏王 めうまんせぞいつことこもまくのうさこ草をもべしも秋とおりふ名残ふ此菊ハ奥州新妻の里ふあり、因縁無常ふ新妻と〻ふ物語ふあり、葉平作是ハきくといふよつきて秋ま入らくゝ、彼物語ハ十月十五日とあり然ハ冬ゟ時珍曰、其木文木と名づく斐然ふして章米ゟり、

椎 故よこまと趣ふ〻、信州王山懸の者と佳ふ〻ル中暑按ぎゃふ、羅願尓雅翼云、椎ハ杉ふ似て杉ふ異ふ故ハ美きこ實ありて木ふ文采あり〻其木桐ふ似て葉杉ふ似くゟり、絶て長ド難し、木牝牡あり〻牡ハ華きこ牝ハ實るふり〻棗のごと〻、其枝長くして撥攙のごと〻、枝ふ尖る者あり〻尖らざるものあり、稜ふくして殻薄し黄白色、其仁生ふて食ふべし、亦焙ふ収ぴべし、一樹数十

解ふ下らぎ 天和本草 其木骸と焼だ蚊退くカヤリの木ゟリの字と畧せり、

檞の實 時珍曰三四月白花と開き、穂をもつて栗の花のごと〻実と結ぶ大サ擲の子の如し、小苞あり、霜の後苞さけて子墜

雞冠木 和漢三才畫会 本草綱目ご案ぞるふ至て葉丹し愛をべし、雞冠木も赤枫の属ふ然しふ枫ハ岐あろて三角とゟまて、霜の後枫の花ハ白色、実大ゟて鴨の卵のごと〻、雞冠木の花実と廻ふ異ふ〻猫朝鮮の松の子大ゟて常ふ異ふるがごと〻、雞冠木ハ數種あり、高き者二三丈、葉尖ゟて岐あり、蝦蟇の手の如し、大低七八岐或ハ九岐、又十二葉の者あり〻こと〻と十二重とり〻三四月嫩葉紅色ま、満山ふ映ぜ、五六月青葉ふ複て深秋其ハ葉黄ふ落つ歳ご経ゟものハ五月小黄花をひらく状飛蛾のごと〻、梢頭ご実を結ぶ中の子半房子のごと〻、和州竜田、雍州高雄山最多くこまあり、秋ふ至て葉丹く赫耀ふり、天下これと賞美をゟ、凡草木、秋紅葉もる者多くあり、蝦手の樹の葉勝ぐりもゟ故ふ只、紅葉と称そるハ即蝦手

の葉あり、**柾紅葉** 八雲御抄 紅葉の詠をる木、柾 云是柾紅葉あり、一説ゑ実の赤きと柾もみぢとゝるいへり、夫木 秋くれバ山の木の葉のくるゝらん園生の柾ハもみぢちるみけり 為家 **川の紅葉** 紅葉の川水ゝうるをいふ、又うきて流ゝをもいふ、**枯草** 枯野枯草ハ冬なれども、露とゝもにいへバ秋なり、

よ 九月 淀祭 廿三日

神社啓蒙 伊勢向の神社ハ、山城國紀伊郡淀の駅小椅の東河中ゑあり、祭る所の神一座、天逆向津姫尊宝基文図ゑ云天照太神ゑり 石清水社家説 八幡迂幸の縁ゑうて、伊勢向と号し、てゝよ祠を、〇一説ゑ淀姫の社、祭る所今三座、淀姫の神、千観内供の夢神、天神以上三座、傳云千観法師肥前国佐賀郡、淀姫の神とこの地ゑ勧請そ、淀姫の明神ハ八幡宗苗の叔母、神功皇后の御妹トゝ云、紀事 淀大荒木の社、祭ゝ廿三日、或ハ淀水垂淀姫大明神の祭廿三日と、何まろ是ゑりやゝ、土人云淀祭ゝ称する者、是ゑり是淀の鎮守ゝ、神輿一基、淀の堤路狭ゝ神輿還幸の時行列と立ゝゝよりて跡を先へ振ゝそうて同じ堤と帰るゑり、故ゑ跡う先うゝハ此祭とゝ云ゑり、

齢草 よさのちの部千代見 草の糸ゑ出、

夜寒 御鑒

夜寒 秋ゝ寒き夜 夜ゝ寒ゝ夜の寒き皆冬ゝ、

摩牛 或書ゝ云牛女の天河ゑ會ゝ、此流俗

た 七月 織女祭

の雑書ゑ出てゝゑゝを経史ゑ尋るゑゝ未典據ゑゝとあらぬゑ、詩經ゝ睆彼牽牛、跂彼織女ゝとゝるゝ説者以為ゝ二星名ゑりて實ゑゝ、夏小正ゝ言ゝ七月初昏織女正向東ゝ十月織女正向北 五雑俎 牛女の事齊諧ゑ始り、武丁の妾ゑ言ゑ成ゝ、博物志ゑ成る、槎ゑ乗の浪説千歳の下ゑ婦人女子傳てゝ口實とゝ可ふり、丈人墨士乃習て常語ゝゝ、天上の列宿ゝゝ横ゑ汚穢と被らゝむ、亦怪むべきの甚ゝきゑあらぬや、云ゝ然ゝども詩哥連能の道、浪説とゝゝども用ひざれバ有べからず、**薫姫** 織女の異名ゑり 異名分類 公事根源ゑゝ

巧奠 机の上ゑ水ゝゝゑ、

短冊竹賣 むゝゝ七月六日市中数の

まゝもちゐら空焼物ゑり云

葉とうる、明夜詩哥と書て二星ゟ供ゟ或ハ短尺ゟ掛の葉と用ひて詩哥と書て、今ハ民間の兒女、五色の紙と剪て短冊とゝもふ古哥と書、さゝ竹葉ゟ結ひ高く屋上ゟ出すこと竹竿の五絲糸ゟ換るもの、昨今市中短冊竹賣多し、又近来 七夕踊 小町踊 還魂紙料 正保の頃 五色の短冊紙と書ひろげ、其詞書ニ云さてもの恵巻よ、七夕踊の曲と載せる、七月七日ハ中暑乞巧奠とそ人々な今宵ハ七夕祭もなるものゝ〳〵こゝふセッハッもろ〳〵ある小姫さら、美〳〵く出立太鼓と手毎ゟ持つゝ面白くうたひ踊まふるやうゝ乱是七夕とゝぐさむる事、昔今ふ怠らぎるゟなあるふゟらぞ小女の人情ふうゝ云々七夕踊そ別ゟあるふゟとる故の名もあるべし、愚案盆とまちがひそ七夕とりとゝ問答ニ云享保十七年著七月七日七夕と祭る中暑面白く歌とうたひ大内ゟ町〳〵小路〳〵友達のゟこへ紀踊とかけて、小町踊と名付ゟり云々〇七夕踊と小町踊ともゟいへる説そわろし、

題目

洛北修学寺村の老嫗法華の題目とゝなへ踊とあるを、是と題目踊と云ふ松ヶ崎も同し、

高燈籠

用捨箱 昔ゟ物語新見翁著ふ昔ハ死去して其年より七月高燈籠竈とゝふのとそうる七面忌まてとつゞるもあり、立やう〳〵六月晦日長さ五六軒の杉九太上ふ三角のいらゝを結ひ、杉の葉ゟそ色四手ときうて付、燈籠ハ辻番の行燈の形ふちひさく作上ひらき下を囲うせ竪根も板ゟそうらく玄関と墓所の間の廣ふ連て七月朔日ゟり晦日まそ、毎夜暮六ツゟり明六ツまそとゝも一向宗ゟハうえ他宗ハ〳〵のごし、哀ふこもうり」とゝり、是享保十八年ふ記ゟるれバ既ふ當時一世家の高燈籠の絶るハ明うまとゝうつの頃まで、

らもと下 ○猿蓑集 高燈籠 霊祭ふ、霊棚 棚 千那

ひるハものうき柱の那 千那 霊棚 棚

經 ぶ掛索麺麻柯の蕎 枝豆、枝豆、根芋、青蕎麦、松茸、

云むゝい在家ふ佛檀と餅ゟおくことゝもりゝ故ふ、

七月十二月二度魂棚と餅ゟ設け、聖灵とむう〳〵

あり、きらふ。邪宗門御改の砌我家ハ何宗ぞうとい
るあう〳〵ふ常ふ佛檀と設くることいまれり 四季物語
魂祭るとハ一年ふ二度まるものゝらわきて此月の祭を
年のとりよつともいやそひてこれしうおめう 徒然草
十二月晦日の夜のことをいふる条ふ亡人の来る夜とて、魂祭
ることゝいふ此頃、都ふいわきことゝりつまのゝこふい猶そる
このあうしうて哀まこ 枕草紙 めう巣と師走の晦
日のもときめゐてやき人の喰物まるく、云々 ○棚經
菩提寺の僧来ゐて牌前ふ誦經よゝもと棚經
とりつ〳〵うの部 盂蘭盆会の条ふうつ〳〵そるべし、大

文字の火 せの部 施火

の条ふ出つ、 鷹の時 堺出
会 四月羽
毛と易んこもる時、葦繙と解き去ゝ鳥屋の内ふ放
つ、日と逐て脱落〳〵て還新毛を生もで七月中旬ふ旧のごと
歳と両片翮とらふ〳〵○鷹ふやもろゝゝうう過やまり
今いくそゝやとゝ
うこまり〳〵 定家 鷹の山別 或鷹書曰、鷹の山別
ハ七月廿五日ゝ、鷹の

巣と立父母ふ別ゝ〳〵とりふ、下学集 鷹ハ猛悪の鳥心、
子生じて巣ふあり、其子成長をるときこハ、親と食ふの義
あり、父ふ母と畏て居ふ巣より一尺枝を去て
子と養ふ。ゆゑふ一尺量と呼で鷹秤とゝ、鷹打
凡七八月蝶と以て鷹と取ると呼て鳥屋待とらふ、鷹
の離巣を離て飛翔〳〵て自食を求る時常ふ絶崖翁
巌の喬樹と度る、其巌窟の辺ふ小芽と結びて居ゝ、
鷹の至るを覗て羅と樹間ふ張、死鳥を以て餌
こと捕ふ此と阿賀訶とらふ、鷹祭鳥 月令 鷹ゝ
或ハ細掃ふ作る是と鷲打と云、 祭鳥處暑
候七月
之中也、 玉ゝ向き 大和本草 其実ハ梅蘂ふ似
花瓶ふ其巣を去て、其実とのこ 立花をこのむ人、七月七日
して多く挟む、此時其実粗熟、 兼三秋物 龍
田姫 帆江入楚 竜田姫、こゝと称ぞるふ春ハ佐保山
の神より事おゝりさわ山の霞の色ふよせて春
をそむる神といひ、秋ハ竜田山の神より事おゝりて、紅
葉と詠ぞる故ふ、秋をそむる神とらふ、又共ふ神の名ゝ

玉兎 つの部月の蟇と いへる条を註せ、**立待月** 新撰六帖 我門と をこさざたちまちの月もらるらん 衣笠内大臣〇十七日の月こ山の端ゆづる月と立やそらんてまつ心こと を、**鷹の羽芒** 白き處あるて鷹の處ふ似とり、**撓枝柳** 是雛柳あり、関東の俗こまこと撓枝という、酒撓の中ふ入置て渋と抜の謂あり、**田の色** 許慎ら說文曰稲二月始めて生じ八月熟もそ云云ちうる時ハ七月ハ青黄半熟をる時あり、故ふこと田の色と云、**田の庵** 御傘 田を守る時ざのり作りて居る庵あれとあらこ我式ふハ露ふぬるつゝ、**八月田の實の節、特牛** 後撰 秋の田のうつし海の庵のとふ、**八月** 秋ふあるよ、**枯れ節** その部八朔の条ふ出づ、**端正月** 昌黎詩三秋端正月今宵出東溟 事文類聚 前輩中秋の月と名づけて端正の月ととて、〇季吟云端正の月ハ圓満あるとふ多しゝ

竹の春 竹譜 竹ハ八月を以春とそ 筍譜 竹ハ八月こそを小春とそ欲ふ、故ふ小春とふ、**檀特花** 呉郡普集 客又曰、檀特花とふものあり、花炬火の如し、ことも亦芭蕉の類ふや、答て曰是亦芭蕉の別種ふらん、和漢三才圖会 高サ三四尺葉芭蕉ふ似てふく、甚柔ふらぢ、又薏苡ふ似て大く甚硬らぢ、長サ尺ふ餘と、濶さ三四寸、冬ふ枯まと春生ぢ、七月莖を抽んぐ花を開く、深赤色、形穂最も愛まべし、子を結ふ圓く黒色甚硬く用て念珠と作る、本西南外國の草性最寒を、**龍舌草** 多識篇 龍舌草 今按多豆乃之多 大和本草 水中ふ生ぢ、葉ハ車前ふ似、水中ふ花を生ぢ、花白く菱のごくみて大ふり、處々ふこもあり、本草水草の類ふ載之、西土の方言ふうねこと云、水かゝけ、葉枯る、又水蕪と云、葵の葉ふも似とり、花を三出ふり、八月ふさく、實ハ三角あり、細し、**煙草花** 花鏡 烟花一名淡肥姑 初て海外ふ出づ 後種と漳泉ふ傳へ、今地ふ隨て こゝ且一あり、未春不老

小似て葉菜より大あり、紫白の細花とひらく、和漢三才
畐会 八九月莖の頭ふ朶穂となりぐ〳〵小白花と開く、赤
色と帯ふ碧紫苑の花ふ似るより、紫苑の部土瓜
子と結ぶ内ふ細子あり、黄褐色、玉章の条ふ注ぞ、

蓼の花、蓼の穂

和漢三才畐会 二三月繁
茂し、秋ふ至て穂とゐす、細
花とひらく、紅白色數品あ
り、実と結ぶ、俗ふうこと
そ〻きものハ抹収て是と擂の下ふ鉤ふ或ハ火爐の上ふ
鉤て水氣と去て乾き過して褐色とゐる時、種子ごう
出し蓄へおく、**種茄子** 時珍曰、茄中ふ瓤あり、瓤の中ふ子
あり、諸茄老ふ至つて皆黄もあり、

茸狩

木の子取 尓雅 菌ハ形蓋ふ似るより木菌土菌
石菌あり、〇茸狩や鼻の先ある三のかうこ其角

大根蒔

和漢三才畐会 蘿蔔大抵八月
種と下し、彼岸ふ苗と出そ、

なのむし

伊勢物語 そうのごとくなるとあくれる
八雲御抄 基俊ハ類

大根引

狩して東人隣家相そる小鹿狩事心俊頼ハ田
面の雁ことそり、諸抄雁と用ふ田の雁の事あり、

太刀魚

時珍曰鮐魚江湖の中ふ生ぞ、魚の形物と剖裂ぎ
刀の如し、故ふ鰹魚魴魚の名あり、常ふ三月を以て
始て出づ狀狹くして長し、薄くして削るる木片のごし、
亦長く薄くして光る刀の形の如し、細鱗白色吻の上
ふ二の硬き鬚あり、腮の下ふ長き鬚あり、麥芒の如し、
腹の下ふ硬き角刺あり、快利刀のごとし、腹後尾ふ近く
して短き鬚あり、肉中ふ細き刺多し、大和本

九月

草本草綱目ふ載さる鱗魚ふ相似て同じからず、

高き ふ登る

きの部菊酒

醍醐祭

九日〇嵯
峨
治郡小野の南、深雪山醍醐寺ふあり、紀事 九月九日
醍醐天神祭、能あり、又昨日夜ふ入て、清滝権現の社前
ふ於て能三番ありごと夜宮能とふ、〇神輿三基才
一長尾天神才二清滝権現第三勝間明神、以上三社し、
當寺縁起ニ云、祭る所清滝権現ハ沙迦羅竜王の子一女
し、長尾天神ハ延喜帝の御願ふよりて、御願寺とある

故ニ勧請ありしと、勝間明神ハ神縁社説詳ならず、糸切歯

例祭九月廿三日ニ記せしを誤りしにて、廿三日ハ同所笠取祭ありて上醍醐下醍醐ともニ神輿渡御ありて本居ニ崇む

當寺の伽藍ハ、山上山下ニ分りて上醍醐下醍醐ともニ神輿渡御ありて本居ニ崇む

宝の市祭

廿日、洛東建仁寺の門前ニありしが、今九月廿日ニ祭る、相傳ふ建仁寺の千光國師栄西帰朝の日、船中暴風の難ありしとき、蛭子の像波涛ニ随て漂ふものありしを栄西ニ祭ると収めてニ祭る風や波静りて恙なきことを得たりしニ栄西寺ニ帰りて社とせしが今ニ至りて西海ニ赴く人此社ニ詣て風波の難あらんことを祈る、故ニ旅夷と称して祭礼の日宮川町辺の居民、造物造物ホと出でゝ、菊の異名あり、神輿一基持鉾二基持鉾ニ従ふ、

大般若

黄大般若方重ふ、

大和本草

方主ふより

ダモとも云、漢名未詳、

大般若

六百巻

だも実

桂の類ニ三種あり、一種ハ白タブと云、葉ハ桂樹ニ似て香

氣もくわしく冬ニ赤き實あり、ツヾノミとの小鳥好んで食ふ、其實の大さ木槵子ほどにて小ニ肉を去ては其内ホ凹き實一ツあり、一種クスタブと云、其葉白タブニ似たり、最よく桂の葉ニ似たり、桂葉ともクスタブの葉ハそれぞれ本よりて名づく、白色の者又ゆるゝ、凡他木ハ其葉のまぢ中ニ一條たり、桂葉ハ三條ありて本州ニも如此いふ、クスタブの葉も桂葉と同く三ニ出ありて、白タブを中のそれぞれより又枝をもつ處々ニあり、クスタブの實ハ冬熟して黒し、これニも肉と去ては其内ホ實あり、クスタブの葉の形ハ桂と同じ、味も桂ホ似て香氣やゝそれ多し、白タブよりハ香あり、味辛し、水理クスの木ホ似たり良材ニ白タブ、クスタブともニ大木たり、中白タブクスタブの實ハ油をとるも火ホ点ずるによくもえ、油多ければこゝとりホ肉を去中の實の油をとりて蠟燭ホ作る、〇荏桐とダモと訓をハ誤りて、橙秒の部ニ載こゝニ

荔支

時珍曰、錦荔枝、木名、黄瓜、一名瀕葡萄、實

れ 八月

及び葉相似ることを以て名を得、五月実ニ下

苗と生ず。蔓と引、葉葉巻鬚並ぶ葡萄の如くして小く、七八月小黄花をひらく、五瓣椀の形の如し、瓜と結ぶ長者四五寸、短者二三寸、青色皮の上ぶ疵瘢及び荔枝殻の形の如く、熟するときハ黄色、自ら裂け内ぶ紅の瓤あり、て子を裹む、瓤ハ味甘くして食ふべし、形扁うして瓜子の如し、亦稚瘦あり。凶人吉皮と以て肉及び塩将酒と煮て蔬ぶ充、苦く渋うして青氣あり、

連雀 和漢三才画会

こと形雀の大さのごとく、頭背胸赤色、翅黒し、黄白の四文あり、羽尾の端畧紅其尾短くして黒し、頂の上ぶ毛冠あり、眼頷の辺ぶ黒く常ぶ林ぶ棲む、群をなす形美きと以て人こゝと樊中ぶ畜ふ、或ハ尾と抜き舞ふがごとし、畧孔雀の形勢ぶ似ん、但し声好らず、比伊比伊と云ふが如し、

九月 例幣 九

ごと、蓋練韜と字同音ふて物裏ぐ、

月朔日より十一日ぶ至て伊勢例幣の諸家門前ぶ注連を引、門外ぶ標木を建て僧尼及び軽重服の輩門内へ入べからず、その字をとるをこれと前奉とり、十一日の朝幣使発足ぐ、

例幣と八伊勢大神宮へ御幣を奉らせの、毎年のごとくすれバ例幣と云申ぐ、

続日本紀 孝徳天皇天平始て伊勢大神宮へ幣帛使を制奏をらる、詔て今より以後中臣朝臣と差して他姓の人と用ふることを得ざることと命じのふ、依て大中臣藤波祭主ら奏して云ふ、中臣家もむ、最上所と神祇官代とをる、

そ

兼三秋物爽氣 連三の新式

漢和の篇ぶ云、爽ハ秋のごとくやけしとよむ、

増韻 爽ハ清快ぐ、さとやかハ即ち清く快きの義ぐ、

蔡松年詩 爽氣深出、千林赤、

袖の露

袖の時雨ふるごとく、つ瀬ハ涙ぐ、袖の滝ぐ、

添水 かの部案山子の条ぶ出、

八月 獻胙 せの部歓の条ぶ出、

注を、

蕎麥の花 時珍曰、蕎麥一名荍麥、莖弱く翅

然として長く易し、收の易し、麪ぶ磨て麥のごとくも、故ぶ蕎と云ふ、荍とも云ふ、麥と名ぐ同じ、

うもるゝ立秋前後種と下し八九月收め刈ふ性最霜と畏る、苗の高さ二尺赤莖緑葉、葉烏相掬の如く小白花をひらく、繁密繋々然として實を結ぶ累々として

羊蹄の實の如ト三稜あり、老る時黒色、

九月

藺草菊　黄菊さいふ、蕪

我こゝいふ名の説あまたゝびたゝらぼ、拾遺集雑「かの色
る池辺ゐさてるそぶ菊のちげこさそぶの色のてこらさ」
よこんもらも○ゑぎさそぶ、繁き小枝、袖の霜
いろのてこらさい色のてりそきさゑをいへこ、

増山の井　猟詩古　糸衣　ホふ出しこう、

この部衣打神の、縮こいつる糸ふ注を、

つ　七月

机洗ひ　硯あらひ　児童七月六日ふ机硯とあらふこと、

北野の社ふおのて、六日ふ松凡の硯ト掘の巣を添て供そ兒
童の手跡と学ぶりの專ら北野を崇信そ故ふ机硯と
洗ひ清め、北野の神ふ掘の巣あでゝ手向るるべゝ、北野
又二星ふ手向るものを書為もゝり前説まらぶゞ、

妻迎舟、妻送舟　万葉　ひこりの　つまひこぶね

ぎ出らゝ、天のうらふきりゝ立ゝハ　新勅　天の川らき
らゆるふひこぼしのつまひこぶね今やこぐらん　新六帖

ひさゝこの天の川門ハ明ふゝりつまおりぶねやいげらん　續拾遺　舟ありの雲ごらこぼゝの影東湖

辻相撲　禁裏御神楽ふ付て民間ふあるこ里神楽

公事ふあらぞ、どりこまひ

とらふぶこゝ、神社ホふあるこ常の相撲られ、衝突入
どこ、禁裡の相撲ふあらひて秋こまそあり、

士日　滑稽雑談　昔ハ諸国ふて法と入こて、家々秘蔵せ
る器物或ハ其家の嫁娘妾妻まで、常ふこときこ思ふ
ものを、客殿居間よ限らぞ深く入て恣ふ見ゝ迫頂
まで勢州山田ふありしもるゝ、世人山田のつこ入こいふ傳ふ、
むゝハ諸国ふありしまり、摠て家財の類を富ふハ、
貪欲の道あるやらいこまこと戯悔のくあふらぜ今
世ハ絶てホ　つまくれある　鳥仙花をりふ、かの部ふらべし　大和

紅　本草　女児鳳仙花こ雨将水草の葉

きこまり、
こ、むこ合こて爪を染む、
紅色こある云ゝ故ふ名く、

兼三秋物　露　露ずき　露の玉

月令章句　露ハ陰液こ釈て露こまり結びて霜こゝる、
○増山の井ふ出せる波の露ハふらぶの露の誤も○

白露、袖の露、上露、つゆ
以上頭字の部ふ注ス、**露の身**　露の身といふ、露のごき
曠野集　句附　露の身ハ泥の月　物理論月ハ水の精潮
やうなるこのおやひ荷今　お大小あり、月ふ虧盈あり、

説文　月ハ日の照を処より生ず、故ふ哉生明といふ、朏ハ
日の蔽ふ処より生ス、故ふ又哉生朏といふ、晦ふ当る時ハ
光つき盈ツ日ふ就ときハ明盡〇桂男、さてらえ男、照月
次、新月弦月、三日月、玉兎、銀兎、玄兎、在明、哉生明、
既望、既生魄、いさよひ、哉生魄、暉素、金波、夕月夜、暁
月夜、夕月日、朝月日立待月、居待月、臥待月、ふごふ
月、廿日夜中、更待月、常娥、真如の月、心の月、胸の月、
盆の影、まよほし、朔日ごうの月　ねまちの月、以上各
頭字の部ふ注ス、**月の霜、月の雪**　杜甫仲秋詩ニ
わうもて註ス、　満月飛明鏡、
帰心折太刀轉蓬行地遠擊柱仰天高水路疑氷月
霜雪枕婁見羽毛此時騰玉兎直欲數秋毫
月の桂の花紅葉　桂男　酉陽雑俎　月中ふ桂あり、
高さ五百丈、下ふ一人あり、常ふ桂子ありて落つ、本草綱目　江東の諸處多く僧
路の間ふ桂の子と捨ひ得ふごと破ふ、ふ辛香ふ古名相
傳ふ是月中より下る　御傘　桂ハこのる三五の
秋と詩ふ侍ふ、実とハ秋ふ定のごきふの、**月の**
桂丸子　施詩注　杭州の天竺寺八月十五夜
桂ふ二巣あり、互ふ樹の根と遍ひ、
山説譬喩經　黒白の二鼠ハ晝夜ふ喩へ、黒白の二鼠ハ晝夜ふ喩ふ、
乃至　樹根ハ命ふ喩へ、
奥儀抄　無常の喩ふ人虎ふ逐ふて、野中の井ふ陥入ん
として岸の草とひく底をとらんバ毒蛇口と開きてのまん
ず、又黒白の二鼠、のそもくとの草の根と食ふません
まぐあくて、毒蛇の為ふ害せらるゝごとく、是虎ハ平生造
悪の罪業、黒白の鼠ハ月日の過るふ、毒蛇ハ地獄ふ
入、樵炭経の文あり、**月**

の劍 三日月の形ふるくるあり、月の都 月宮殿太平廣記 羅公遠傳云、中秋の夜時ふ玄宗宮中ふて月と話ふ公遠奏して曰陛下臣ふ從ひ月中ふ遊んや、否や乃ち拄杖を取、空ふ向ひ擲つ化して大橋となる其色銀の如し帝ふ詣て同く登る約もそふ行ること數十里、精光目ふ奪ひ寒気人と侵もそ、遂ふ大城闕ふ至る公遠曰此月宮也仙女數百皆素練寬裳ふて廣庭ふ舞ふと帝問ふ曰此何の曲ぞ曰霓裳羽衣の曲ふ玄宗密ふ其声調を記して回る顧ふ其橋歩ふ隨ひて滅もそ、月の蟾、月の兎 王兎 五經通義 月中ふ兎と蟾蜍ふ陽ふ係る)〇杜甫詩云搗藥兎長生と並ひ明ふ陰陽ふ係る)〇白居易詩云照地幾許人斷腸金蟾玉兎遠ず知〇蟾ハ月中三足の蛙、ことと玉蟾とふ、月の蝕 天經或問 星月皆天の上ふあり月ハ日天の下ふあり、朔日月行と日天の下ふ在て、日の光と掩ふ人地面の上ふ在てことと恰度ありて日光ふ記き視ることハ其月の日と掩ふことふ因ふ人其光くらざる故ふ日光ふ記が如し、然も是ふ常と失ざるふ人其光くらざる故ふことと日蝕とのふ月蝕ハ朔より望月ふ至る一向ふ立度ありて日月望む中間ふ正對もることき、地球覆隔もそ、月地影の上ふあり、日地球の下ふありて日光ことと燈さぎそ故ふ月其光ふし、是ふ月食ふ 月讀 拾穗抄 月よミ男、月讀丹夜見皆月の名つき男 日本紀ふこの月ハ男神故ふ男とつふ、月の出潮 性理大全 余襄公安道云、潮の漲退ハ海ふ増減もそふあらざ蓋月の臨む所ふ則水往てことふ随ふ日月ハ右ふ轉り天ハ左ふ轉る一日一周ふて西極ふ臨む故ふ月卯酉ふ臨むときハ水東西ふ漲る、月子午ふ臨むときハ潮南北ふ平もありて彼竭き此盈て往來絶ず皆月ふ繫ふ 月の秋 卿傘 夜ふ花の春とそ 月の宿 陳植物ふあるふ同ふ、事ふ居 月とある 御傘 人倫ふあらざ、月所あり、

の友　御傘　人倫之伹し旬体ふるべし、月を友、人倫ふあらざるぞ、朔日頃の月　源氏浮舟の巻　つごもりごろの夕月夜云云　炭俵集　細くとつくりごろの宵の月　利牛　〇月のちぢめとつゞめごろこいし月のをりをつごもり　ごろとらふ一日三十日ふきらぬ、月の舟　半月を云、

月のこのみ　満月をつゝ

いふ、

蔦　蔦紅葉　時珍曰蔦ハ松蔦ぶらの柏の上ふ寄生、女蘿ハ是松のとふ浮蔓也〇地錦　大和本草　葉ハ夜のふ付るツタふ似て冬月も葉ふちらず皆本草ふいつゝ紋ふ付るツタふ似て冬月も葉ふちらず皆本草ふいつゝとし、和俗壁生草といふ秋ふ紅ふくなる心、又常のツタハ是ふ似

烏蘞苺　俗云豆太　本綱ふ　和漢三才畫会　烏蘞苺　塊塹の間ふ多し、藤ふ似て蔓あり、一枝一鬚ふ五葉、葉長くとこ光つ、疎歯あり、面青く背淡し、白蘞の葉のごとく、故ふ烏蘞と名づく、七八月莖を結び簇をなし、青白色、花の大さ粟のごとく、黄色四出實を結ぶ、龍葵の子の如し、生ハ青く熟セバ紫ふ、内ふ細子あり云云　是大和本草ふいふ夏蔦ふ、秋ふ至て葉深紅愛すべし、

甘藷　和漢三才畫会　仏掌薯蕷の葉ふ似バ円く頗黄褐の根の状仏手柑ふ似て肥り、大くふ名づく、鎮江府志ふ所謂佛掌薯ごとあり、

粒芋　其莖ふ紫の理あり、小く円くして味美し、

白栃　渋抜を以て枝を連ね曝し乾セ、或ハ糸ふ繋て晒し乾すハ初蕎麥稽蒿と用て包宿してよく霜と生ぜ豫州西条の産甘美し、備州ごとふ次く、濃州及び尾州の産ハ長さ三四寸でうつくしと云、

妻梨　軒のつま

八月

綵雀　その部繪行器の条ふ出ル、

敦賀祭

氣比大明神ハ越前敦賀郡ふあり、祭神仲哀天皇　風土記　氣比の神宮ハ宇佐同体之ハ幡ハ應神天皇の垂跡気比ハ仲哀天皇の鎮座ふあり、例祭八月十日〇今月二日よ

リ十日まで、近国廿里四方ハ諸商人放下師狂言師等来ごと集ごと二日神輿洗あり、敦賀紙屋町とゝく方ゟ、例年紙細工の家堂燈籠竜と出し京の祇園囃ごと模

も、三日神事四日と後宴と称し、町々の氏子東番西番と
こゝも引山と出し、地車をて町中と引廻る、山の上ふ一丈
ごろの松と立、四方錦繍の幔幕水引ホ洛の祇園祭の
山の如く、上ふ武者人形と飾る、山の數或ハ五ツ或ハ六ツ祭礼
當日ふこゑと出す、天神の森と
いふ所、御旅所とて神輿遊行、鶴が岡八幡祭 十三
相州鎌倉ふあり、一名ハ雲井の祭、上の宮三座中ハ應神東
ハ神功、西ハ妃大神、姉神下の宮四座、仁徳天皇東ハ久礼
宇礼の二神、西ハ妹比咩ノ、後冷泉帝の御宇、伊豫守源頼
義朝臣、安部貞任を伐時、丹祈の旨ありて、康平六年八
月石清水の神と相州鎌倉郡今の下若宮の地ふ勧請
永保元年二月成就、義家朝臣修覆と加ふ、治承四年十月
右大将頼朝卿小林の郷ふ迂ーうふこゝと今の雀が岡ありへ
毎年八月十五日放生会並ふ祭礼奉幣流鏑馬角力ホ有、

司召 【致隆卿記】司召ハ秋の除目ふ京官除目ふ号
も、春の除目ハ縣召と号、各拝任の輩ことゝ
と召、春ハ大政官の廳秋ハ外記の廳ふ於てことと召、御
司召と称ふ、〇司召定考 同儀ふして猶この部定考

の条とも見つゝ合ゑ参し、

月見 名月 今宵の月々ふの月 芋名月

望の月 十五夜 三五の夜 月華

【事文類聚】歐陽詹詩、月賦序云月之為玩冬則繁
霜大寒、夏則蒸雲大熱、雲霜蔽月霜侵人敝與侵俱
害詘、秋之於夜又月之中、最皆於天道寒暑均取月數則
譽兎四、況墳塩不流、大空悠々蟬始徘徊博華上
浮昇東林入西林、肌骨與之疎冷、神気與之清冷
〇名月 【湖東問答】古来云三五十五夜ふして名月と
いふそのうちいづれの月ふもあれど、名月ときめたる故あること
きゝね、然れども今日名月の詩哥と作らんふおゐら故
實ふ限るべきぞ、尤故實ふおゐべき佳ゐべし又明の字
と用ることハ、和漢とりふ三五の清光と賞し来る故ふ、明
と名と通ひうるとりて通用ちべし、〇今宵の月ハ今
日の月、以上十五夜の月ふ限てありことゝ、且今
宵と賞もてころ旬中ふ12ふらふらあゝむいさりハやせん久ふの月 智月 〇芋名月
【御湯殿記】名月御祝三方ふ芋ゐり高盛と 【蔵時】

拾遺 浪華の俗、十五夜を芋名月といふ、○三五の夜、白樂天詩に三五夜中新月色、○月華

五雜俎 人いふ八月望月華あり、或いふ八夜半、或いふ微雨後、或いふ必八月のみあらず、秋後の望ともふことまゝあり、或八いふその五采鮮明帝の旒數十丈、金線の如きもの百餘道、或八但紅雲ごとき冕ごとく繞るのみ、臨川吳比部摛謙小序に時一度ごとを見るその景象鮮妍千態萬狀、月草、露

和漢三才圖會 鴨跖草 和名都佐 仙覺抄 鴨跖草月草と称ふ、咲けば、月草八露草ごとく、萬の花八朝日影ふことを咲と、此花八月影

草 時珍曰鴨跖草花と碧蝉花といふ、三四月苗を生ず、莖紫かゝりて葉竹ふ似ふり、嫩き時食ふべし、四五月花とひらく、蛾の形の如く、兩葉翅のごとく、碧色愛をべし、巧匠其花と採て汁と取て畫色を作る、青碧ふして鮮の如し、

土菌 和漢三才圖會 土中より生ず、

月夜茸 大毒のものゝ

人迹よりぞ、鷽歸る 格物總論 鷽春社ふ來り秋社ふ去る、蚊ふ是を社燕といふ、鷽

秋つゝ

和漢三才圖會 百舌、反舌、鶪鶪、馬鳥俗ニ云眞豆久見狀鶪鴎のごとくして灰黒色、京師除夜毎ふこれを炙て食ふを祝例とす、

九月

津村祭 廿七日○津村の御天社、一名西戎郡大坂津村ふあり、祭神鐵倉權五郎景政が靈とのへ、一名陽郡談 昔津村何某專ら武勇を励し、諸國を巡行して軍術奥旨を極め、相模の国ふ至りて一夕景政の社ふ詣て神殿ふ通夜す、時ふ神渠う武勇を感ず託して云摂津の國難波の勝地ふ祝ひ祭ら、我將ふ汝ご擁護せん、答云何と以てう證とせん曰、抗上ふ神幣あり、明旦ごとくしてこゝまでバはらく〳〵て神幣あり、みづのらごとを負ひ、津村ふ帰りて、義祠を造て神幣と納てこゝを祭る、卿天の宮これ〳〵元禄のころ卿天の大明神と贈号あり、爾年九月二十七日、神祭神湯の式あり、津村の土人本吾神を、

椿の實 和漢三才圖會 海石榴 ふ似て老て枯るゝとき、海松子のごとく皮を剥仁と取搾て油と取、但千辨の者八實と結ぶ、露時雨、露

霜、露寒 古今 きさらぎ木の下露ハ雨ふまさこまり」暮秋の露のさうんあるとつゆ時雨とふ露霜、露寒、露の気の凝んとするを云あらべし、

な **七月** 願

の糸 公事根源 乞巧とつみとをもろこしより事れこれり、七夕祭ととのへて、庭上ふとをおきそなをのそふ五色の糸とうけて、一事を祈るふ、三年のうちふ必叶ふといふ、此四名ふ乞巧と申そく 朗詠 憶得少年 念佛踊 洛北長乞巧竹竿頭上願糸多 白居易 川合村一乗寺村ふ念仏踊あり、念仏と唱へをどりとそる故ふ此称あり、

まち月 新六帖 秋の夜のひとうねまちの月らふ身と吹とをもをそ庭の松風 衣笠内大臣 八重垣 ふーまちの月ふ、十九日の月ふ、一説ふ子待ふ廿日の月ふ、

八月 蘇蘆薑

和漢三才畫会 俗ニ云蘆茸、朽木及び老樹の根上ふ生ず、九十月盛ふ出、一根産とふ一数十叢生ず、織円

く池頭釣ふ似て、長さ一二寸、蒸工細く柔軟より、纖の内外灰白色凡て灰白色ある者を呼て蘆色とそ此物浅蘆色あり、故ふ蘆茸と称ふ、

な **七月** **七日** 御節供

日本紀 持統天皇五年七月七日、公卿と宴し、朝服と賜ふ、紀事 今日武家並地下の良賤各白帷子と着愛と修ふ家々索麪を喫又互ふ相贈る、

七箇池 百箇池 事林廣記 戚

漢宮七夕ふ百子の池ふ臨ふ、五綵と以て相繋ふ、と相憐愛ふい八〇七箇の池とハ星と祭るふ七ッのたらひふ水を入て、鏡とつけてほーの影とうつすを云ふ百箇の池ハ天の川ともいふかゝ姫とハ棚機とらふ又百のたらひふ水をうつすともいふ

刀豆 時珍曰、莢の形を以て名を命ずるふ、案ずるふ民成式曰陽雑俎ふ云、紫浪ふ挟剣豆あり、莢横ふ斜ふして人の剣を挟るが如く、即此豆ありて一二丈、葉豆の葉の如くやゝて稍長大、五六月紫花ごひらく、蛾の形のごく、莢と結ぶ長き者尺ふ迫し、三月種と下ち蔓生し引

微卑美ナル似扁シテ 時珍曰按ズルニ、
劍脊三稜宛然ニシテ、栗の實 陸佃埤雅ニ云ヘル。
ト栗ニシテ小ク棘トアリ。大和本草ニ夏芽ヲ生ズ故
ニ名ヲ木蓼トス。○花ノ形、春ノ末ノ蓼ノ花ニイツル
ニ似タリ。

糸ヲ 兼三秋物 梨子 時珍曰、梨木樹ノ高サ
註セ、三四尺ヨリ丈餘ニ至ル。葉ハ光
滑ニシテ、細キ歯アリ、二月白花ヲ開ク、雪ノ如シ。○大穀ヲ
紅瓶子梨、観音寺梨、妻梨、松尾梨、水梨、田梨、空閑
梨、鹿ノ梨、ヒメノ浦梨、山梨ナドノ種
類多シ。各頭字ノ部ニ出ス。

朗唱秘抄 棹ノ先ニ鳴子トツケテ、庁山里ニ栗トイフモノ
ト作ツテ猿ト追フシ、○秋ノ田畑ニアル鳥獣ヲ驚カス具ニ
ナヅキイフハ冬至ニ至リハ夏至ニ過ギズ、夜ノ
秋ノ夜ト以テ長夜トモスル呼ヒ方ハ秋分昼夜等シク、初テ
夜ノ長キヲナゲクニ対シテ秋ト長夜トヲスルノ
名ノ木散 鹿文曰、萩ノ落ル、楓ノ
櫨ノ落ル、椎ノ落ルトイフベキヲ、略シテ名ノ木

ちるとつづるおらん然るに来練の俳士なほせて発句ふ
まるハよろしからず、名の字ふまぜて假用ふるハいかゞし、
千梅も此事如何のよし云々。

滑菜 和漢三才圖会 摸の
ごとく小ある者三四歩大小叢生浅褐色ニ帯内刻あり
甚滑其莖煤黒色奈女ハ滑ニ須々ハ媒色ニあり木蘇

の上ふて
畧ス。

中稲 苅収ると中稲とも、

晝会 八月ふ種と下し、彼岸の中ふ苗と生ず、稍長
くして鼠の尾の如きと中抜大根とつくる、霜の後肥太る。 菜

種蒔 注ふ
不及、

中汲酒 半清半濁
の称あり、

九月

鳴瀧

福王子祭 鎮守の社洛西仁和寺の西北鳴瀧う
祭 廿八日 ちり、諸神記 王城守護三十番神右白虎八神 高雄の禁下
鳴滝川の辺つゞまると封ぜ西朱雀うり西洞院ふ至り
て九町の擁護神ニ此辺の地主の神ニシテ仁和寺の鎮守ニシテ、西社
ありつゞまる擁州府志 福王子の宮八西山鳴瀧ふ
とゝふ土人本居神トシテ、同日ふ合せ祭る兒 紀事 鳴瀧

福王子祭九月二十八日、神輿一基、鉾五本、御室の御所の庭ふ入（元五〇）福王子の宮祭る所、班子皇后（后ハ極式帝の孫女ゐて、支部尚書仲野親王の女、光孝帝立て皇后とある、宇多帝と生ゐふ、此辺の地主神と崇る奉り仁和寺の鎮守ことを、滑誉雑談俗ふ五番洗ひとりふ、是一年中の諸社の祭祀の終みそ、又當月の外ふ神祭ある故ふ、毛吹草ふ鳴滝祭廿八日と記そ、迫来の俳書外ふ福王子祭と並〈載ゐり、同社の祭と謬こ再ひ出ス。

撫 和漢三才圖会 俚名奈良、俗ふ古奈良樹の高さ丈ばかり、花實瓣柞の輩のごし、秋日紅葉をる時人ことごと大奈良とゐ〈葉栗の如し

天の實 藾頌曰南燭株、高三五尺、葉苦楝のごひ〈大ふ、其苞半つゝむ又小撫小木ありゐ、材木ともべし、實八椎のごひ〈ふそふ多を凌て紅子と生ぜ穂ことをそ、人家多く庭際の間ふ植、俗ふ南天燭ともゐふ、夏のふの部南天花の条ふ即圖栗ありゐ、半とつゝむごと

七月 蘭

宗懍六日菜麥門冬のごひ〈して濶し且軟ありゐ、長さ二三尺四時常ふ青し花黄緑色中間瓣上ふ點の點ありゐ、春芳〳〵き者と春蘭ことを色深し、秋芳しき者と秋蘭ことを色淡し、開く時満室尽く〳〵香し、他花と又別しひ山谷曰一幹一花ゐて香餘りゐるものをこ蘭ことをこ数花ゐて香ふざるものをこ蕙ことを、大和本草ふ世俗ふ花と玩賞ゐる蘭〉真蘭ふあらぢ今の蕳八本草ふこれと出さぢ、蘭草集解正誤ふ載そ、

七月 迎へ火 送り火

七月十三日黄氏日ふ及ひて、都鄙ともふ聖灵ことを迎ゐの義ありふ此時門前ふおゐて、必麻柯と焚てこゐことを迎へ火とゐふ、十六日又そのことを行ふことを送り火とゐふ、

七月十四日卯時来り次の日十六日午ゐ時ふ皈ル、五雑俎人最も中元と重ぢ、家々猪陌冥衣の具と設け、先人の号位と列ね祭てうことと燎〳〵ふ、女家則父母の冠服袍笏の類と具へ、皆紙ふ為る者ゐことを薦るふ紗ニ衣をこれと紗箱とゐふ父母の家ふ送ゐ、女死もしバ壻亦代つて送る、莆中ふ至るとき八則清晨陣設ゐて甚

報恩経

嚴しく子孫冠服と異し揖讓盤折して神と尊迎鐘
き以入る祭畢て復送ることを出ることを
ろの部六道
忝の条より出、**虫送** 紀事 時民人鐘鼓を撃野外に送る
これと虫送といふ凡旱歲ふ五穀の枯萎むこと燒るとき
そふ茄の根の枯ると舞とふ瓜の蔓の枯ると上ることふ
是民間の詞之〇いの部 **木槿** 時珍曰此花朝ふ開き暮ふ落故ふ日及と名
蝗の条うそ〳〵るべし、
づく槿といふ蜂とく猶僅采一瓣の義ふみへ其木李の
の如く其葉末尖りて挫歯あり其花ふみて艶こ或ハ
白く或ハ粉紅單葉千葉むろ 古今六帖
の者あり五月始てひらく、**室の早苗** 津の國の
むろの早苗もいでゝことしものとぞはやよもるがも
此三の夫木集おハきの國の室の早苗をせらて入さり、紀伊
國ふ牟婁郡あまで、夫木のごとふをこゝへべしさそ年婁
郡の早苗とせとふるをそ古説ふさ多くとふをよ杜撰
なるべし、 **兼三秋物** **虫籠** 爾雅 足あると虫
とふ疏云此文ふ對るのく敢て言ハ足あきこと虫こ云、
雍州府志 下賀茂の社司の婦人松虫鈴虫を養ふ籠
と作る其式纖細竹と剣て笼と造る内ふ一ツの小筒を安
き土と盛て苔と敷き露草少しぐうと種、俗ふ所謂
露草ハ鴨跖草ふり、紫白の糸とふて藤花の形ふ作り、
籠の上より下ふ垂る其躰觀るふ堪こり秋ふ至て虫こ
入檻の下ふ掲或ハ簑外ふ掛く昼ハくらきを見て
目ふ悦そゝめ夜ハこゑと聽て耳と娯しむ、 **虫合**
虫の声のよきと聽ふ思ひの晴やらぬことのふ
合せて遊ぶことふ、 **朐の露** 思ひの晴やらぬことのふ、 **朐の月**
秋のもより 朐の月、朐のうちの曇らこ
清きまるべし、猶深意も侍るやふ、 **八月** **紫苑**
花 花紫ふして
その部ふ出、 **椋葺** 和漢三才圖会 椋の木の上
ことなし、 **椋鳥** 莫名未詳 和漢三才圖会 椋鳥との形狀槇葺ふ異ある
呼て椋鳥との形小鳩の如くこゑ頂白く
背灰黒色背の下黒白雚ふ眉淡黄頷の以下腹ふ至
て倶ふ白し翮の上灰黒色の斑あり、超の本微ふ白し羽黒

白交ぢり嘴黄色鳧の辺微黒と帯脚脛共その声鶴ふ似て喧ひ好んで群とゐまた又小椋鳥ほり状相似て小く

九月

撲虫

公事根源曰ハおほむし殿上の遊遙とて殿上人とも遊び

て蜻蛉野おくへむりいて、

木蘗子

藥恭曰葉李葉此樹葉木槿ふ似て

虫と蔕ふえらこ入て奉るえ、

薄し細き花黄ふして槐ふ似て稍長大こ子殻酸漿ふ

似て其中ふ実あり、熟せる蔬豆の如く円く黒くくく

堅硬し数珠ともるふ堪こう者是ふり、五六月

花取むくく、南人以て黄と染其こと鮮明あり、

椋の實

時珍曰無患子樹甚廣大枝葉こふ槵の如く特ふ

其葉對生こて、五六月白花と開き実と結ぶ大さ

彈丸の如くく、状銀杏及び苦楝子の如くく、生ハ青く熟

こてふハ黄老るときハ文皺あり、黄むときハ油燦の

形の如し中ふ実中一の核むきうり殻と去て仁とる者

堅く黒くて珠の如し、

刺栗

搗栗の類ふり、

七月

烏鵲の橋

う

盂蘭盆

日本紀齊明天皇三年七月始て盂蘭盆会と設け同

五年勅して盂蘭盆会と諸國ふ下し講ぜしむ、釈

氏要覧盂蘭盆ハ是釈氏の孝と述恩と報い苦と救

ふの要こう目連の母とそくふと以て始こす、梵語ふハ盂蘭

此ふハ倒懸とう、盆ハ此方の器こう事文類聚盂蘭盆経ニ

云目連比丘その母の餓鬼中ふ生ぢると見て、即鉢こ以て

飯と盛り徃てその母ふ餉と食ふぐこ口ふ入ら化ーくく

火炭とふる終ふ食ふことと得ず目連大ふ叫びこ馳還り、

佛ふ白す、佛の曰汝が母罪重し、汝一人の力ふよこう所

ふあらず當ふ十方衆僧の威神力とかりて、七月十五日

ふ至こ當ふ七代の父母、現在の父母厄難の中ふあるの為

ふ百味五菓と具へて以て盆中ふ著て十方の大徳こ供養

をべし、仏衆僧ふ勅して、皆施主のこめふ七代の父母こ願

し、禅定の意と行ハしめよこう後食と受よとこのとき目

蓮の母一劫餓鬼の苦と脱ぢるとと得り、目連仏ふ白ち、

永く来世の仏弟子、孝順と行ふ者又盂蘭会と奉ハ、

もろもろのこと得世をむべし、可ちんや、仏言く大善し、

故ふ後代の人これふ因て廣く華飾とるも、乃ち木こ刻

ミ竹と割飴鰑前ヵ糸花果のうこん
形どゝのし工巧の妙と極さるゝ至る 麝金の花 時珍曰麝金二種あり
麝香是花と用ふる者ハ其苗薑の如し其根
大小指頭のごとし外黄肉赤く人以水ヲ漬し色を染し
又微香と氣あり又曰四月の始め苗を生ず薑黄ふ似さく
花白く質紅あり 未秋ふ莖心を出して實ふし嶺南の
者ふハ實あり小豆 とゝぎす 江東の俗スイトヾ
ふ似て緻ふふ堪ず、 **馬追** といふ其声
ごとし いとゝふ似て小さく色 純青し尻ふ剣あり又ふ
きらあり雌雄の異あり中元の時夜盛ふ鳴其響紡
車を捲がごとし関東
の俗言ふ馬追とゝふ、 **兼三秋物上露** 嘉元御百首
よふ野らの草の上露ハ落て 凡ゝ
下葉ふまじむをびゝり 頻覚 **鶉** 和漢三才品会 按
ふ多くこれあり甲州信州下野最多し畿内の産又勝れ ぎるふ處々の原野
り黄赤ふ白斑の彪あり珍き彪のできハ人甚これを
賞ぜ其声 知地快とゝふがごとし、数品あり嘩々快と上
ともそ毎ふ早旦日午夕暮ふ鳴冗春二三月始て鳴昔

種ふ至て声を止む六月又更ふ声を発し中秋ふ至て
声を止む人是を養ふ其雌ハ小く足卑く嘴ふを呼て
阿以布といふ〇片鶉 駈鶉 鶉ふ
各頭字の部ふわうちて註せ、 **鶉鷹鳥** 鶉と取る
衣 荀子曰子夏之衣懸結として鶉の
只俚人の短き着物とゝふ然とも秋の季ふつゆ
生類ふ二句去ゝ〇一説ふ衣の裾の **鶉の床** 御傘 新式を
破もて鶉の毛ふ似るとゝいふあり、
ゝふ夜分ふあらざる物の處ふ、鶉の床とでゝり出せ
ゞ此道理とて簡るふ余の鳥とゝりてこゝふ空を翔
らぜ、書ふ草のうちふのこゝりふゝり、 **鰻鱓** 御傘
と庶ゝても夜分ふゝらぜとゝ定ゝとゝえゝ
簗 和漢三才画会 鰻鱓此物冬春ハ泥穴ふ蟄し五
月ふ至て 遊ぎ出ゞ此時味勝て子を生ぜ纔く
して長サ三四寸性滑ふて利く泥中ふ潜る故捕分し
江州勢田城州宇治名を得ゝり 紀事 秋月鰻鱓流
ふ従ひて下る是を落鰻鱓とゝふ 簗を以てこれを捕
るふ流ふ従て簗の中ふ落入故ふ捕へ易くして魚店ふ

多くこれを賣る、

八月

宇佐宮祭 十五日○豊前宇佐郡築紫ふ

にり、欽明天皇三十一年、豊前國既の宇佐 菱形の池の上の民家の児ふ託して曰我いは是〻第十六主 譽田天皇 廣幡八幡〻我を護國靈驗威身大自在王菩薩と名く、迹を諸州ふ神明ふ垂る、今顯ふ此地ふ在まくといのりてこれを奏ふ、勅して祠をうつ、八方ふ八色の幡と立つ、故ふ託宣ふ八幡と号ス○社説ふ當社祢宜奏して云、大神の託ふ宣く我 元量劫 ようこのくに 三有ふ化生して善行方便を修し諸の衆生を済度を、我名を大自在王菩薩と許しくるまふ、

公事根源 八幡ふ垂跡の号、後ハ豊前國宇佐ふ鎮座ありて、聖武天皇東大寺建立の後、巡礼ありふ、詔宣なりに依て彼寺ふ勧請申さんさんど勅使をおどハ猶宇佐ふ参ふり、○宇佐宮祭いふ、へ

八勅會ふ、放生会ふ此地を始とせり、

山城風土記 兎道とハ輕島明の宮の御宇天皇の御子、宇道の稚郎子桐原の日桁の宮をつくり宮室とつくりて御名と宇道といふ、

三除斎云兎道の稚郎子崩御の心を、新勅撰注日ふ、

人のなくさや露もらん世と宇治山の秋の花園ふもて思ふふ、宇治の花園ハ桐原の日桁の宮の花園ふ慈鎮和尚と稚郎子崩御のところをよくもりて、千梅春耕ともふ頼通卿の花園と記せり、稚郎子の山朋御のところを詠る哥ふ臣下の花園をとり合せて詠る例ふし、殊更慈鎮ハ宇治の関白頼通公より五代後法性寺無実公の子ふしその先祖の花園ともうつるべんや、

薄紅葉 薄色のもみぢをいふ

梅嫌 和漢三才圖会 梅嫌木 西宇未詳 葉円く尖りて、微小き鋸歯あり、野梅の葉ふ似て小く多凋ふ春芽を生ず、五月小白花を開く、果南天の花ふ似て子と結ぶ、初ハ青色、十月葉落て子紅ふ熟ず、枝幹ふ添て多く美ふ、一種白き者あり、異とす、

漆の花 韓傳并日本樹高サ二三丈餘皮白し、葉椿ふ似て花を掬ふ似てその子ハ午李子ふ似て本心黄ふ、六七月刻て滋汁を取ふ

茴香の實

和漢三才圖會 俚名久礼乃木 按ずるに 茴香 八宿根より深冬ふ苗を生ず莖を叢をおもと高さ三四尺肥さる莖葉糸の如し五六月花開く蛇状の花のごとくして色黄ふ實を結ぶ大さ麥粒のごとし輕く細き稜あり俗呼て大茴香ともす、今惟寧夏より出る者を以て第一とす、他處より出る小き者これを小茴香といふ按ずるふ懐香を大茴香とすれど雖今唯大茴香と称る者八八角茴香〈本朝未有之〉小茴香と称る者即懐香〈和多くこれを種て用ふ高さ三四尺肥さる莖粉青色、細き葉淺緑糸のごとく柔靡夏ふ花をひらく淡黄色ふして子を結ぶ形杜の麥ふ似て小く筋稜あり、中の子八皮と同色ふくこうばしく、飛散る処ふ苗を生ず

鶏卅

一切の図史草史和名抄ふ此名あるものをえず、或絵師ふ尋るふもらず、或絵師ふ尋ねるふ草花肆ふ在りといふさもあらばあれ、海雁 大和本草 海う在て其大さ雁ふ比をしバ微小あり、色灰色の如く、味及び足黒く其頸ふ環の如き白色ありて短く、尾短く背、

九月

太秦の牛祭

十五日 紀事 山城国太秦の廣隆寺ふ常盤村の南山の内村西北ふあり、桂の宮院内ふ伽藍神あり、大辟の神社と号そ。祭る所の神秦の始皇帝ふあらず、一つの伽藍と造る、四天寺法隆寺、元興寺、中宮寺、橘寺、蜂岡寺、廣隆寺の別号池後寺、葛城寺、日向寺ふ亦同じ、元亨釈書 聖徳太子九院の庭ふおいて牛祭と修もと、寺僧各集会もて、相傳ふ慈覚大師帰朝の日、順風と祷ふ此神と叡山の梵ふ勧請もて、赤山太秦もまた此社あり、故ふ今宵寺中の神事も亦多羅神ふ祭る者〉寺中の行者紙衣を着、牛ふ乗ずて上宮王院の前ふ出、祭文を読誦もて、且つ悉く懺悔の詞ふてふ〈寺僧うるさきとつぶやくもその戯謔ふ迫きと必て近世行者そ〉てことと修せず、法令畢つて明前ふ角力ありて寺説ふこの会ハ大念仏会と称もて十一日の暁開闢十三日の暁ふ至ての結願ふて下畧

本草 温州橘其葉實橘ふ似て薄く小ふ其実肥蜜橘ふ似ふ、大さも亦同し、漆樓 漆樹の注

部漆の花の条ふうそう[ママ]漆の木の枝捎(こずえ)ふ悉く鋸と以て挽目より脂を発す是則生漆汁ニ奥羽及ひ下野和州尤多シ中國ふも所々あり其脂を撥取諸國皆六七月ニとゞて九月ふ出せるハ違ふえ

裏枯 御傘 草巣の外色づきそうろう事ニうらがれとでうとハせをそ蘭野邊原等ふとの文字と入るゝ植物ふ二句ニ草の名草の字ハらも植物ふ三句ニ連ふ裏枯過て秋草の句ふうそうろうふ字かさもせざれ共俳ふハ今一ツ有ベし云々○青藍云木の梢の枯るをもうらかとろうる者あるをつゐ洩し御傘の文体ふそ草ふ限れるそをもあるべし

梅紅葉 梅の木の葉の紅葉せり寒さ

ふの部よ侯せ出ス

の

七月

残る蚊、残る蛍 貞享式 残るとらふ字ハ其季ニうり此季ふ残る蝿 残らぬ残るとゆくる道理あり中畧譬ゞ残菊ハ重陽ふ残るとも残る蛍ハ何ふ残るべきも残るの字ハ総て其季の次ふ取ると此論を残るの字の例と

をへ○青藍云年浪草俳諧歳時記ふ残る蝿と通俗志ふもとうひて六月の部よ出しとゝとも通俗志、雅流の書ありて蕉門の式ふからも、故ふ今改て秋季とをざんもつ

残暑 秋暑 山谷詩西凡撫不衰、残暑推不去、○悄まて来てみる秋のあつさうめ 支考

後の藪入 春の部ニ注え後の字ふ準らそとも秋季ふ連さらそ秋るべし、発句を秋季のけうらひあるそ後の字ふ及ぼ

八月

野口念佛 十五日 播州加古郡教信寺ふけるを野口念仏といふ清和天皇の御宇教信といふ者あり姓氏詳ふ〜を或いふ南部奥福寺の住僧永西坊の弟子ありと加古の駅舎の北草庵を結ひ常ふ西ふ向ひて称名念仏を性仁愛ありて旅人の荷を助け労を救ふ貞観八年八月十五日完要の郷ふおいて盗賊のそうふ殺さるゝ首ハ教信う奄て贈つるゝ骸ハ其地ふ葬る毎年八月十五日僧徒多く数信者ふ集つて仏事念仏をつとめ数書の暑ふ云伝の刖晴尾寺ふ僧あり勝如と名く八月望の夜一僧来つて

門と敲く即迎へ入る客僧いふ吾ハ播州加古の教信と
念仏の功力ふよりて今宵極楽ふ往生そう〳〵尊僧ハ必
聖王の今宵往生をべきと〳〵いひをはりて去る時ふ
空中音楽きこえ明年八月十五日の夜果して死せり、後
に彼岸 春秋の彼岸ハ昼夜等分ありて長短なし、仏道
ハ中道を崇ぶこの時節まことふ中道の辰〳〵故ふ
仏事を修し、提謂経ふ浄土三昧経ふハ王子ふ善と修ちこ
ととくべしと〳〵八王子ハ彼岸ふおこなふ〳〵八王子と八立春、春分
立夏、夏至、立秋、秋分、立冬、冬至ふ也、天神の諸神洛陽
交代をる時〳〵この日梵天帝釈、鎮臣三十二人、司命、司録、閻
魔大王八王使者、悉く出て四方と巡り見、人民の善悪ふ
按へ録をこというり故ふ善事を修をべきと〳〵
経釈 念仏して西方往生の願行どもをそふハ冬夏の両時と
取ぢ、春秋の二節ととる、仲春一月仲秋八月両時ハ正東より
日出て真西ふ没る、弥陀仏の国真西ふ没所ふあるふ
故ふ弥陀の在所と衆生ふ指示して往生をとげしむる〳〵
後の出替 紀事 雲崎類要云、秦の人本家婢をのち
得て一子を生ひ妻ふとを悪こをて隣家ふ
ふ與ふ郷家大ふ富貴ふあり本家貧し、後二月二日と改て
取帰と后復本家富隣ふ貧し、和俗二月二日と家僕の
交代の節ともるとこ元此りの
本くう後三月二日八月二日ふ、 野分
風也 倭名抄 暴風漢の
訓抄云八夜知又乃和木乃加世
二句ふ中暑又枯野も色の字そへ
ハ秋ふり枯野ともるりハ冬ふり、 野菊
と生ぢる菊と云ふ花葉ともふ菊ふ似て小〳〵緋紫の
花多し稀ふ黄花のとそ、是上古ふう本邦ふ
く小毒あり食ふべからずと云り今人家ふ植て翫ふ
ぶものハ唐もろこし来る上古ハ野菊の外ふし、 鴉
和漢三才図会 按るふ俗ふ云野雁ふ頭頸灰白色、觜
の端黒く其背ふ黄赤紫の豹文あり、翮深黒腰正白、
脚掌蒼黒ふて
后の趾及蹼ふ、 九月 後ち 雛 滑稽雑談、和
をるをる古き物語ふも出こり、上巳の節ふ拠ふこと
今又九月九日ふ賞をる女児多し、源氏物語ふハ常ふ

雛のそびもとこそ云ふべけれ、重陽よりもこゝあるべき
う、俳諧是を名づけて後の雛祭ともいひ、上巳の對
して謂へり。後の月 志の部十三の
るものゝ、夜の条に注す 野の宮は別 桂川の卿
枝 山城国葛野郡小倉山の下椿原にいつ〳〵伊勢七
斎宮始此所に栖まゝよりて、伊勢太神宮を勸
請も、此所嵯峨野に故ある野の宮と称ふ。延喜式 九斎
宮の親王定まり畢て、宮城の内便よき所と卜して、
初斎院にて枝葉 て乃ち入り、明年七月に至りて此院
に斎も、更に城外の浄野と卜し、野の宮を造る。八月
吉日を卜して河に臨みて祓禊して、即ち野の宮に入る。云
〇野の宮の別とは、斎宮に差ふ籠らせ給ひて二年めの九
月伊勢へ発ち給ふ時、天子へ御暇乞ふ為に参内し給ふ
此時、天子御手づから、由豆の弓槲と斎宮の御頭へ
給ふとぞ。さて別の槲と申すは、是ふりて伊勢斎
宮ふ移りてもなふ故ふ野の宮の別と申す。この弓槲ハ素盞烏尊猪目姫
おうつはものゝ因縁を以て斎宮ふうけ 日本紀 才 崇神天
るふしにて又別の御槲由豆の弓槲ともいふ 四
皇六年、天照御神と豊鋤入姫の命ふ託して大和国笠

縫の邑ふ祭らせ給ふ。 同書 垂仁天皇廿五年三月天照
太神を豊鋤入姫命ふ離 同書 六
寸景行天皇二十年二月五百野の皇女とつりして、天照太
神をもりもむ 三
女と伊勢へ奉りて宮仕させ給ふ。三代くだりて天皇即位の後親王の内
処女とえらばれ、太神宮の御給仕と定めらるゝとぞ。ト定とふ
内親王もきこえ、諸王の姫君をも定る例ありけるにや
てを定め奉りて二年めの八月より翌年の九月迄野の宮ふ
侍ります。此間三度の神事三度の祓ありて上御門院兼
元二年、四十一代の斎宮後鳥羽院の皇女荘子内親王の後、
此事断絶給ひて、〇九斎宮群行は九月十七日、其前
日桂川ふおいて祓禊を修ふと。桂川の御祓と云ふ

秋のたく

菅家文章 黄花之過重陽世
俗謂之残菊 〇重陽以後の菊
の名なるべし

野山の錦

みさくの部 草の紅葉の条ふ倣せ注すと

残菊

葛野郡より
といふ、残菊の宴八十月
五日に、冬の部なるべし、
おくれ残る故の
の名なるべし

残草

菊の異名 蔵王ふ載
ものゝ花ふ

の部ふ併せ出を、

七月

化生

五雑俎 嵗時記云七夕ふ俗蠟を以て雛兒と作り、水中ふ浮へ以て婦人子ふ宜しきの祥とす、こゝを化生といふ、王建詩云、水拍銀盤弄化生、是こゝ今の人泥塑嬰児或ハ銀範を以てまろき者、化生と云ふ、苦丹 丹

あるもとゝもりて七夕の戯あるとぞ、

を龍膽といふハ誤

觀音艸

和漢三才圖会 草花肆ふあるもの葉蘭ふ似てものきろ〳〵、六七月ふ似て少く狹く短し、石菖ふ似て莖を抽で小花をあらく〳〵穗となる、淡紫其蒼き愛とべし、然るふ大和本草ふハ觀音草無花無穗といへり、京師の俗中元の日、此菜と以て蓮の飯と縛ふ觀音草の名義ふよるとぞ、

常山花

和漢三才圖会 根と常山と名け葉と蜀漆と名く和名久佐本處々ふあり、其葉甚だ臭し高さ丈許葉梓檄の葉ふ似て團く尖て畧皺ありて澤あり、六月細花を開く、白紅雜攅る、

常山の虱

同上 蟲ハ此木株の中ふあり、蝎〳〵と蝕ふ六七月株を破て孔を取用て瘡の藥ふ入る、或ハ豬の藥ふ入るゝ、ふよるとぞ、

常山

和漢三才圖会 根と常山と名く和名久佐本處々ふあり、其葉甚だ臭し高さ丈許葉梓檄の葉ふ似て團く尖て畧皺ありて澤あり、六月細花を開く、白紅雜攅る、

常山の虱

同上 蟲ハ此木株の中ふあり、蝎〳〵と蝕ふ六七月株を破て孔あり、管を以て水を中ふ入るゝとき、虱首を穴より出す、輒ち木を前ふ両端を縛りてまを探り得る、時、黒き煤と生る者、

蠛蠓

和漢三才圖会 書虫俗字正字詳ふあらず、按ふ蠛蠓ハ小虫莎雞のごとく、翅甚だ短く腹黄色、前脚長く疾く跳る、毎ふ穴ふ出入まる故ふ獲がたし、秋鳴声馬の轡の音ふ似たり、

蠛蠓

時珍曰秋月鳴て音ふ似たり、

兼三

因て名づく、

蛸蠓

槧あるき者蠛蠓ともよべ、

粟奴

粟の苗ふ穗と

秋物

降り月

滑稽雑談 帥說ふのふぐり月ハ十六七夜の既望をぐる月をいふ、然るふ二居待月の頃より、廿一二夜迄の月次第ふ晩と生ぞるとぞ、望ぐりともぐり月ともいふハ、〳〵藻塩草の傾くの義も捨ふくからまぢ、

葛、同根を堀

直葛が原 和漢三才圖会 真葛 其葉勁薄く格の葉ふ似て面青く背白し、凡至まいらく離る恰も掌を交るごとし、婆婆ら〳〵て声とふも、故ふ哥人葛の

葉の裏見〳〵恨しく人の恨ふるころ」「大和本草」根を冬月或ハ春いまだ苗を生ぜざるときほりて用ふ長きこと數尺乾して用ふ葛根是ニ云古式八月の季ニ云々審〇真葛の真ハ名ニ負る辞〳〵真葛ぢ原ハ京師知恩院山門の南ふありとぞ〳〵葛の生ずる原

花壇　「貞享式」今按ずるふ花壇ニ花畠も決して秋ふ定むべきニ非ず諸草のさくひ春夏ふ花を開く者あまた秋多き故無名

草の花、草花　草花と秋とを實もまた然ル「古今」みどりある物ハいろ〳〵の花おそなりなる

芋　その部蓮芋

觀音寺梨　近江國芦浦觀音寺より出ッ微赤く甘し、口中ふ消るがごとし

鰐一名九万疋　といふ志の部鰐の条ふ注を、

八月桑名祭　十八日、春日大明神の社勢州桑名の城下ニあり祭る神四座別當仏眼院説ふ云經津主命ハ神護景雲元年下総香取の宮より勧請ありて又武甕槌命ハ正應二年八月十八日常陸國鹿島の宮より勧請ニ天兒屋根命姫大神ハ永正二年八月十八日伊賀の名張より勧請ありて毎年八月十八日ニ以て祭辰とするを、正應永仁の月日とふ云ふ事を修をといつ〳〵ふ〇先十七日、社前の南北ふ車二輛飾夜ふ入て試乗あり翌十八日祭礼のとき、件の車を南北へ引渡し音楽と奏ス明和十年の春回禄以前ハ、両社六座〳〵北三崎の神社三坐南春日の神座三坐ふ往古ハ春日鎮坐の日と以て祭る回禄後祭礼延引ス三崎大明神ハ土地の神ニ鎮座の年月詳ふらず凝洲崎鳥洲崎寄泡の洲崎寄合せて三崎といふ又七月七日の神事あり氏子貢舟川ふ於て石とるを来て両社ふ献ずこれニ石取の神事といふ此日雑遠物ど出ス〇此八月祭を天武天皇の祭礼と記せる書あり日本紀ふ天武天皇元年九月朝車駕遷伊勢國桑名宿こゝふ云ニ今駅中ふ神社あり、よりて誤

苦参引　時珍曰苦ハ味と以て名く参ハ功と以て名く、「和漢三才図会」其花莖の梢ふ穂とありて七八月開く莖根葉ともふ根と連ねて故ふ根と連ねて故ふ根と連ねて故

天慶年中勸請を、神社啓蒙鞍の社ハ山城國愛宕郡鞍馬山ふもと、祭る所の神一座大已貴命〇此社ハ天子ふ懸く、世上騒動の時、報と此神前ふ懸く、故ふ由木と号ふ蓋大已貴命少彦名ともふ疾病を療し、天下を治るの神ゝことを以て五條天神及當社ふ報とりるの遺法なり、或説ふ祭る神素盞烏尊とも、例祭九月九日ゝ八日の夜氏子の男女供物と旅所ふ献を、くんりくゑ

勸學會 十五日 三月九月十五日 一年兩度行ふ

當神眞本社ふ入、三月の条見合をべし〔公事根源〕勸学院ふの大学の南ふ此院を立られしハ、南曹とゝ申めり多嗣大臣遠き憲ふ

呉服祭 あの部文織 祭の条ふ併せ注、

胡桃 庵厨本草 此木うるふ似て最も大ふり、其実枝円く大く、色淡く皮厚く硬くして破れ難く、仁脂多く味最も美し、

槇櫃の實 蕪頭曰槇櫃の木葉花実酷く木瓜ふ類も、木瓜ふ比もれバ大やし、惟蒂の間とろふ重蒂乳のごときのあり、此則槇擢ゝ

秋野山ふ出て薬草をとるゝ状、苓突ねと句ふうて秋くもるべし、

虞美人草 大和 本草 名花譜云花四瓣色艶蜀葵ふ類くして小ゝ園ゟ云呉俗呼て虞美人草ゝ云、是ハ四五月花とひらく者ゝ花蜀葵、美人蕉、紅蕉、此芭蕉の一種類説 褒斜山谷の中ふ虞美人草ありて形鶏冠のごとく大くして花ふく葉皆相對ゝ或ゝ虞美人の曲を唱ふれバ兩葉撫掌ゝく頗る節拍ふかなふ如し〇鷺水が新式ふ口決ありといふもの何ゝの草をいふとも、

栗蓱 和漢三才圖会 山原ふ生ゞ高すふ過ぎ、織四五分巾く巻正白色、剥さる栗の肉のごとし、故ふ栗蓱と云、

下簟 の条ふ注ゟ、

九月菜 きの部落鮎

蓴の袋 きの部菊酒の条ふ注ゟ、

栗の節供 きの部菊の節供の条ふ併せ注ゟ、

九日小袖 菊襲 清厳正徹記 九月衣類菊襲面白裏紫ふ出ゟ 〇地下良賤今日縹色の小袖と着し、互ふ相賀ぶゟ、是を九日小袖と云、

鞍馬祭 九日 諸神記 鞍馬寺由岐の社

大和本草 花ハ林檎又海棠ニ似テおくらして開く、實ハ秋熟ス、九年母 俗ニ九年母ト云ハ名義未詳、木ハ蜜柑ヨリ長ク一丈ニモ及ク早ク実ル、栗 事類合璧 九月霜降ル乃チ熟ス、其苞おのづから裂テ墜者久シク藏ムベシ、苞裂ざる者腐易シ、○落栗、速栗、焼栗、搗栗、粉栗、茅栗、刺栗、打栗、出落栗、三度栗、山栗、錐栗、搗栗、各頭字の部ニ分ケ出テ注ス、熊栗架ヲ搥 時珍曰熊石巖居所ト設ケ是ヲ熊舘トイフ、性よく木ニ上リ好テ栗ヲ食フ、故ニ此名アリ、架トハ熊舘の類ニシテ枯木ニ在ヲ山中の人ソレヲ縁テ梢ニ上テ枝ヲ折テ並ベ鋪テ架トいふ、熊舘の類ニシテ、茅萸 和漢三才図会 胡頽子 大抵三種あり、其葉と實少シ異トあるのミ、一種春月ニ當テ苗ヲ種ル時實熟ス、大サ小棗のごとき者ヲ茅代胡頽子ト名ク、一種五月実熟ス、大サ棗のごとく莖長クシテ下ツ垂ル、一種九月実熟ヲ小ク其大サ櫻の子の如くして簇リ生ズ、又實ヲもちて酒ヲ製ス、草牡丹 大和本草 葉ハ牡丹ニ似テ小ク白花をひらく實牡丹ニ似テ小ク宿根ヲ生ズ、又實ヲもちて生ズ、又牡丹芍藥の類ニシテ草の主 白首烏喙 の異名堀川の匂いおもしろき菊の花うべ草の中ニ生ズるこそ草の王なりけれ 医房 草の紅葉、草九色、草木の紅葉を錦ニたとへいふ 新続題林 織ぐるま錦やこん秋 下つ枝の紅葉 草の錦 野山の錦 草木の紅葉の形状をいふ、山朋魚簗 山朋魚の形状の野ふうぐ咲ル花の千種ハ 邦忠、崩 春の部上り魚簗の条ニ注ス、暮の秋 暮て行秋をいふ秋の暮ニ混ズベからず、九月 九月の晦日をいふ、

や 七月

柳散 晋史 浦柳の賀秋ニ堪ズ

先ヅ 八幡安居の頭 十二日 紀事 凡安居の頭ハ大経営ニ故の三年以前その頭人を指点ま、先前年の十二月朔日ニ至テ八幡山下の卿家安居の頭をの十二月十五日ニ至テそ八幡山下の卿家安居の頭を動む、卿家村里中の長をいふ、その土地の中ニて姓氏ある者あり、又十二月八日今日石清水安居頭人の宅ニおいて、

達所小綱の神人長吏の補任を授けらるゝこと指部といふ又十二月九日頭人の宅に郷家衆を饗應し能拍子ありそれを古那志といふ是小習礼の訛なり又十二月十日頭人夫婦杉山不動堂の前にて垢離を修そこにて精進ムと云ひ又十二月十三日頭人浄衣を著し七所の社の奉幣を奉供そこの行粧甚だ古風あり放生川に橋二つあり一は安居橋と名く是安居當人の渡る橋にて常に不浄の人を禁ず頭人ころ迄と渡るに八今日山上相知る所の社僧の坊に止宿して精進潔斎をなすこの間西施桂の里の女子孫夜叉白布を以て頭髪をつゝみ桂飴を捧ぐ是を桂帽子と称す今京の童謡にいふ桂帽子是也十五日安居頭人夫婦社参本社の前に大なる松一本建て白布二疋とその上下の枝にかけ人をして仮に猿のまゝそこの松に登せそのうけ布の枝を伐携て頭屋に帰る後代修頭の設とす

増山の井 今八十二月十五日云々

糯米 本朝食鑑 今製する焼米は青稲を以て稃擂こきを去り炒り過してそを舂て糯米とす

此を焼米と称す甚だ佳味なり勢州荘野の市上にて焼米を造る者多し仲と以て俵子と作りて四方に送る、

藥師草 第切草ともの部るべし、**益母草** めの部るべし、

灸花 〔くくせ〕 蝮ある蔓草小白花をひらく内微紅なり児童其花をとり唾をそゝぎ蔕付の方を上やうに手足或ハ頬ふ貼るふさるまゝら灸のごとし依て名とす、○是和産なり其葉女青ふ似て七月蔓の間ふ筒咲の花をひらく五辨かうて少しく瞿麥の形あり、

やんま との部蜻蛉の条ふ出、

兼三秋物 薯蕷

和漢三才図会 和名夜万都伊毛俗ニ夜万乃伊毛今云長芋其根の長さ尺ゞ四五尺周ニ二三寸灰黄色肉白し煮て食ふべし、救荒本草 薯蕷溪の辺ふ多し葉と出し時ふ凡水ふ感じて鰻ふ変ずる者と半変ずる者と人性さまざまあり、○此者薯蕷とのふ薯蕷とのふ又山薬とのふ初の唐の太宗諱と薯蕷とのふ因て薯蕷と改む又宋の英宗の諱と薯とのふ因て山薬と改む、**焼鳥**

朗慎秘藏抄 燒あめとハ馬あどの尾髪をきりてこそさみてふの余りを燒て田ふ立るゝ其髪文とりぎて鹿のくゝめぬゝそゝと燒もあめとりゝ

八月 八幡祭

放生會 八月十五日諸國放ち鳥 此とりといへどゝ男山の神吏と以て京師の人八幡祭或ハ放生会とゝふ社頭美豆の南八九町ふあり人京と去ること四里余男山石清水と号或ハ雄徳山鳩の峯とも称す欽明天皇三十一年冬肥後國菱形の池の辺民家の兒三才の時神託こそ云我ハ是人皇十六代譽田天皇也と昌ふよりて豊前國ふ鎮座して八幡太神と称を傳へゝ貞觀元年秋七月八幡太神鳩の峯ふ移るゝじめ釈の行教南都大安寺ふ居るこれ僧姓ハ武内大臣の裔ゝ曽て貞觀の初め宇佐の神祠ふ詣づ一夏九旬昼ハ大乗經と説夜ハ密兒と誦を一夕夢中ふ太神告て云師王城ふ帰らゞ我も又随ひ行王城ふ居て當ふ皇祚と守るべしと行教やうやく山城國山崇ふ至るその夜太神又夢中ふ告て云師我居る所と見よと覚てこゝとをゝばゝ東南男山鳩の峯ふ光と現を行教こゝを奏して宮殿と成るゝ正殿三座中ハ八幡宮應神 東ハ氣長足姫尊 神功 西ハ比咩大神 玉依姫 後崇峻天皇源の姓と諸皇子ふ賜ふ時ハ幡宮を氏神ゝ此社と以本朝第二の宗廟とをとこゝふ毎年二月十日初卯の日神祭ゝり人卿神楽ふ准ぎらる八月十五日放生会あり養老四年九月征夷の事ゝり大隅日向の両國逆乱をよりて宇佐の宮ふ祈請せしめゝふその祢宜辛嶋勝婆豆米の神軍と率てかの國と征し献と討て利あり大神託そゝ曰ハ合戦の間多く殺生ゝゝそゝ宜く放生会と修をべしと諸國の放生会こゝふ始る〇紀事今晩神と幡神と肇中ふ迁し奉り神幸ふ促そ左右の馬寮卿馬三疋と幸ゝ召使官幸外記史左右兵衛の府ゟ参議上卿左右兵衛府上臈前駈ふ給屋殿ふ参ゝて向ハ神輿猪の鼻と下ゝい寝院頓宮ふ至りそこ行列行幸ふ准ぎ、この式後三条院延久二年ふ始る當社の祭式甚ゞ盛多ゝ故ふ略そ

八束穂

和漢三才圖会 状雀冒鳥ふ似て頭黄白ふ赤色を帯ぶ眼頷の辺ふ黒き條あり背灰赤色胸毛ゝゝまゝのいと長きことゝふ、**山雀** ふ黒く腹淡赤く性慧巧よく轉る好て胡桃を食ハ、

紙撚の輪を作て篭中ニ設くる時ハ飛て其輪と磬る別ニ箱と篭の隅ニ安て宿處とそ○此鳥熟とよこゝ山雀ニ異とそ

九月　山口祭

注ニ不ㇾ及

敗荷

へて放ち鳥乙由

中巳午ノ日　周防国吉敷郡仁壁の神社、九月中巳午日祭礼を行ふこれを山口祭といふ、山口の古名ハ仁壁の庄故ニ仁壁の神社と号ス祭る神住吉三神と以ク本社ニ合せ祭る神二神、味鉏高彦命下照姫の命各、社以上五殿三社をつゞく仁壁の神社と号して又織機大明神とも又稲宮とも称も衣食のことを主りのふ神ふるふりて此号あり祭礼のそゞ織機の神皇あり次の日神幸神輿三座本社の西神幸の地ニ出し奉る流鏑馬ハり、皆国司まりこと執行もらる、有司ハりて国主の拝礼あり又六月御田の祭ハり、鎮守の年月詳ならず八王十一代垂仁天皇の御宇、勅幣やと奉らるその傳記失散を、八幡花の頭

廿日　紀

山城国八幡山の社僧九月廿日花の頭と修を先六月撰ちゞめて花墓と造ることと地盤剥とふ我

俗板と割を学とふ又剥とふ是ハ板と剥て臺と制衣るの義ありり、花の頭とハ社僧の弟子髪と剃衆僧の列ふかるのとき、社僧と郷食ふ彩篭と以て草花と製し臺ニ神前の廻廊ニ飾り酒宴の興を催も、故ニ花の頭と称も、

山路草

菊の異名と○すなるそをきく山路のきく谷の柄のくちめるのちも猶やおらん　前内大臣實継

焼栗

焼くる栗と、

山粧ふ

卽遊録　秋山明浄して粧ふ如し、

破芭蕉

芭蕉翁移芭蕉詞二云唯この蔭ふ遊びて凡両ふ破と安きを愛るのことそ

漸寒

次第ニ寒きとふことをあそ秋の末の寒をこと云、

七月

の条

槙賣

ろの部

六道恭

大和本草　金燈花、鐵色節とも云、

ふ出、

曼珠沙華

月令廣義ニ曰冬ニ春葉茂り夏月花と生して巣死る花巣相衛らそゝ此花下品ニ其葉石蒜ふ似り一類ニ此花と國俗曼珠沙華と云翻譯名義ニ曰曼珠沙ハ此ふ柔軟又赤華とのふ西陽雑俎曰金燈草俗人家ふゝと種ることと悪ふ一名無義草と云

花ひるときハ葉ゐし、葉ひる時ハ花ゐ〳〵、○俳書ゐを曼珠沙華、石蒜同物ともとハいへど、鴛信翁の説ゐ従ひ石蒜ハ志の部ゐと

松虫　和漢三才畐会　蟋蟀の類、褐色ゐうちそて長き鬚、腹黄ゐ、野草及び松杉の籬ゐ在り、夜羽と振て鳴声知呂林、古呂林といふごとし、甚ご優美ゐ九松虫鈴虫昼ハ潤ぐゞし、夜燈火を照ゐ時ハ光つと慕ひて来るを捕へて籠中ゐ畜ふ○今俗ういリンくと鳴と鈴虫といふハ訛ろし、是松虫ゐといふ、鈴虫ゐ、チンチロリと鳴といふ、

兼三秋物　**眞夜中月**　廿三夜ゐ、出て午の**ます**すき**ゐ**　魚名抄　穂の長さ一尺二刻ゐ入ゐ、**十寸穂の芒**　むらなるをいふ彼ますかぐゞと万葉ゐ十寸鏡ま**そ**う**か**ゞみと書るゐてろ得べし、**古**同上　真の蘂抄ゐ

真蘂宇の芒　と書るゐてろ得べし、**古**同上　真の蘂抄ゐ

といふ心ゐ、**真蘂抄の芒**と、**ま**そ**か**すきと、いふべきを、**麻芦穂の芒**　詞を畧しゐる心色深き芒の名ゐゞ、

麻の糸　同上　真麻の心ゐ是俊頼朝臣の哥ゐよみて侍る、ますをの糸とろうけてと侍る糸ゐゞの乱れるゆうべ云々　倭訓栞ゐ、たそをを入とおかやもるうの穂の赤きをいふ、ますを、まそうをといふハ訛ろし、俊頼○まそをの芒とハゞゐるゐてかやと赤赫の意ゐるとゐ記ゐゞして各別種ゐ注せるハ誤ゐるよ、

松尾梨　形観音寺梨ゐ似て清水濱臣の考ゐり、奥州會津の中、松尾の産ゐ今洛の人家所々ゐ植得て、頂妙寺狩と一双とをといふ、

圓梨　言梨の種類ゐて大きく皮薄く色青くして甘美ゐ、

八月待宵　八月十四日夜孫無言露暗重芒蟐初上欲四時情樽素瑟宜先賞明夜陰晴未可知○待宵とハ翌の夜の晴曇りはうがさけまゞ先今宵月を賞そるゐ、

三潮草　和漢三才畐会　九松待とハ翌の夜の月と待義ゐあるへし云、

松茸　萱ハ山城の北山の産最佳し、赤松の陰所秋の雨湿の為ゐ醸ざるゐ生ゐ、初め落葉を戴きて見ゆるゐ、漸く長ずる者三寸頭四く柄あり、鼓の槌の如く、其大さる者尺ゐ迄し、日ご経て傘と発く、外の色黄白紫と帯内白く

細く深く刻こあり其柄太き者柔ふし　舞茸　同上
て味良し八九月の交盛あり
小柄にして、叢生まびきまた
ハ朽木に生ず、濃柄あり、一株片々と
炭茸の如くして、上黒く元白く味脆く甘し、　間引菜

貝割菜　摘菜　和漢三才圖会　凡蕪菁蘿蔔の類、大抵
小菜　八月種を下し彼岸中小苗を生ず、其發芽
を抜て煮食ふ摘菜間引菜是こゝ云き又曰苗と生し地と出
ること一二寸、漸く莖て二葉あるを蔬とす是と貝割菜と号
猿ぬこと照あり、大はこゆり、　豆鳥　和漢三才圖会　正字未詳、状大さ雀のごし
猿子鳥　全体灰黒胸腹淡赤し羽灰黒色みゝく
黒き彪あり、尾の下両端ふ白者二つ、其嘴短くして赤黒
く脚黒く頂灰黒、頭より胸ふ至て淡赤みて白き圏の
ごし千葉菊花の紋の如し、　豆甘美　いの部桑鳥
豆廻　の条をこゝべし

九月　豆名月

八月十五日の月と芋名月といふふ
對して、十三夜の月と豆名月とふ、

外市

すの部住吉相撲会の条ふ出ツ

鞠花　菊の異名ゝ　藏玉ふらえ

菊の字本鞠ふ作る、鞠ふ從ふ、鞠ハ
音キク訓ミリ又鞠の如き形とのふ意
白緑色　ひくくせと　此種蕃邦より渡りて此訓ハ則蛮語
ふり、今京師ふ多し、梨子の如く凡味も又梨子ふ似て
少しうろしうせいことの菓子ハ、豆　和漢三才圖会　赤俗作赤
こゑふ砂糖と和して製しさゝくを蒸とのふ菓と蘿とのふ本綱ふ菜ある穀
を其とのふ蔬と其とのふ、

槻木の夏

の總名皆朱とのふ大豆ふ黒白黄褐青斑の数色あり、
大抵夏至十日以前種を下し、まきて
七月花をいらき九月莢を結ぶ、　正木の蔓　真淡羽
れぞらかと常盤あるかづらをまふてらふべしいろれば
いとうつくしく神社ふよりて用ひるれしいさまくいるぐき
中ふ榲桲ぐせ八一種有久、古今集ふ深山ある
あらしふるう外山あるはきのうつろひやすきをう、
とゝみしふそて常盤ある草木も冬のそらのふる玉
年の古葉色づき落るが山の岩木もぞふゆとする
ととそうづ〳〵葉ハ南天燭ふ似て黒くあるが冬のそじ
めふえもいそぞとそうづるより、是ぞ山行時かそら目つ

つきてこゝのもとに、右のごくはよみつゝ云〇真淵翁の説ふよるときは、宅家莫よ似ゝり、俳諧よ秋季ニ定のるは古哥ふ色づくよりきたるべし、**冬青木の實** 和漢三才圖会 冬ニ日其葉冬ともゝのこ正青ゝ光澤あり、四長ゝて尖らど、鋸歯あり、夏ふ白花をひらき、秋実と結ぶ生、ゝ甘ゝ熟ゝ紅ゝ、おのづゝ裂て中ふ白子あり、枝をさゝて活易し、落離とゝるゝ選ふ、**椿** 大和本草 椿の一種ゝ葉ハ椿ふ似て厚ゝ大ゝ色深青ゝ面ふ光沢あり、屋材ゝ器を作り舟の櫓とゝ其用椿と同ゝ、一類別種ゝ実ハ椿より大ゝ熊 和漢三才圖会 其実椋とゝゝ民用と助ゝ〇実を以て秋ゝ、**檜** の子れ如くゝて小ゝ、蔟ゝるゝ生ゝ青ゝ熟ゝ赤ゝ、裂て内紅子三ッ四ッ粒あり、其葉秋ふ至て紅ゝ、

松の實 その部松子の条ふ注ゝ、

七月 立秋と

今朝の秋 いふ、

牽牛 その部二星の条ふ出、

夏解、夏蓋、百納

夏ハ四月十六日ゝ七月十六日解ゝ是と夏解とゝふ、二夏九旬の間、他の化益の為ふ聖經及び名号題目と書寫し夏終るの後是と堂塔伽藍ふ納め三寶ふ供ずる日旬ゝ是と夏書納とゝふ、在家ゝ家ゝ仏ふ此ふ效ふ、

夏解草 釈氏要覽 僧尼解夏の日綵と以て節と束ねて檀越ふ遺ゝ、ゝ是と夏解草とゝふ、今この草と詳よゝそゝ已ゝ分法身の座とゝ故ふ吉祥草と名つく、漳州府志 四時一色、泉石の中ふ生ゝ山村の人瓶ふ挿ゝそゝ売ゝと祀ゝ陰手ゝ、ゝとゝ葱蒜ゝて凋ゝ、家ふ吉事ゝれゝおのづゝ花開ゝ故ふ吉祥草とゝ名づく、字彙 節ハ伊又反音印、草の名ゝ、大和本草 夏解草ハ麥門冬の大ゝるものゝ、

兼三秋物 玄兎 月の異名ゝ〇謝莊月賦云引玄兎帝臺、

月宮殿 〇つの部月の兎の条ゝよゝしゝるべし、

雞頭花 時珍曰雞冠花の形と以て名つの部の条ふ出、都ゝ春苗と生ゝ夏ふ至て高き者五六尺、短き者纔ふ數寸、中暑六七月梢の間ふ花をひらゝ紅白黄の三色あり、中暑花最久ゝ耐ゝ霜の

後始てけいも 鎮江府志 莖も葉も花も實も山菜
焦る、 黄獨 ふ類まて、葉大ありてそ〳〵山く根ハ芋に似
くろみて艱あり味微苦し○ 正字 白石李子 蓋
俗ふ何百烏玉とよく者是之、 杓榧 杓榧ハ実の名のごと、
その実大こ大豆の如し、こゑと喰へハ少しく梨の味あり、
小兒胞瘡鼻穴閉るもの、こゑとりて其鼻穴を穿つ、

八月 けふの月 つの部月見

年の貢を納る九秋来収納をるの法晩秋ふ縣吏先こ
田地の立毛の善悪を巡檢をり是を毛見とのふ草をもと
りふ故ふ稲未ノ獲さる赤立毛とりふ、 墾畑 栗子蒔 月今廣義八
栗子と種とバ花 月十五夜 墾
盛やして繁し、

七月 舟形の火せ の

部施火焼 古枝草 萩の異名ふ 藏玉 宮城野
の条ふ出ッ 芊 や露も色ある古枝草こと
しの秋も花ハ 和漢三才圖會 高さ二三尺葉
さきとり西行 藤袴 女郎花の葉よ似て切叉あり、

六七月細き白花と開く、ふ今云藤袴是之、 俊白抄 蘭 和名
本草云布知波加萬新撰 万葉集別用藤袴二字ふ大和本草 真蘭和名藤袴又ノ
ラゴとりふ古哥ふらゐとよめり八雲御抄ふ蘭と
ふちむくまとりふと書あふ葉ハ麻ふ似て両岐あり香よし、
乾て弥香し是真蘭ふ野ふあり秋紫白の花こゑりふ若
葉ハゆできて食をべし其芳香美味凡菜ふまさる、詩
經楚詞おどふ詠ず蘭是之ふ 和訓栞 花の色をもて藤ふ称
し其辨の筒とふせるをもて袴と称せり、○袴ふおもふ
を奇俳諧とりふ同し 古今 何人もきそぬぎうけし藤袴ぞる
秋ぶとふ野べとふれます 曠野 藤袴ふ孔窮窟ふうしせ蓬
あでやむし 蟋蟀の異名ふ異名分類 古き筆の作こふ
とりて おそうむし 秋も今いと浅き生ふこ
おうちる 声ふこゑれり、 兼三秋物 臥待月 八雲御抄二子待
臥待廿日月あり
挂明抄ふ永徳の頃、為重卿廿日日とりふ題おそこゑまこ
まつの月の臥待も猶宵の間ふをきて出おき 臥待月八
雲ふ廿日月と遊さまとりて廿日月ふ詠八ふ
審ふくゆいでも月の百首ふ廿九日の月ふ〇一説ふ臥待

月八十九夜の月を又寐待月ともいふ、更まち月 藻塩草 廿日の月ぶり、筆柿 形ふうたんぶだうがきて長し、蒲萄柿 本朝食鑑 俗蒲萄柿と称も或い猿柿ともいふ味佳まるといへども用とするまで、八月 匏 実の条よ注も、木芙蓉 水芙蓉 出者ことと草芙蓉とのふ倚の花是也陸ふ出る者ことと木芙蓉という時珍曰此花艶一く荷の花の如し故ふ芙蓉木蓮の名あり八九月始めて開く故拒霜と名く中暑冬凋こ夏茂こ秋の半始て花を著く花牡丹芍薬ふ類く紅白黄千葉の者あり最あ寒ふ耐て落ど實と結むまる括婁の葉ふ似て五の尖りあり髪を生じ蔓延數丈と引三月小花とひらき穂をなも黄白色実連り着く星の如し七八月 蒲萄酒 時珍曰蒲萄酒ふ造熟ま紫ふ白の二色有、バ陶然うて醉ふ、故ふこの名あり、 伐袋洗 山海名産畫会 伊丹ふて新酒成就の後猶名川の流ふ

秋ふこ 七十七

秋ふこ 七十七

伐袋を濯ぎそのころを待て近郷の賤民この洗濯ところ、其爪味薄き體の如し曼又他ふ異あり「賤の女や袋洗への水の汁

鬼胃〇青藍云鬼胃の異名ともいふ、秋葵ともて子細あるべし、二季子鳥 蔵玉 雉の異名ともいふ、

と古里ともて二季子鳥ともいふ、

ふさらへ行うるうん 忠岑今 九月 不堪田奏 江談抄

堪佃田の申文 九月七日 或八五日 公事根源是八諸国の田の損亡ふる所々の目録とて奉るとぞ

ふことありこあふ諸国より坪付帳を奉れば大臣車ふつきてちぐみ申て諸國ふ施行ありし作ふ堪ざる田ろおそ不堪田ふ申ろり、

二夜の月 七の部十三夜の条ふ注、

鳴滝祭の 佛手柑 和漢三才畫会 其樹柚ふ似て刺おほし、全く柚柑の葉ふ似を摘大ふ冬青色筋理顕然として香多羅の葉ふ似て実ふ緑豆ふ引らもと 大和本草 昔本邦ふこもなし近世来る、 緑豆一年の内ふ二度実う故ふ 佛甲草 大和本草 八重生とりハ〇苅收ると引といふ、

京都及び諸州ふ一夏草とゐふの是ゝ又根ふ一草と云、根鬚あり葉ハ細長くして茎と折て上ふ挟めむ能生ス滑稽雑談或説ふこの果の形指の爪ふ似ゝ故ふ仏甲草とも仏指甲の名あり、此草の葉生ひ出て石地ふある形蓮花の如く故ふ岩蓮花とのふ篤信ハ稚ゝ冬ととゝ〇岩蓮花ふわらびをハ佛甲草く雑物あり、

待、冬と隣 注不及 二七月 小町踊 部七

夕踊の条

御霊ヤ御出

十八日御霊の社ハ上ふ京都の北西ふあり、下ハ京、下ふ出、

極大炊御門の北ふあり、雍州府志此社始ハ近衛通新町ふあり、上御霊ハ京極の西出雲寺の北ふあり、上下御霊の社、毎年七月十八日御出、八月十八日祭礼あり、神輿二基ゝ御霊ハ所ハ崇道天王伊予親王吉備の聖ヨ大臣藤原夫人橘逸勢文屋宮田丸火雷神ゝ世ふ火雷神と謂て菅家の霊ととゝる者ハ誤ゝ傳云御霊ハ所の内四所ハ桓武天皇の御時ゝまゝと勧請をゝ下の四所ハ仁明天皇の御宇ゝ〇上出雲寺と上御霊の神宮寺ゝ下出雲寺と下の御霊の神宮寺ゝす、御教大師の草創ゝ〇今両寺とゐふ小絶ゝ寛文年中慈眼大師の遺誡ふよりて久遠壽院の雀石山城国宇治郡山科の郷ふ於て出雲寺と再興ス、ゝ〇毘沙門天ゝ安置ゝゐふ御霊の社あり、是古と存ゑるの遺意ふあり、上御霊の御旅所ハ京極通り中御霊ふあり、下御霊の御旅所ハ年々その所ゝ定めぞその年神事頭屋の家内ふ安置ゝ、御旅所ふ在ゝその間ゝ御旅ゝ称す、

おとゝし使

すの部相撲ゝの条ふいへり、

小鷹狩

滑稽雑談 初鳥狩小鷹狩

万葉新点ふよるハ差別ふゝ小鷹ゝ秋とすゐふ鵠雲雀その外秋の小鳥狩ふり、大鷹ハ冬ゝゝそ鶴雁鴨の類ゝ狩ゝ〔とくせい〕凡て鷹ハ冬ふて小鷹ゝの分ハ秋ゝその種類多し、刺羽といふハ小隼ゝ朝鮮より来る雀鷂雀賊、つゝこの雄ゝ兄鷂鷂ころりの雌ゝ鶻ゝちゝ巣ころりゝふ、秋巣より取といふゝ凡て鷹ハたゝの捻をゐれゝの別てハ大ゝう、鶻ハ小たゝれ悪名ゝ、

紅梅草

仙翁花ゝせ

浮蕾

一名沢桔梗

の部ゝゝべし、

[古今せセ]葉ハ葵の形ふ似て滑ふるところ那岐ふ似ふ、百久の末ふより秋碧花をふらく花こまふぎと云〻水皇ふ、[昌三]と水葵ともふらんこる輩多し、水葵ハ蓄〻、花苗ふり、〇腥し小ふぎの上の鼈の腸芭蕉、[和名]**龍馬**[西陽雑俎]龍馬狄促織の如〻俗ふいふ龍ふ馬あれ〻食ふ足の北[大和本草]蟋蟀ふ似て小ふけ足ふくせい高く頸尾さがりてまるど〻龍のあうふ穴居まて筑紫の方言ふ井ヒゴ〇海士う家ハ小竈ふあ〻るゆ〻うめ　芭蕉　[兼]

三秋物

心の月

[萩の枝折]心の月と云清き心とらさ〻、**氷の輪**月と見立て云[東坡詩]氷輪横海濶

氷の鏡

月をふ、**牛蒡引**汪よかし淡霜を生ぞ

胡盧枡

一名豆枡即乾枡　**樹練枡**形鳥の卵のごとく摂津丹波ふ多し所謂鶏の子枡秋京師ふて御所枡を以木練枡といふ、**御所枡**大和の御所村うり出ッ樹洛

紅瓶子梨

瓶子の形ふて**空閑**赤く其肉白の上品ふ物、**梨**肥前の産微赤色極りて大ふり其味川梨ふ亞者と江鮒と名く或ハ名古屋或ハ伊勢魁或ハ口々又伊奈洲走小瀑江鮒とい〻中畧八九月稍長じ大さ六七寸江海の交ふあり此時泥味ふく脂多くして愈甘美色黒ふ成して瀑し洗ふが如し故ふ小瀑江鮒とふ、

八月小望月

十四日のこと月とふ、**今宵の月**の条ふいづ、**駒**

牽駒迎

[江次第]望月の駒[和漢三才]本八月十五日ふり、朱雀院御国忌ふ依て十六日ふ改[会]蜻小き[年中行事]望月の駒[きり原の駒]崔院御用ふ〻頭書云信濃勅旨の牧ゟ貢ふ所の一ニ天皇南殿ふ出御ありて御馬を分ち取らむ出御なきこと記ハ建礼門の前の大庭ふ於てこまを牽分しむ云〻裏書ふ云上野九牧迎喜式ふ廿八日ト云〻七日甲斐又の勅旨の牧十七日甲斐穂坂の牧廿三日信濃望月の牧廿五日武蔵勅旨の牧又十五日信濃勅旨の牧廿八日上野九牧以上六个日迎喜式ニこゝそりこの外兼平官府十三日武蔵秩父の牧廿八日同小野の牧の御馬こまと貢[公事根源]公卿以下次ゟ

ふ卿馬と給る馬の差繩どとりそろて御前ふをゝこ一疋を東殘
しゝる馬と引分の使そて次將と以て院東宮ふぎこゝる
べき所々へまわらせる八新菓秋の田の穗坂の駒と引つれて
とさ淸涼殿の世のうへも有り御村上御製金菓東路とは
るゝふ出るかち月の駒ふこよひやたゝ坂の關仲正拾遺
相坂の關の出ちごゝ踏あら〳〵中さちかぢらきりぐらの駒馬遠
蔭葎一のとや衣　御靈祭　十八日　八所の御靈祭〳〵八所の名七月の部御靈
やおゞ駒むゝへ土菓　の御出といつる条ふ注セ

見合セ紀事午後ふ神輿二基中の御靈の離宮と出て幸
べし〳〵の鉾八本、凡鉾と床上ふ建て榊二本四人と以てこ出こと苛八
と幸の鉾ふ八神宝の内特ふこと持ふこと尊敬セ又勢力の人
鉾と帶の間ふ立、両手を以こと捧げ行これと祭鉾といふ
又一人竿の先ふ道祖神の假面とうけて神輿ふ先ゞつゝ此
仮面の鼻長大之俗こと王の鼻ぞとのゝ別當及び氏子供奉、
御旅所より西のゝこ今出川下烏丸と經て長者町より室町
と過り本社ふ入、上御靈の社八京極通筋道橋の乾二町余ふ
あり、下御靈の神輿も同時ふ拜殿と立ッ鉾五本別當氏子
供奉、上御靈の行列の如し、神幸の路次京極と出、椹木町
の西より東洞院の西と歷て出水ふ行、室町と下り二条と
過り、油の小路の下立賣と上り東へ行京極より本社ふ入、
下御靈の社八京極通大炊御門東　定考　十一日　名目抄　定考逸
北の方ふあり、例祭八月十八日ふあり、
ふ讀例之公事根源是いむりく六位以下の加階とうけ八、
かの藝能行跡挌勤とそらえ宮の東の廳ふつきて事と行ふ次ふ朝所ふついて三獻
の儀式あり、次ふ安穩の座ふつゝ又三獻あり、捕頭の花
と上卿以下の冠ふさゝて大臣八白菊、納言八黃菊、參議
八龍膽、其外八皆時の花とさゝて、造花ふあらず、大かこ
二月の列見ふ同じ、式兵の両省より、諸司の輩の吉と選
成ものと列見といひそゝと書あつめて奏ゝつゝ擬階の
奏といふ、此人々を擇出して定めらるゝを定考といふ、衣うつ　きの部　袖の
条下ふ出、金
剛草　和漢三才圖会山野處々ふあり、高さ三尺莖
枝花葉並ふ萩ふ似て小く、七月花を開き莢
をむすぶ小豆の莢のごとし、中の実黒く其根甚ぐ強し故
ふ菊人牛馬と繫ぐべし、俗呼て駒繫ぎといふ〇陶弘景曰

狼茅其根獣の歯牙のごとし故ふ諸名あり　華蔔　和漢三才圖会　山の蘘ふ木の葉を戴生を、状松葉ふ似て繊の外黒く粒々の皺あり、晒し乾せば黒み、やゝて染革のごとし、裏黄赤みありても糸の如きものあり、柄ふ鱗甲あるそ　味微苦し、

五十雀　和漢三才圖会　正字未詳　鳥の部四十雀の条ふ注を、小雀　和漢三才圖会　俗ふ云古加良、状山雀ふ似て小く故ふ俗呼で小雀とのふ山林ふ多し、頭黒く頬白くして四き紋の如く背腹白く翅尾黒し、其声滑ふして多く囀る、捷軽ふして上下ろえざるよ同し、其条ふ注せり、

九月

御灯　三月

御香宮祭　九日　神社啓蒙　山城国伏見京町の東ろあり、祭神一座狭、神功皇后、〇古老云鎮座年紀分明ふらず、昔より垂跡此地ふより秀吉城を築くの日東の丘ふ移し奉るとのふ、今の社地ふ、神の崇ありし故後旧地ふ迁し奉るとのふ、〇一書ニ云この地紀伊郡ふ属を、例祭九月九日ふ、朝日と御出とのふ、十日神事能あり、はじめ祭る所の神九座ふ、神輿も又九基あり、土人本店神と

を今ハ神輿一基造り山二基、遠物ふを出す、〇当社ハ延喜式ふ載する所の御諸の神社是なり、鎮坐年月未考、一書ふ貞観二年勧請のよろ記せり、

後日の菊　紀事　九月十日或ハ十一日禁裏ふ残菊の宴あり、

御難の餅　土言　文永八年九月十二日、日蓮上人相州鎌倉龍の口ふ於て尼難あり、白刃の下僅ふ一命と全うす、今日宗門の徒餐と作りて像前ふ供するをいふ、

小倉祭　十五日、豊前国到津の社ハ企救郡今村の庄到津村ふあり、祭る神、中ハ應神天皇左ハ神功皇后、右ハ玉依姫ふ、草創年月詳ふらず、後鳥羽院文治四年、宇佐八幡をこの地ふ勧請しもの神秩と分て四時の祭祀を備ふ尓して、宇佐太祝の子孫世々祝史とあるその後清末駿河守といふ人到津の城ふ居して常ふ奉祝す、天正の季九國乱れて神社灰燼となり祝史の家族も四方ふ流離して到る所をしらず、ふ於て里民一宇の祠を立て僅ふ古跡を存ふ、慶長年中細川侯宇佐の社を造営し又到津の社をも、宝暦庚辰の年小笠原侯更ふ祠壇調殿を立て祭事のこと益旧

きふ加ふ、九月十四日晡後神輿仮殿ふ遷ふ流鏑馬あり、夜ふ入禊を修し舞楽を奏を、神湯の祝あり、當日十五日國主家臣をゝて幣を奉らしめ又流鏑馬あり、晡後本社ふ還御、一説ふ小倉祭或ハ巨掠ふ作る山城國宇治の辻陣ゝ例祭九月十五日といふりもろ〳〵ども増山の井その外の書々、豊前の小倉と記をゝるし、木隔冬ふ

廿四日、神社山城国宇治郡木幡ふあり、〔雍州府志〕祭る所の神正哉吾勝速日天忍骨尊ゝ是地神第二の神ふして父ハ素戔嗚尊ゝ後ふ天照太神取て御子とゝるふ、この神下土ふ降ゝるゝ故ふ山陵多くしてその主と祭ゝて木幡の神社と号をゝ○例祭九月廿四日今神輿二基内一基田中明神ゝ田中の社ハ同所地主の神ゝ祭る神詳ふらず、或説ふ柳大明神是木幡の神ゝ

金草　菊の異名ゝ〔藻塩草〕名ハ

もゝふきの数ゝ

金菊　花濃黄ゝて

ふ春苗と生ゝ、五月ふ至てこゝを移ゝ長一二尺宿根より自苗生ゝて、根の大さ芋魁のゝ〳〵ども増山の東のよべのころの草ゝれ

蒟蒻の花　時珍

曰春苗と生ゝ、五月ふ至てこゝを移ゝ長一二尺宿根より自苗生ゝて、根の大さ芋魁のゝ〳〵ども増山の○蕪頌日莖斑ゆゝ花紫ゝ、木の實

菓物秋多し故ふ名をゝく、秋あり、

柑子　和漢三才圖会

ゝて木の實とゝゝ、秋あり、

安ゝるふ柑子ハ柑類の總名

あり、今云柑子ハ橘の属ゝ、

衣打　袖の霜

ふ衣打袖の霜と別条の如く認め出ゝゝ、青藍按おきゝゝこのさゝゝへいまゝゝて八月の部ふ出せるゝ再ゝふ衣打とのゝ出せる理ふあゝ、全ゝ衣打者の袖ふいふ時ハ九月の季ゝとゝゝ

砧　和漢三才圖会

ハ書写の誤ゝ

笘子環　元禄十年

枝葉集　元禄十六年

ふ衣打袖の霜と一条ふ認めゝる證ともゝ考へゝゝ

獨抱言　古ゆゝ別条の

衣打とふ文字さゝ首きて出せる皆誤ゝ

濱の真砂　擣衣

の条云飛路霜と袖ふ重て打ともあり云

要覧　閻羅王此ふハ遮ゝふ謂ゝ

俱舎論　閻羅王ハ地獄の主鬼官の總司ゝ

琰魔王或ハ琰羅ゝの

ふ、此ふ静自ゝと業と静思ゝると以ゝ、故ふ或ハ遮とのふ○七月十六日ゝ大

七月　閻魔参　十六日釈氏

きふ加ふ、九月十四日晡後神輿、假殿ふ遷ぶ、流鏑馬あり、夜ふ入禊を修し舞樂を奏を、神湯の祝あり、當日十五日國主家臣をゝて幣を奉らしめ又流鏑馬あり、晡後本社ふ還御、說ふ小倉祭或ハ巨掠ふ作る山城國宇治の辻陣ふ、例祭九月十五日といふりもろ〳〵も增山の井その外の書々、豊前の小倉と記をゝるし、木幡条

廿日、神社山城国宇治郡木幡ふあり、〔雍州府志〕祭る所の神正哉吾勝速日天忍骨尊ゝ、是地神第二の神ふして父ハ素盞烏尊ゝ、後ふ天照太神取て御子とゝのふ、この神下土ふ降ゝてゝ故ふ山陵多くしてそのヲ天と祭て木幡の神社と号をゝ○例祭九月廿四日今神輿二基内一基田中明神ゝ、田中の社ハ同所地主の神ゝ祭る神詳ならず、或說ふ柳大明神是木幡の神ゝ、

金草　菊の異名ゝ〔藻塩草〕名ゆゑ

もゝくさの數ゝ、

金菊　花濃黄ゝをいふ

萬壽菊　中ゝん故名ゝ、

曰春苗を生ゞ、五月ゝ玉てゝ實を移を長一二尺宿根より自苗生ゞて根の大き芋魁のごゝ○蕪頌日莖斑ゆゝ花

紫菊　菓物秋多し故ふ名をゝ

木の實　ゝ本の實とゝゝ、秋あり、

柑子　〔和漢三才圖會〕

安ゞふ柑子ハ柑類の總名ゝ、

橘　〔增山井〕

あり、今云柑子ハ橘の屬ゝ、

衣打袖の霜　〔四季花寄〕九布合

月の部ふ衣打、袖の霜と別条の如く認め出ゝ、青藍按ずるふ衣打きぬ〳〵のさぐいまぐて八月の部ふ出せると再ひ九月の部ふ衣打とのゝ出せる理あり、全ゝ衣打者の袖ふ

霜　ねく霜とふ時ハ九月の本ゝとゝゝ

〔枕草子〕元禄十年ふ校楽集〔校楽集〕元禄六年ふ衣打袖の霜と一条ふ認めゝる證ゝ

誤　書ゝるハ書写の誤ゝ、

苧環　元禄十年ふ校楽集〔校楽集〕元禄六年ふ衣

打袖の霜と一条ふ認めゝる證ゝとゝもふ足ゝらずゝさるに深く考へずゝ〳〵獨按古ゆを別条のごゝく認め又〔糸衣〕糸衣打こゝふ文字ゝ、皆きて出せる誤ゝ〔濮の直砂〕搗衣の条云露霜を袖ふ重て打ともあり云

要覽　〔閻羅王〕此ふハ遠ゝいふ謂ゝく遠ゝとゝ悪ゝと造ゝるゝ也、

俱舍論　〔閻羅王〕地獄の主鬼官の總司ゝ、〔譯名義集〕

琰魔卒　或ハ琰魔羅ゝとゝふ、此ふ靜自ゝと〔譯名義集〕造悪の者不善業ゝと訶自ゝまるとゝ以ゝ、故ふ或ハ遮ゝとゝふ○七月十六日ゝと大

齋日とのひて善事と修し、奴僕ふも暇
ととらせて閻魔堂へ詣でまうでありく、

紫苜蓿 和漢三才圖会 紫

葛の葉蒲萄ふ似て大ど姓
ぎと又一種野蒲萄あり、

槐の花 三安石譯三槐
黄中ふ其実と
悚く故ふ三公ごとふ位を、○藤須曰槐木極めて大ある者
あり、按ずるふ尓雅ニ云槐數種あり葉大ありてく黒きさかり
槐槐と名づく、書合して夜開くものを守宮槐と名づく、葉
細ふして青緑あるものこれと槐とい、四月五月黄花をひ
らく、六月七月実と結、和漢三才圖会 其花未開時米粒
の如し、其実莢ありく連珠を、中ふ黒子あり、○槐の花本
草ふ四五月開花とく、然ふ増山の井毛吹草

狼尾草

等秋とせるふこのりて、志むくくく妥ふ出も、
あを 時珍曰狼尾其穂の象形ふ秀てまくをぞ凝然と
草 こそ田ふあり故ふ守田公翁の称あり莖葉穂粒と
もふ粟の如し、開宝本草 蘭草の葉馬蘭
ふ似てう故ふ蘭草と名く

燕尾香

色紫黒毛あり、
其葉岐またあり、俗
ふ燕尾香と呼、

兼三秋物 **犬子草** 時珍曰穂の象狗尾

故ふ俗狗尾とよべり原野垣墻ふ多くく生ぢ苗葉粟ふ
似て穂も又粟ふ似てう色黄白りて実あり、和漢三才
圖会 小児ども用て蛙と釣て戯る、もくう仕ともの二
草おのれと種のあるものをまたものまるといひ誰ういひ俗
云阿波国鳴門例ふらぢ鳴動して **圓座材** 形大ありて
止まて和泉式部此草と詠ぜりと附の處肉起て鹿とまるとも
もの、所謂著蓋材欤、

八月 繪行器 綵雀

所の女子ふ行器一双と贈る、その行器の中ふ生物せり
藤の花と盛藤の花ハ白糸餅ふ赤小豆と点じてうし此
餅の形虎ふ白糸ふ似てう故ふ白糸餅ふ赤小豆を
称してあらとらふ物ふ点ずるを是あうつきの異我ととりて深更と名くらふ
豆と点ずるを是あうつきの異我ととりて深更と名くらふ
今日童の戯ふ松笠と以て雉子と作り、或ハ烏賊の甲を
以て鶫鳥雀鳥を作り、或ハ糸繋を以て金竹蕃虫の雲夫を
括りて瓢の形とふ又挑仁と刻こそ松虫と鈴虫と是ふの

忽ち火神とありて天中樓を焼く時ふ后兇しくて曰八月乃至
随節減ふく傳へふ凶悪の日ふ陰陽家天中の札と以て良
賤の門ふ貼も、**天狗茸** 大毒あり故ふ
人ちょうもぞ、**てらつきさ** 木啄鳥ふ、
きの部
天王寺一乗會 十四日 摂州大坂四天王寺
一乗会八九月十四
或ハ十五日、六時堂ふおいてことを修を、此堂傳教大師草
創ふ旦本尊薬師如来、日光月光の三尊大師手造ふり
とふつり、寺説ふ云九月十五日未刻衆僧三綱堂の司楽ふ
沙汰ふ人堂仕ふ人出仕ふて、先ッ時刻と三綱及ひ一和尚ふ告て
出仕の鐘一番二番と撞諸役人太子堂へ出仕ふて太子の
像ふ鳳輦ふうつすその式二月十五日の如し廻廊の下ふり
六時堂へ渡御あり、法事の次第振鉾、阿弥陀經傳供万
歳楽、迦吉祥楽陵王納曽利悉く終ふて酉の刻還御
天満流鏑馬 廿五日 摂州西成郡天満ふあり、祭る所
の神北野ふ同じ九月十五日 流鏑
馬あり、社家ことと勤む鳥居の辺より
天満橋ふいたりて馬と馳て的と射る、 **出落栗** 紀支
土俗

類ことと玩び或ハ互ふ相贈ふこれと頼合とりへふ〇**繁蔕**
と雉子鷭の類と同ふ、又意坂ふと枝ふぐら折て行器ふ
ふあふ相贈ふ京師の俗
これ今日ふ嘉祝の物ふ、**こえゆふ草** 龍膽の和
名もり、**榎**
蕈 〔和漢三才画会〕榎の根上ふ叢生ふ繊一二寸ふ黒
色裏白し細きふ刻あり、微香甘りふく味ひ美ふかり、久
大和本草 榎本草ふ揪の類ふあふ、榎を
九月 **榎の實** 今按ずるふ揪の類ふあふ、榎を
巣桑ふ似て筋多し、冬落葉を実ハ胡椒の
大きふ秋熟して黄ふ味甘し小児好で食ふ、
月兼三秋物 **天井守** との部番椒の
条下ふ出ふ久 **照**

月次 〔拾遺〕水の面ふてらふ月なことぞすべ今宵ぞ
秋の寂中ふりける 源順〇てらふ月と月次ふ
けてよ「八月」**天中節** 〔朔〕〔拾芥抄〕八月朔日の日
めるふ、の出ふり以前ふ天中節
赤口白舌避節ふ書て門戸ふ押 陰陽秘法むかし大
国ふ后天中樓ふおいて事あり其ふ素懐と遂ふるふより

誤ならん古へ不孝の子あり、此栗と以又ふ投てこれを儆る、因てていち栗とふ和俗又を称してていちとふ〇一説此栗自ら毬と脱ていちと地ふおち、故ふ出落栗とふ、

あ

七月 秋の初風

秋の来し支ゑ、秋さると姫、朝

顔、姫

棚機七姫の内ゑ異名分類

等ゑと注釈見えぎ、秋去衣 八雲御抄

秋去衣とハ

棚機の布ゑ御傘 棚機の具ゑ云 万葉拾穂抄

只秋の衣をゑ秋さりハ秋の来るとふをまり、天の川

銀河 銀漢 雲漢 字彙

星河 河漢 天河、箕斗二星の間ふあり、其長きこと天ふ竟を、 揚泉物理論 漢

水の精ゑ氣発ていと昇り、精華上ふ浮ふ究転して飛流る、名づけく天河とふ、一ふ雲漢と云衆星てふ出ッ、

鳥井の鞠

梶の鞠 紀事

棚機ふ飛鳥井家並ふ難波家蹴鞠の会恒例ゑ上加茂松ヘ

露拂並ニ枝鞠上足ふの義あり、堂上及び地下の門人多く集る、 滑稽雑談

捕の鞠の事を毎年七日飛鳥井家

ふて行ッてゑ式ゑ鞠の露拂ふ當家門弟の上足の者、坪の内へ持参る、是二星〈手向る心ゑら〉、荒鷲鳥

鷹の雛己ふ巣と離ま、自ら漁さる時、羅と以て捕ふ是と網掛といふ又あら鷹とふく新ふ捕てく人ふ馴ざると荒鷹と

いふ、

愛宕火

廿四日 紀事

より廿四日至ると云々 摂陽群談 摂津豊

島郡池田村ふあり、愛宕山ハ古へのふ所謂五月山ありとぞ、山上ふ愛宕権現の社あり、毎年七月廿四日の夜種々の灯籠ふ火を点して愛宕火と名く、大坂北の町ゑらより望ゑ見れば星の如し、又愛宕の神社有馬郡道場河原新町口ふあり、祭る所火産霊尊毎年七月廿四日祭礼あれば、世俗ゑと愛宕火と称も、

扇置

太平新録詩

人皆熱あきて

秋扇

朝茶の湯

貞享式 風炉を夏ゑまで炉ぐちきと冬ゑまで木地の炉縁と春とふぜれば、朝茶の湯ハ朝顔の例と假て秋の用ともいべきや、茶人の家ふまぬし、〇朝茶の湯ハ日中の暑とでふ故とを

青薬

との部弟切草あさがやの条ゑるべし、

牽牛花

和訓栞 朝顔の条ゑ、朝ごふ花さくと

して名く、**あらくさ**　蘭をいふ、くさぶの部

藤袴の条ふ注を、**ありのひこぐさ**

桔梗をいふ、ときの部**蘞蔓**ひの部**蘞蔓**の条ふ注を、**栗穂草**　和漢

三才画会　種類元て数十青赤黄白黒の色あり早中晩あり早粟糸実晩粟ハ皮厚く米少し○稃狼尾草栗奴各頭字の部**秋津虫**　とんぼうのこと、秋のこの部ふべし、

注釈ふ及ぶまで中をも秋の蟬ハなきふよろぼふ

蝶、秋の蚊、秋の蛍、秋の蠅、秋の蟬

秋のてふハおとろくるさふよろぼふ

朝月夜、朝の月　黒双紙　朝の月八十七日より二十八日までぞあふ、**暁月夜**　源氏初音巻　影をきよまりきたるつきづくよ、**有明**　八雲御抄　十五日以後の由匡房往生傳了あり云々　青藍云空ふ有て

秋月　清光と賞ぞそこころをふそそて句作をべし、

兼三秋物

〇ふる人の昼寝の　上ゆくと下ゆく雲

種や秋の月　貞徳　**秋天**　や秋の天　凡兆　**秋風**　物理

論秋気動　**秋野**　其風清ン　続虚栗　秋の野やこ

ふる小鳥ゆく鳥虚谷、　**秋水**　荘子秋水時ふ

至て百川、河ふ灌ぐ涇流之大両ふ渚涯の間牛馬

を辨を　**秋聲**　炭俵　熊ヶ谷の堤きれふる秋の水　惟永

欧陽永叔ふ秋声の賦あり、暑之　続猿蓑　**秋の七草**　万葉

松の葉や細さふも仰て秋の声　凡国

秋野尓咲有花乎指折可夜数者七種花　芽

之花乎花葛花瞿麦之花姫部志又藤袴朝貝

之花〇是を秋の七種と称を撫子の一種ハ連能二種出

てハ夏とも、然まても此かのくく久しく盛ふて冬迄

も有ものあふ霜をど結ハ冬ものふ　源氏蓼の巻

草枯の籬ふふるものこをこそ〇秋のくさふぞふ

〇霜の後撫子咲る　**秋の山**　田機活法秋色詩

たゞ一もの郭　秋山如画更分明、　**秋**

夜　物哀ふる余情ふ作るべし〇秋の

夜を打ぐるぐるもう　芭蕉　**ありのすみ**

相摸集 さうまぎてそちる梨とをきるきこ人のなふやるとそ おきうそしつゆぐうりある刺ホあれご十代あるのくこ人ハりふまり○梨らつこと忌てありのことつまるぐし、

八月 安濃津祭 日

社說曰伊勢國安濃郡津城の南ふ八幡宮鎮座、往古の一神殿中ふ寄坐を相傳ハ建武中足利高氏卿一国毎ふ八幡一社と置んと欲し伊勢と以て始とまを、乃チ宮殿を千歳山の上ふ造ル、石清水の神と勸請し源家の興隆と祈る旧記ふつふ永正年中當国兵乱ふよりて神殿荒廢ま僧願海募つて国中と化ゝて再興ま時ふ享禄二年く又數十年の後頽廢ゝて僅ふ存ま實永壬申年城主田獵ゝてそふ至つて、小祠と林樹の間ふ見る、左右何れの神ありともる者ふ、村老をめゝてこと問ふ言らく足利将軍の建る所ありり、即心願と発ゝて土木をあつめ、正殿拝殿神庫楽表と造る寛永十二年初めて祭儀を行ふる同廿一年垂水藤浮の二村三百石の地とつけて昌泉院と以て別當ま、今寒松院と号いあゝハ山上よありて千歳山八幡宮と称せり、今の地ふ迁しゝより、安濃津の城を守と以て安濃津八幡宮ゝ号ふ乃チ一志郡垂水村ふ属ま、盖津の城の街坊、八奄藝安濃一志の三郡ふ跨ゝ、とのひ石宮ま秋の宮ゝ、

綾巻

きの条ふ出、

藍の花

葉夢ふ似て七八月洛紅花とあし、ひらく、

蘆の花

說文曰其花風ふ遇て吹揚れ雪のごし、地ふ聚ま、ハ絮ゝ、

茜

ある

堀

時珍曰此草東方ふ在ゝ少し、西方の多ふもつゝ、則西草と以て茜とゝ、十二月苗と生ゝ、蔓変ること數尺方莖ありて中空し筋あり、外ふ鉤き刺あり、數寸一節、節毎ふ五葉、面青し背緑り、七八月花とひらき実と結ふ和漢三才圖会 茜ハ赤根ゝ以絳ゝし、近世藥方木と以て茜う代ふ、

通草

蔦頌曰通草の実長さ三四寸枝黒く瓤白しこゝと食へバ甘美、南人謂て燕覆子ともゝ或ハ烏薇子と名く七月と過てこと来ふ○時珍曰通草ハ莖ふ細き孔あり、両頭ふ皆通ゞ故ふ名く、

栗引

取收と引と云、

溢蚊

滑稽雑談 八月の溢ニ蚊肉と割と云 世諺ふり、近来秋ふ許用を、

鵐子鳥

和漢三才圖会倭名阿止里此鳥常

温酒 御光明寺殿下御抄 九月九日ハ寒温のさうひ身肉ひるる時こ此温酒を飲めぐこ病と得ぎるそこそふより酒と温め用ふるよし、世諺明答ありと引めり、

栗田口祭 十五日 増山の井 白川橋の東

八大天王の祭し祇園牛頭天王娑竭羅龍王の女頗梨女どめるうそうこあつる八王子ありこれ「昏ふいつる八将神」、あやさまつり 十七日 摂州豊嶋郡池田村民家の北ある山上

穴織祭 摂陽羣談 穴織呉服の両社ふあり、

其間僅十町ばかり、日本紀 應神 天皇十四年春二月、百濟王縫衣の二女と貢ぐ、真毛津といふ、同三十七年春二月戊午朝阿知の使主都加の使主と呼ぶ、同四十一年春二月求めしむ、阿知の使主ホ高麗国ホ至りて更ホ道路と求めしむ、阿知の使主ホ高麗王乃ち久礼波久礼志二人を副へて遣す者ともふりて呉ホ通ずること得ぎりて呉の王工女兄媛弟媛呉織穴織と與ふ、同四十一年春二月午朝阿知の使主ホ呉より筑紫ホ至るの時、胸形大神工女とこふ故ホ兄媛と以て胸形大明神ホ奉る今筑紫ホ坐る御使君の祖こ既りてその二女を率て摂津国ホ至

ホ山林ホ棲ぎ時ホ群飛そこ寺院の叢林ホ出る事十ば、百千群と成そ天と蔽ふ状ち雀ホ似て大く觜太し頭頸灰蒼あそ柳色の斑あり、頷黄赤ぁそ觜白し、脊蒼赤と帯ふ黒ぎこ斑あり、日本紀 天武天皇七年鴿子鳥天と蔽ひて西南より東北ホ飛べ、江鮭 鱒鰬 草魚 鯇 鱠 和名阿米 ひくう

三尺ホ満ざるものあり、優鰬魚のごし、江鮭こハ則江湖の鮭こ河鰬魚より小ぎ者尺ホ満ざるものあり、優鰬魚のごし、秋八月雨水河ホより、湖中ホ流れ入るこきこと多く川うホ上る、繁と構へ或ハ大なる攬網こ以これこ取る、新走 新酒の尤早きこ云、秋の暮 湖東問答 去来著 問云春の暮ハ暮春ものこ新きこ云、秋の暮ハ暮秋こ心得さる作者多しこいふ、尤秋の暮ハ秋の夕間暮ありふ春の暮ハ暮春の事ホ侍るあれ共云春の暮ハ暮春こ心こ又一片ホ限るべからず一句の趣ぁるこきハ秋の暮こもよるべし、〇秋の夕暮 とらふべきこと文字の数もすくなき句あれバ畧して秋の暮こもとらふ、迫ろ下九文字ホ秋の夕こいふる句まであり、秋ちゆうべといふねバそこそこ見沢作者心得ハ、

る武庫小来て天皇に崩ぜ[御]ゆくふ及ぜて大鷦鷯の尊[仁徳]
ふ献る、この二人ホの後今呉の衣縫[呉]蚊屋の衣縫[呉]ふ、○
仁徳天皇七十六年戊子九月十七日小縫[呉]媛二人ども去のひ
てつかへまつること祝へ祭つて、縫[呉]寮の神とまをし、毎年九月十七日
十八日に穴織呉織両社の祭礼[祭]く、和衣荒布の神供と備
てまつること神衣祭と称をこ社家の説ふ、応神天皇春二月、
縫[呉]媛を呉ふ、秋の花[秋]ことに菊のてふくとふるき物ふあり、
求むといふ、不審、この体ふよるべきの
ふ藻塩草[異名]、菊の異名といふ、[異名分類]藻塩草ふ[引]こちふ
草ふいふ、秋[秋]くさの花
を海ぶるこさをもて枯るまでそ、野ふ残つそう秋[秋]くの花、
是古き物ふあり、或説ふ菊を秋[秋]くとよむとこ、今按
おるふ埃嚢抄[二云聖一国師重陽の佛事の時、白き草
の花と北の籬ふ植てノこトくくと南の山と見るとよめるを
しらでそそう是ハ古文前集ふ陶淵明ら採[引]菊東籬下
悠然見南山[引]とふ詩ふて、東と北[北]く抹と植[植]とセ[誤]傳
寫の誤あるべト、埃嚢抄ふよるふ藻塩草[引]
の秋[秋]くの花も誤つふく秋草の花の、赤小豆[引]

大抵土用の中種とあ[秋]
蒋[引]九月これと収む、芦[芦]の穂絮[穂]
ふ綿絮を以し損ふハ芦花の絮と収をこ父こをを出さんと
す、損ふ日毎在せバ一子單[単]あり、毎去らバ三子寒しと遂ふ
止[止]む、烏桕[桕]
[本草別録]烏桕[桕]
て毒あり[毒]
[多識論]烏桕今按阿末保志[秋]
の葉[葉]
[御今]もともあり、秋[秋]の霜[霜]
[御今]秋しさむき朝寒[寒]き、朝寒[寒]
朝氣さむ[寒]くぶれも冬こ、[藻塩草]網代打[網代]
九日の前ふ打初て宇治の[網代]ふ、然まこの九月
細代人供御ふ奉るあや、秋過て、秋[秋]
ぞ隔る、秋[秋]ふ後[後]る[秋]く、秋[秋]より後[後]、秋[秋]の別[別]、
秋[秋]の名残[名残]、秋[秋]の限[限]り、秋[秋]と惜[惜]、秋深[秋深]き、
秋[秋]の湊[湊]
注ふ不及、

さ

七月[七月]
さくかぶ姫[棚機の異名七]

味ありて五味具る故ふ名く、春苗と生し赤き苔更ゟ高水ふ
引く、其長さ六七尺、巣尖ㇾ円く杏の巣ふ似ㇾり、三四月
黄白花と開く、蓮花の状ふ類ㇾ七月實ある、莖の端ふ
叢生ㇾ、蔬豆許の大さのこゝ〳〵生ハ青く熟ㇾ赤ハ紅紫
ㇾ〳〵同名異物ㇾ、

さゝ萩　葉の細うあるゝ萩とらふ、

五味子　本草　五味子皮肉甘く酸く核辛く苦く、都て鹹き

姫の丹ㇾ内〳〵がふとハ蜘のㇾ〳〵　異名分類　開元遺事ふ、蜘蛛
とㇾ以ㇾ巧ㇾ小き金盒の中ふ納め時ふ至て開きㇾ蜘蛛の
糸の稀密あるゝ視以て巧の多少ㇾ得ㇾ、三長明四
季物詩ふ、姫蜘蛛ㇾ云ㇾ〳〵ゆうあるゝもの其ㇾ巧ㇾ名ㇾ或ハ
ねうびの糸ふいを引ゆるゝ風ㇾ随て私のねがひうちよ　索
てゝともるゝとあるゝべしㇾ云ㇾ〳〵これらふよれるゆゑし、

索餅　先代旧事記　七月七日織女ㇾまるゝ又牽牛神あり、
その祭供ふい索麪ㇾ以ㇾ息災ㇾ延ㇾ〳〵ㇾ麪ㇾ以ㇾ糸織の象ふ表ㇾ
挙麪ㇾ以ㇾこれ鋤耕の象ふ表ㇾ並ふ
子七月七日ふ死ㇾ其ㇾ霊ㇾ祠ㇾ祭ㇾ其
存まる日麦餅ㇾ好めり、故ふその死ㇾ日ふ至ㇾて索餅
ㇾ以ㇾこゝㇾ祭る、後人ㇾ的索餅ㇾ
ㇾ以ㇾ痩疾ㇾ悪ㇾ、

刺鯖　大和本草　莖大ㇾて
葉もゞく、巻丹の葉ㇾ
の条ふ出ツ、

澤桔梗　葉小ㇾて淡碧色桔梗ㇾ似て小ㇾ
水辺ふ生ㇾ秋花ㇾひらく根まゝ桔梗のごし、又浮薔の
花をも沢桔梗ㇾさねうづら

五味子　本草　五味子皮肉甘く酸く核辛く苦く、都て鹹き
味ありて五味具る故ふ名く、春苗と生し赤き苔更ゟ高水ふ
引く、其長さ六七尺、巣尖ㇾ円く杏の巣ふ似ㇾり、三四月
黄白花と開く、蓮花の状ふ類ㇾ七月實ある、莖の端ふ
叢生ㇾ、蔬豆許の大さのこゝ〳〵生ハ青く熟ㇾ赤ハ紅紫
ㇾ〳〵同名異物ㇾ、

さゝ萩　葉の細うあるゝ萩とらふ、　**兼三秋物哉生明**

二日三日の月ㇾ哉ハ始ㇾ前の月大ㇾきㇾ時ハ二日ふ明ㇾ生ㇾ三日ふ明ㇾ生ㇾ、**哉**

生魄　十六日の月ㇾ云ㇾ、尚書　望後月明死ㇾて
魄ㇾ生ㇾ、月の照ㇾ所ㇾ魄ㇾ云ㇾ、　**佐々**

良衣壮士　月の別名ㇾ　萬葉　山乃葉乃佐々良衣
壮士天原門渡光見良久之好藻、

盃の光、盃の影　御介　盃の光ㇾ月ふよそへ
さやけきㇾ秋ㇾ云ㇾ、面の月ㇾ云ㇾ、

君遷子　ふの部蒲萄ふ
の条下ふ出ツ、

狭牡鹿　和名抄　牡鹿　和名佐乎之加
顕宗天皇紀ふ牡鹿此ふ云左嗚子加　和訓の　略

狹雄鹿ぉそ狹ハ狹山狹野ぇぞ
葉ふ小牡鹿と書るハちひさきさ鹿といふぉぉぁ
てつゝ猴菓と取て山中樹木の蘆或ハ嵓腹の
ちり、猿酒　四ぁる丙ふ貯へ置き、數日の後熟〳〵
酒の如く味甚甘美〳〵これと猿酒
といふ獵者往々見て竊ニ食を、

八月　堺天神祭

三日　泉州府志　泉州堺ぁ常樂寺、天神の像ハ菅神
太宰府ぉ在せ一日自ら作ふまつりぇ七軀の像の内
也とつたふ長徳二年或ハ延　喜年中　正月海濱ふ漂ひ来るより此所ふ安置ぇ、或ハつふ昔塩穴の郷湊村ぉあり、故ふ
塩穴天神と称ぇ、中世北の荘ぉるゝと勧請ぇゝ明二年
菅原為長郷の記云、和泉国毛須深井、草部、土師、向井、
塩穴、高石ハ菅家の氏神天の穂日命ぅて後
為長卿の真跡五条殿ふあり　今按るふ塩穴天神ハ天穂日の命以来の旧領ぁり、
ふ菅丞相と合せ祭るゝ〇例祭六月十三日と夏神楽ぇ、
八月三日と秋神楽ぇをこの日恭請多し、神輿、塚七道濱ぉ
なゝく東島へ渡御即日還幸ぇ、先板の諸　三五の夜
抄四日ともるまで、今ハ三日ぁりとぃゝ、

つの部月月
の条ふ出ゾ、

西院祭　廿八日

春日の神社ハ洛西葛野郡ふあり、四条通西の上
手四町計り云々西院村の西平林村の中ふあり　名跡志
按るふ西院の号ハ中頃此所の西ふ齋院居ぁゝてぇ故
ふ此辺の名ぇて齋院と書ーをぇ後誤ぁて西院ぉ作
る歟、〇例祭八月廿八日神輿二基あり、其一ゝ住吉
神輿ぇ拠古の社ハ同　紀事　の西ぉり
西院八幡祭とふ未詳

柘榴

事類合璧　榴大くーて盃の如
點あり皮中蜂の巣の如し黄膜
人の歯の如ゝ淡紅色亦潔白みて雪の如き者あり潘
岳賦云榴ハ天下の奇樹九州の名果ぇ方向膜千子二
の如ゝ飢ぇ渇ぇ療し醒ぇ解し酔ぇ　北史李祖
收傳　元魏安徳王延宗李祖收と納ぇ帝の前ぁ甚ふ意と
宅ふ幸も妃ぅ母二の石榴を帝ぇ以てぇ
知ぇまつゝ祖收ぅ云子孫多うんてぇ
神ぇ祭る人これぉ備ふるふ榴ぇ以てぇ
王の象ぇぇぅ花の形ハ夏のさの部ぇぇ

の花 本草 三七春苗と生じ夏高さ二四尺葉蔓艾ふ似て薄く厚く岐少大あり莖ふ赤き淺き溝ありて夏秋黄花をひらく蕊金糸の盤紐のごとし愛玩すべし氣香ばしく花乾くと雖ども絮となりて苦澁禁のごとし

烏鳳 和漢三才圖會 今云三光鳥近年ここまれに紺碧色背の上ふ赤と帶腹白く羽黒くして微赤く項の毛乱起て頂上ふ冠あり眼大ふして臉青く其尾長き者一尺半計ありそのく翔轉ずる其生声清越且圓にして人の呼ぶが如し今三光鳥と称ずるは其雄ふして尾短く倶ふ性男悍雛と育る時かしら鳥鴉の来ると羽を振ひ怒ると拒むに或ハ其眼を啄く其巣辨のごとし止泄両端ふ口あり表裏人裏ふ出尾の長きこと数寸

鮎 をの部落 點の条ふ出

九月

坐摩祭 廿三日 坐摩の傳記ハ夏のさの部坐摩の御抜の条ふ注しぬれバ爰ふハ畧之例祭九月廿二日ことを相嘗八十島祭と号して新嘗の神事まるふ、逆髪祭 廿四日 社説三云江州滋賀郡琵琶湖の南、逢坂山関の清水大明神ハ延喜中四の皇子蟬丸の社〳〵蟬丸双眼盲ふして逢坂山ふ捨置給ふ故ふ勅して逢喜世三年壬午春三月公卿大夫蟬丸と供奉して逢坂山ふ左遷し奉て各涙雨を滴て帰京を残て留る人白川の紀則長基經古屋の美女師輔〵云々爰ふ於て姉の宮深く蟬丸をふこひ密ふ禁闕と出て相坂山ふまで蟬丸と共ふ花月と清賞し旅駅の山岩川陸を偏歴して髪縁髪顛倒を國人御名を逆髪と号く天慶九年廿四日逝去〳〵故ふ毎年九月廿四日の祭祀今ふ至て怠ることなし一社ふ合せ祭ると云青盖云蟬丸と延喜才四の皇子及び吉内人となるハ古女説あるとも後撰集のゆくもかへるもこゝあふ関ありとそと有ぞ多くと諸書ふ論ありさるにしなるべし水戸學士の一説ふ曰の南朝元帝の諱と延基となり延基の三男禰宜の時より姪ふて其上皆ふ蟬丸と相関とふよ所ふ捨ふ此子の名と蟬兒とふいはんとまんバ幼年より琵琶とよく彈ぜり故ふのく付〳〵今此事より日本の蟬丸の妻と考ふるふ延喜と延基とキの音同じ蟬と蟬と字の形相似う又相関と相坂の関も相似う又延

喜の御子と捨ると彼是同意ン彈児の事ハ古史考巻の三十一ふるそうと云俳諧歳時記接ぎゝふ逆上ハ坂上の誤あるべし寺門の説ニ云江州相坂山関の明神二所一所ハ坂上ふあり一所ハ坂下ふあり云々元坂上の社をいふと誤ると種々の説と設けるあり又云二所とのふ道祖神と祭りて関所の鎮守ともふ朱雀院の御宇蟬丸の霊を當社ふ合せ祭る依て土俗蟬丸の社と称を下の社の前ふ井あり関の清水と名く清水明神と号祭礼九月廿四日上下の社同日ン神輿二基ニ云この説穏あり皂角時珍曰皂莢樹皂く故ふ名とそ、廣志ふこゝと鷄栖子とふ樹の高さ大ン巣擺の葉の如く痩長して尖ン枝の間ふ刺多し夏細き黄花と開く実と結ぶ三種あり一種ふ小ありて猪の牙のごとし一種ハ長くして痩薄く拮燥て粘ど其棘刺多くして上ふかゝる櫻紅葉櫻のもちゝふあるし珊瑚仙蓼珊瑚仙蓼ニ名同物園史巣山茶の如く小ン夏白花と開く秋紅の実を結ぶ珊瑚の如く纍々ふ大和本草珊瑚葉ハ

橘の如く及ン莽艸の如く刻ミ欸あり茎長く節あり葉と日と長る陰地ふ宜く本草綱目雑草の部百両金ふぐハ此と同物ゝ和漢三才畜会仙霊草十二字云々

七月

栃栗

江東小き栗を呼て栃栗云々

北野御手水

六日　山城國葛野郡北野天満宮ふ伝ふこの處をゞめ朝日寺の地ン帝闕より北ふあるを以て北野と名く紀事七月六日北野松梅院御手洗と神前ふ供をゝ松凡の磯ふ穀の葉と添てそゝ供をゝ松梅院の一幼童或ハ故障ありときハこの義あり云々

北野禁制

雍州府志毎年七月七日北野社内外の陣ふある所の神宝ン西の間及ン幣殿会所ふ出しそゝ曝をそこの間ふ宮仕内外の陣の禁ン掃ふン乞巧奠名目抄今の俗キツカウテント云ハ不足言云々

乞巧奠

乞巧奠と八人々甚業ふ巧ンあらんことを願ふ意あり、

針、乞巧瓜

開元遺事七夕ふ蜘蛛を以て金盒の中ふ納暁ふ開て蛛絲の稀密を視巧の多少ン得りとそ、荊楚歳時記七

夕ふ婦人七孔ふ針と穿ちふ或ハ金銀鏹石と針こと、瓜菓を庭中ふ陳ね、巧こをにくらふ蟷子ありて瓜の上ふ網ふる時ハ巧と得ふ

九枝燈　漢武内傳　七月七日帝宮掖の内こうとをと掃除し雲錦の帷こ張九華の燈と燃をこ西王母降　公事根源

禁裏御燈籠

燈墓九本おのく灯あり云云

滑稽雑談　當世ふおいて禁裏へ御家門方より燈籠と献ぜらる、奇巧金銀を鏤ら、花鳥人形ホの美こ尽せり是を南殿ふ並ぶるころより始てるあや事ぬべし十四日ふハ禁門を啟して賤の男女こ延上ふ入て是こ拝せしむ

切子燈籠

和漢三才圖會　一種岐里古燈篭、聖武祭ホふこれこ用ふ飾る所紙繒甚華美こ、

逆の峯入

紀支　七月の初大峯より京師ふ出て大ある法螺こ吹き自ら金剛杖こ拳ゝこ遍歴して奉料ここふ或ハ前鬼木鉢或奈良碗黄ホの物こ旦那の家ふ贈る凡峯入の法、本山派熊野より大峯へ入是こ順の峯入こく當山派大峯より熊野ふ出是こ逆の峯入こいふ○春の部順の峯入の条ふよりくしく

○貞享弐　峯入の類も順逆とりひて春こ秋こ断ねる今の俳諧の省法ふよらバ秋こく春季こつもてハ春こふりて名くる稽らぬべし、

清水千日詣　十日　七月九日より十日ふ至つて京師清水觀音ふ諸人恭詣を夜ふ入て恭詣殊ふ多し今日の恭詣平日の千度ふあたるとぞ江戸浅草の觀音こ同日ありて恭詣多し、

經木流　十六日　摂州四天王寺ふ俗四万六千日こハ、東僧坊の前ふ亀井の水こ、白石玉手の水こ号そ、むかし白川法皇のこ東門院當寺ふ詣し時其水盤ふ亀の形あるこ見て白石玉手の水こ以て亀井の水こ詠まこれ甚早の起るところあり、新古今　濁こそあきこ亀井の水こ心のちりともくぎつるわれこ○七月十六日世俗經書堂ふおゐて經木の表ふ法名こ記し此水こ手向て靈魂こ吊ふこと摂陽群談ふもこそうり昔ハ八月毎ふ六斎の日講堂ふおいて經こ誦し恭詣の戒名こ名帳ふ記し回向せしふ今和

泉式部泰詣のとき、名を名薄ふもとすゝきと詠ぞる哥梓弓
そうつる〳〵といかもそねどうるひてあきと身の數ふいりぬる今の
經木ハこの名薄の遺意ゝ、**桔梗** 時珍曰桔ハ結ニ其草の根結實
桔梗和名阿里乃比布木 和漢三才圖会 山野及ひ人家ふ多くこれと
種ル 碧の者と桔梗の正色ととて、又白花あり紫白相
交る者あり、單葉あり八重あり、古今 物名 秋ちゝう野
ハおのふるりもうつ色のおけるくさ葉もいろ〳〵支則
大和本草 本草四十一巻 驪馬の附錄ふのせ一名
蜱又蓽とのふ立秋の後夜鳴ハイナごふ似く
り、角あり、頭ハ切ル如く紫ふ俗ふつぐ
ハ西土の方言名ロッ〳〵とのふ古哥ふきりぐ〳〵とや
こゑ秋の末まで有故ふ古哥ふ霜夜ふよめり、〇
きりぐ〳〵ハ蟋蟀ニ 家持集 きりぐ〳〵とうさせ
うむ〳〵すげの庭鳥ホの異名あり、頭字の部ふおちて淺、
とい鳴ふもゝどむらきぬゝくる我いきくいもぞ〇葦つ虫、ち

兼三秋物 銀鬼 月をとのふ、階陽帝云、 清露冷侵銀鬼影
既望 なの

さよひの条 **既生魄** 既ハ皀と生ずる十七日の月
ふ併世註ハ、月の照ル所ニ皀とのふ、 **暉**
そ 文選註 **素** 月光ニ、 **金波** 前漢書 月光ニ、 **霧** 尓雅疏註 天気
と雪才とのふ地気天ふ発ニて應せざるニ霧とのふ 和漢三才
圖会 雪才霧の二種皆露の変ずる者、秋月盛んなれバ其降
や朝と夕とふおり、甚ご多きと紀ハ菜蔬草木凋ニ枯る、
と霜雪より烈し 藻塩草 霧ハ春夏も詠ごし秋ふ
限るべからずとハいごとも連俳ふ霧とおりハ秋ニハ雲御抄
の如く春山の霧ふまどふる、又百父霧とも万葉ふあり
と云ゝ俳諧とても春夏の季ふ結ぐ春夏ふわたる
べし、朝霧夕露別義あり、胸の霧ハむの部ふ注、 **霧**
の笆 霧の立ごてる
とほうきとのふ、 **霧の海** 野原ふ下ごとる霧
ごくゝもの **霧の香** 御伽 霧ふ白ひのあるものニ譬
るとのふ、 き物ニおり物ふも嫌ふ霧の香
こゝひて別ふき物あるふいあらそ、霧不斷
の香をゑきと詩ふを作るハ只秋霧のごと、 **霧立**

泉式部泰詣のとき、名を名簿ふもとゝして詠をる哥と梓弓
まつるへくといふなもそねどころ〳〵てあき身の數ふいりぬる今の
經木ハこの名
簿の遺意也、**桔梗** 時珍曰桔ハ結ゝ其草の根結實
桔梗 和名阿里乃比布木 和漢三才圖会 山野及ひ人家ふ多くこれと
種、九月ふ碧の者と桔梗の正色とて又白花あり紫白相
交る者あり單葉あり八重あり、古今 物名 秋ちう野
ハおりふりもろ〳〵のおけるくさ葉もろ〳〵そゆく支則
大和本草 本草四十一巻寵馬の附録ふのせ一名
蟋蟀 蟋蟀又蛬とつゝ立秋の後夜鳴ハイナゴふ似く
翅ありて角あり、頭ハ切るる如く尖りあり俗ふつゞれ
まくとつゝ西土の方言ふクロツゞとつゝ古哥ふきりぐ〳〵そや
めるハ是ゝ秋の末までふ故ふ古哥ふ霜夜よめり、〇
今俗つゝきりぐ〳〵ハ蛬雖ゝ家持集 きりぐ〳〵そつゝりさせ
ゝ鳴ふをどむらきねもころる我きくいまだ〇葦つ虫ちゞ
うむ〳〵すげの庭鳥ホの異名あり頭字の部ふおちて淺、

兼三秋物 **銀鬼** ぎんき 月とつゝ清露冷侵銀鬼影 既望 きぼう

九十五

さよひの条
ふ併世詮次、**既生魄** 既ハ魄と生ぢる十七日の月
そ、月の照ざる所ど魄とつゝ、**暉**
素 文選註 月光ゝ、**金波** 同 月
漢書 下り地ふ應せざる
と雪才とつゝ地気天ふ発して應せるとを霧とつゝ和漢三才
会 雪才霧の二種皆露の変ずる者、秋月盛んにして其降
や朝と夕とふあり、甚ど多きと紀ハ菜蔬草木凋ゝ枯る、
と霜雪より烈し 涼塩草 霧ハ春夏も詠ぢどし秋ふ
限るべらぢとつゝどゝ連俳ふ霧とむりハ秋ゝ八雲御抄
の如く春山の霧ふまどつる曙、又百久霧とも万葉ふあり
と云ゝ俳諧とても春夏の季ふ結ぐ春夏ふわてる
べしゝ朝霧夕霧別義あり、**霧の籬** 霧の立てゝてうる
とほうきとつゝふ、**霧の海** 野原ふ下とる霧
ぢくゝもの溜りとうそ海の
るとつゝふ、**霧の香** 御伽 霧ふ白ゝのあるもの心
こつひて別ふさき物あるふいあらをそ、霧の香
の香ととゝきと詩ふを作るハ只秋霧のそこ、**霧立**

人てる人をのふ、霧雨　霧の深き所ハ雨の降やうにこれをゝ、木淡　樹こ小熟して美き　枝を木淡とゝふ、伽羅枝　一名透徹抹形長く四く微小大り肉中沈香の理の如くありて　微し美し、錦馬　鹿の異名あり、八月　北野祭　四日

〔雲御抄〕云こと

〔二十二社註式〕一条院永延元年八月五日祭礼をはじめて官幣あり、後冷泉帝永承元年八月四日ゟ定らる、五日ハ母后の国忌ふるてこゝ、〔拾芥抄〕北野祭ハ四日ゟ定らる、五日ハ例大臣ゟ始て納言参議ゟ至つて大頭と称をゝ催す、申

あり、料米六十石、祭神三座中ハ天満天神東ハ中将殿、管品吉祥女、管家の北の方、部の西南吉祥院ゟ住めり、名多し、路易水記」日、此祭甚ざ美麗ありて神輿ハ下立賣の西御旅所ゟ移し奉る、其間廿余町の地ゟ蜀錦と敷き、供奉の輩綾羅の袂とつらね、管絃の声雲井ゟひゞくるよう、富社の古記ふあり、

礎　四手打　綾巻　宇林直衣打　もろ打　ゟ着と掛

といふ、古人衣と掛ふ両女相対して一杆と執て米と舂ぐ如し、然るふ今易るふ臼杵を作る、対座してこと〳〵と掛つ、其便と取る、〔和名抄〕唐韻云礎和名岐沼伊太　掛衣石ゝ守赤掛衣作袖杵　和名岐沼〇綾巻衣と巻末ゝとの緒と巻て打ゝ、〔雲御抄〕ゟきりゟ打ゝ衣もて打ともよめり、銀杏　〇ぎんきやう打ぎんきやうハ槌の名ゝ、槌もて打ゟ、時珍曰銀杏其葉鴨の掌ゟ似くう、因て鴨脚と名づく、実の初始て貢ぜ、改て銀杏と呼其形小杏ゟ似て核の色白きゟ因て今白果と名く、木の子取　たの部首府　和弓　ゟとりゝ、の条ゟ出ツ、

啄木鳥　名てらつゝき　時珍曰此鳥樹を劉刻食ふ故ゟ名く禽経三ゟ取食ふ故ゟ名く守屋ゟ怨霊鳥とゝもりしとの伝ふ、

雀の如く大なる者鴉の如し、面桃花の如く啄足皆青色爪剛く觜利く錐のごとし、長き数寸舌味あり長し、其端ゟ針刺ありて蟲を啄とり得るときハ舌を収こ釣出しこれを食ふ〇昔王造ゟ天王寺を建し時此鳥群来て寺の軒と啄き損ぜ故ゟ寺啄と名く、

菊蟲鳥　和漢三才図会状眼白鳥ゟ似て背翅青緑色頂の上ゟ黄毳花の如き者と戴く故ゟ名く、九月菊

花の宴

九日　青藍云、俳諧歳時記ふ周の穆王三蒼昌山にて、法花の秘文を数尊より受て慈童に傳へ、慈童八百歳をへもちゐ、魏の文帝の時名を彭祖と更て文帝ふ此術を授け奉る。文帝この術を受て壽七十歳今の重陽の宴を此説を談の基とし、後〳〵列仙傳ふ彭祖八帝顓頊の玄孫姓ハ錢名ハ鏗周ふ至つて八百歳をへて衰老せず、穆王召〳〵て大夫となす。病と称して與らず、後遂ふ流沙の西ふ往」彭祖の傳かくの如し。慈童より事と以て附舎をもるも凡ハ元野史小説の詞語より出ず。菊花の宴ハ秦漢以来より或ふあり会論ひくり實ふ妄談附會の甚〳〵しきふあらず。本朝文酔ふ視賜群臣菊花詩序云紀納言揖故妻於漢武則赤黄神宮人之衣尋舊跡於魏文亦黄花助彭祖云々又世諺問答ふも魏文の説と引合せるハ古くより云つたへるも妄談をもつて〳〵九風雅の道ハ事の虚實かくいふもの其趣のもつ〳〵きふ隨ひをきもくるふんをようもとより附會の説とハいひながらふ捨がたき菊綿　公事根源　御前

小菊瓶ニおく　云云　全文ちの部重陽の宴の条ふうへたり、

菊花の酒　高ふ登る　続諸記　汝南の桓景費長房ふ随ひて遊學をること數年、長房謂曰九月九日汝ふ家中災あり急ふ去〳〵し、家人各絳袋を作つて茱萸を盛り以て臂ふ繫て高きふ登つて菊花の酒を飲〳〵ば此禍ひ除くべし景言の如くし舉家山ふ登る、還て見るに雞犬牛羊一時ふ暴死をこと聞て曰此ニよつて代るく今世の人九日高きふ登り茱萸の囊を帯、盞ふ酒を飲、婦人茱萸の囊と帯、盞ふ酒を飲ハ始る、

菊の節句　栗の節句　蕃酒を飲栗を親戚朋友互ふ贈る、故ふ菊の節句栗の節句と称、

菊花の着綿　御湯殿記　九日の夜ふ入て御殿の南階ふ小菊を多く植其菊ふ赤白黄の深ふこと丸め菊花ふ作つて枝々ふ付さし今日綿ふ取つゝ菊ふ接ぎふ菊ふこと着まことこらくふ菊の露をもつふ移しとり面をぬぐひをつゝて乾せぬ綿ふせ〳〵ぐ〳〵後撰集をもつふ伊勢ふ家の菊ふことを着ふつゝとりたゞ又の詞ふ

とうとうとうとうとして、伊勢數さうぶ
る病のつゐでなられん、かしし　藤原雅正、露ぐさ
の菊ぐさ〳〵花のなどやいくよまでるらん、
九日宴を兵部のおやのときてこと殿のうへのとりつきて
よう老のこひ捨のくてのさまもせつるこあるを、菊のつゆ
わくゆざうふ神まで、花のうへすふ千代かぬらん、〇此外
源氏、枕の草紙などもそえうり、今禁中もそうくしく菊
の綿をつくりてねのひのいわくのちのことなるの由し
ぐさ〳〵くの部九日小時珍曰薩佃埤雅云菊本
籬といふ和名抄菊和名加波良与毛木
云九月菊黄華あり、華事此ふ至て窮り盡く故ふこと
菊の花
神の条ふ注ス、菊花
鞠よ作ふ鞠窮まり、月令
波良於波木
和漢三才圖會本綱
よ菊九百種宿根より自生をし、其莖葉花の品を同らいず
千巣單葉心あるより心なきあり、黄白紅紫間色淺深大
小の別あり、其莖株蔓紫赤青緑の殘あり、其葉大小厚薄
尖禿の異あり、又百菊秋菊冬菊の分ありつ〇百夜草、星
見草、金草、こと草、千貨見草、齢草、山蒜草、少参草、弟
草、草の主、殘草、茅花、花の異名、百菊、猩々菊、醉粧菊、大
白、大槩若、谷翁草、隠君子、女花、鞠花、秋の花、秋〳〵の花、契
草、蘋我菊、承和の色、殘菊、野菊、ふるぎく、各頭字の部
ふりて注を、

鬪菊

古今著聞集 延喜十三年十月十三日
卸記云仰侍臣令新菊花入三番
立庭中一番種花以洛洲形二番
取立御前左衛門督藤原朝臣
候御前傳作勝負十番勝方簾中
拜舞選進菊中各四本栽西方庭
ふりて注を、

菊の淵

古今
宿の菊乃
ぐるぐるぐる、

相爭勝負以甲時各方領花參入
一番種花以洛洲形二番
三番省滝口
次第進花
百菊の内より善、
さらぬけふごろふ幾世
つもりて淵ともなるらん、

金目貫

みて万重ふ
秋
ある、

壮丹

大和本草 秋牡丹外
品農圃六書ふこれ
云今試ふ然ふ春分移し植九月中菊ふ先ふ開く
ふて後浅紅ふ中暑鞍馬貴布禰
紫菊ふ似ふ初め深紅ふて後
摂州箕面又西州諸山ふ自ふ
〇京都の俗ふこれ菊ふ
称ふ所説のごとし、

貴船祭

九日 神社啓蒙 山城國愛宕郡鞍
馬の北一里ばかりふあり、祭る所の神二座、高龗の神ふ水徳
の神ふて、別雷の神宮ふ二の摂社ふり 神代巻 伊弉諾尊

時珍曰金橘実と結ぶ秋冬り黄熟を、**枳殻** 小く高さ五七尺葉橙の如くして刺多し春白花を生ず 大和本草 枸橘今案もろ〳〵和名カラタチといふもの〳〵其木もり多き故お人家植て籬とし盗ふ備ふ、昔より國俗誤つて是を枳殻枳實とし〳〵薬ふ用ふ非多、

ゆ **七月** 祐天

寺千部 十五日より 明顕山祐天寺ハ江戸麹町ふり、廿五日まで 開山ハ祐天大僧正例年七月十五日より廿五日まで阿弥陀経千口修行この節参詣多し、**夕顔の實** 品類多し ○瓠、長きこと越瓜の如し、首尾一のごとし ○懸瓠瓢の一頭ふこ腹あり長き柄ある者、ふと柄ありてひさごと〳〵ごとし ○勺柄まくして四大、形ち扁き者、○壺瓠の短き柄有て大腹ある者、○蒲蘆壺の短き腰の者、○其形状各同じからざるも、苗葉皮子性味ハ一ならず、右本草時珍の説し、○乾瓢ハ瓠瓢を又塩とひ〳〵おりとうけおきて日ふほもは、

兼三秋物 夕月夜 晴曇

訶遇突智と斬て三段とせ、其一段ハ高雷龍とせ、二十二社註式 貴船の社ハ船玉命と高龍とふ、改暦雑事記 九月九日小児咳逆疫して死もるを多し仍て相若ごてトせ〳〵云貴船の神の出ふ以所〳〵ふ於て弘仁二年 百六代淺 奈良天皇 秋九月九日疫と追〳〵む、今貴船の神輿と称して洛中と振るふの是この遺意ふ〇今〳〵そふ以来毎年九月九日小児相集〳〵ふきて神輿と作て貴船祭と称して市中を振るこをと狭小輿らく〳〵ごと、**北山祭** 廿日 六所の社ハ洛北鹿苑寺の西南衣笠の岳の良平林の中ふあり、祭神詳ならず、例祭九月廿七日 名勝志の説ふ同〳〵北山天神祭九月廿六日、この拝殿ふ於て三番叟あり、正月廿七日六所明神ふ猿楽ありり、菅見記 九月廿七日等持院村祭、松尾末社 等持院 鹿苑寺ふ相隣る故ふをつ〳〵北山祭と称も、類聚國史 北山の神社ハ大北山村ふあり、天長五年八月天地震災わりとす、過北山ハ高嶋の西北四五町ふ丁西ふ北山の神ふ祈る、名勝志 北山ハ高嶋ふり、戊亥の〳〵北方ふからをと〳〵ごと、古より北山と称を疑らく〳〵村名ふる、〇毛吹草ふ北山祭廿五日と記諸説送ふ異〳〵 **金柑**

の大小ふたりて朔二日の夕より出現ある事 分明〳〵十日あまりの頃までも暮よ出るわざの月を夕月夜と讀ふらくゆふづくよ 釈名 弦八月半の名こ其形一菊曲しゆ 弓張月 こ一名八直くして弓の弦を張が如きちよ

て、夢野の鹿 摂津国凡土記云雄伴郡ふ夢野あり昔刀我野ふ壮鹿こ父老傳てふ昔刀我野ふ壮鹿いくその嫡と此野ふ居るその妾の北鹿淡路國野島ふ居る彼壮鹿麋野島よ往て妾と相愛て既〳〵壮鹿来て嫡の所ふ宿る明旦壮鹿吾背ふ雫ふりおけりと見き又夜夢何の祥ぞその嫡こ夫の妾の所ふ向往ぎを悪こ乃詐て相〳〵て云背の上ふ草生ふりときき此又雪ふるい白塩宍よ塗の祥、波淡路ふ渡らで必船入ふ射らられて海中ふ死ん謹て復往事ふるとその壮鹿感意ふ勝ぞ復野島ふ渡る海中行船ふあひて終ふ射殺る故よ此野と名づけて夢野とふ俗説ふ刀我野ふ立る真壮麋夢相のまゝふ云 河社 契仲大人云仁徳記ふ菟餓野の鹿の夢のことあるもこゝそもとより夢野とふふるいとそぞ、こゝふ

よりて夢野 ひの部菱取の条ともよむべし、 菱 ふ似て酢し柚の皮ふ苦く橙の皮ふ甘し、 柚味噌 柚一箇と二片とり、辨核と去熟湯ふ投て輕くもみ、取出し新に置て、柚味噌よ用ふる所の味噌と、其庁ふ盛り包こ綿巻の形ふるりよく蒸して用ふ、祇園の茶志関東何某始て制そをこゝそもみそ

七月

この卵、乙由 め

益母草

ぎと云荏ふ胡麻よ似て葉ふ麻のてし其葉両こ相対して一層ふ東西一層ふ南北こゝぐひふ十文字ふり、七月紅葉の小花こ開く又微白の物あり本草ふ花四五月と記こ土地の違ひあるべし、

八月

名月

つの部月見 めしろ

眼白鳥

和漢三才図会 頭背翅尾黄の条ふ出ぬ 昔こそ鶸明こ俗よいふ淡黄色是こ眼の睫ふ白圏あり、胸臆白く脇色こ帯ぶ腹白し、性よく群とるを、支と好て樊の中ふ在ふ亦一楽

ふ集り相依て互に推そ、其中一雙飛出群と接るさま、
餘ほと相推そ又中ほより抜去初のごとく、毎ふ栄と好む、

み 七月 鼠尾草

尾莖の端ふ夏四五穗と生ス、時珍曰鼠毛穗の形と以名ふ命ス○韓保昇曰鼠車前の如し、花赤白の種あり、園城寺又三井寺と

水懸草

増山の井説々
水影草ハおもく七夕ふるあり、水懸草ハ稲の事
ゟり又或説ふそそぎと聖霊ふ水むくる心ゟり、貞穗云

三井寺女詰

でらそんまで十五日 江州長等山崇福寺 又建福寺 地福院ゟ
大津の側よあり、園城寺又三井寺と
称ス、園城寺ハ御園ふ隣ると以て名ス、三井寺ハ西巖
お灵泉あり、天智、天武、持統、三帝即位の時、この井の水と掬
て浴湯ふ献ス、因て御井といひ後ふ改て三井ふ作る是三皇
の浴井龍華三會の義ゝ、この寺平日女人結界の山ゝ、七
月十五日女人の参詣を許し登山せしむ、これを 妙法寺
女詰とふ當山ハ智證大師四珍の開基ゝ、

火の御狭山祭

穗屋 芦日 信州諏訪郡諏訪明神の祭ゝ、今在記 上諏訪ハ建御方富命、下の諏訪ハ建御
入姫命○或説ふ御射山の祭ふハ、薄ゟて神殿と造る其外
人の家も祭の程ハ皆薄ゟて作る又ゝさゝとふるきのごとく、
日本紀ゟ二野槌の神ふハ五百筒野萱の八十玉籤と採りむ、
是ハ天照太神と天の岩戸ゟり出し奉ゝ世時のさゝ、とて
信濃諏訪ふ山祭ふハ薄と以幣帛とす故ふこゝゟさ川信濃
とふあり、○此祭ふ遠笠懸と射て進らもるゝ其始田村
将軍の安倍高麻呂と伐んとふふ、信濃國ふ至ゝ此神ふ
祈ゝ申されゝふ、梶の葉の紋付し直垂着ゝる人湖の波二
小馬と走らせて笠懸射ゟうしと今笠懸射て神事とす
ゐいとの所謂ありふうて翅波とも記ゝて諏訪ともよめりと
縁起ふ出當社ハ桓武の御宇、田村将軍の建立ゝこの事ゟり、
この神ゝまゝく田獵のとと主ゞ作る穗屋ゟりゝこの祭ハ貞徳説ふ八月ゝ藻塩草七月廿日
とまゝ、増山の井ふハ七月廿七日とまゝ此説多し未ゞ決
むりハ勅使と立らるゝ汗穗屋といふハ、勅使尊敬のゟあ
新ふ仮屋と設けるゝ、今もその余凡うて穗屋と造るを
ぞ、新式秘抄ふ云穗屋つくるハ諏訪祭のごとゝ、諏訪祭ハ

年ゟ七十五度あり、是その一ツ心みさ山祭ハ山城笠取の辺所
〻にて〻説あるゆゑ、名所方角抄哥枕秋の寐覚ゟよゐ信濃ゟ
も〇 猿蓑 雲ちゐ穂屋 芭蕉
のもゝきの苅のこ、芭蕉
と除く宗鑑謂、喜草木則蓑荷の花是く〇時珍曰雀豹
古今註云蓑荷、其子花根の中ゟ生ぢ花のさぐ敗れさる時
食ふべし冬ゝき
とゝさい消爛さ、 兼三秋物 身ゟ入 湛方生秋夜賦
氣入肌以霊凛
瀧林蕭索 甲子紀行 のぞらし 新月 朏魄
とこゝろゐ凡のこゐむ身ゐる芭蕉 三 纖月 文選
月賦ニ出 礼記の注 月三日ゐて 魄をゐもそ向云朏ハ
盛明あり、魄えぢのそ地と出て明生ス〇新月纖月、玉鉤
蛾眉磨鎌ゟ三日月をいふ、此外種々の譬喩詩々
ゟ多し、〇何事のこゝそゐも似ぞ三日の月 芭蕉 歌女
釈名 土龍地 龍子蓼蜊
梨 水梨形ち青梨 ゐ似く褐色、 蛬 蚓鳴
ホの諸名あり〇時珍曰東方虬蚓賦云、其鳴くて長吟、
故ゟ哥女と名く、孟夏もぢめそ出、仲冬蟄結そ雨々

ときゝ先ツ出晴るときそゝ夜鳴或ハつゝ結ぶときハ化して
百合とゐる、蟲ゐ蝕と穴とおゐ〳〵〳〵て雌雄こもる、
蓑虫 鬼の子 和漢三才圖会 諸木の嫩葉漸〻
巻こあり中ゟ小虫と生ぢ其虫結巣こ食
ひこう糸と吐き、用て窠と作る長さすだう、寒
燃こゐる艾柱の如く、毎ゟ枝ゟ纏る其虫も又黒色 嫩枝
ありて首ゟぐる時々ふ首と出して嫩葉ぢ食ふ其首を二
動もこ、貌蓑者ゐる公羽ゟ彷彿こり、 枕草紙 このむ
哀しおふのうみゐこバおやふ似てこゐもおろ〳〵きこゝち
そあらんこて、親ののきなあひきなせて今秋風のふんこう
ふぞこんぞるまてふゐらひてふけていふるもちろぢ虫の
音ゟくもりて、八月ぢうふぢさぢちく
いちぢうあらまし、 蓑虫説 素堂 それゟ
なこことなそれむちよ〳〵とゐくハ孝ゟ專ゐるゟ先ゑ
いうふつこて鬼のふあ〳〵清女ゟ蓑虫ハ
ふりとゐ聲悲と父こて舜あく波ハ虫の舜ふくしてゐ
季吟云蓑虫こぢりハ 三村或ハ水
雑く鳴心あれぢ秋こ、 八月 三村祭 村ゟ作ゟ泉

州堺の庄、塩穴の下条開口村ふあり、住吉旧記 祭の神伊特詔尊の御子、事勝国長狭之後ふ生玉牛頭天王と合せ祭ふ乃ち住吉の外宮ふて故ふ朝廷二十年ふ一度住吉の社造ふ替をあらためらるゝとき當社も此義あり、社地乙、開口村木戸村原村の間ふ俗三村大明神と称し大寺祭ふ、泉州府志 社説ふ云密乗山念住寺聖武帝の御願ふ依て行基菩薩開基をる所ふ社領八十石〇例祭八月一日二日ふて三村祭又大寺祭ふの木戸村開口村原村の産沙神ふて大念佛寺の鎮守ふて、

三津八幡祭 十五日 摂州西成郡大坂三津の寺町ふあり、三津とは高津

敷津難波津是ふ傳へふ昔行基寺院を建ふ三津寺と呂ふ後神託ふよりて八幡と勧請をり、社説ふ云ふ當社ふ清和天皇の御宇、筑紫宇佐の神男山ふ遷座のとき、西海より初て至りあふ洲中ふその旧跡ふ祀り祭るとふ又一説ふ應神天皇行幸の地ともいつへ

〇摂州難波堀江の人月と此所ふ賞をふ谷深更ふ及びて家ふ帰るこゝと月見と称して又難波の御祓と称をり、是八幡祭ふ、

水引の花 和漢三才圖会 水

引草高さ二三尺葉楊櫨ふ似て皺ありて秋長穂ふ出、小き花つく、紅色其蕊四ふ繊く紙撚及び水引の如し故ふ名づく、

水始涸 月令ふ出ッ 九月 三度栗 本朝食鑑 上野

州下野州ふ山栗あり、極て小ふして一年三度栗ふ収む、故ふ三度栗と称をり、味佳ふらずこゝ世及古の物ぐるり、

水木 和漢三才圖会 美豆木真木高さ七八尺の三叉葉梅樣

黄色ふなり、一種土佐の山中ふより出る者高さ二丈葉粉團花の葉ふ似て小し、正月黄花を開く、蘡薁ふ下り垂る子と結ぶ赤色呼で土佐美豆木ふつふ〇実を賞して秋とり、

蜜柑 和漢三才圖会 太知波奈 和名ハ橘類の總名ふ今單ふ太知波奈と称をるの一包橘ふ專果ふして其皮を薬とも乃蜜柑ふ其実熟まさきハ蜜の如し故ふ名づく、たちもと草 橘ハ淮ふをるとふうきをふ化て枳ふなるとふうきをふ

ふつゝん九年母をどいつるとかの、其樹と移し出羽ふ植ふそゝれ枳殻とあるとの、

川の紅葉お同し、かの部ごるべし、

七月 七夕 せいせき 七日の夜 とゝふ、二星

牽牛 織女 犬飼星 **月令廣義** 焦林大半記云、天河鼓 彦星 なかつあの河の西ふ星あり、煌々こゝく參こ倶ふ出ッこるをと牽牛とゝふ天の河の東ふ星あり、微々こゝそ弐の下よあり、こるをと織女とゝふ、世ふ雙星とこ 俗名抄 尓雅注云、牽牛一名河鼓 和名比古保之 伊奴加比保之 織女 和名太奈八太 奈八太 男子の美称織女の夫、こと故ふ 豆女 和訓義解 ヒコ星 ヒコハ男 男星こゝ、二星のこゝろあり、

二星の屋形 唐の天宝年中、宮中七夕ふ錦綵とゝ結びて樓殿こゝをこ高こ百丈数十人こ容ぐ、花果酒炙こ陳ね坐具こ設け以て牛女の二星こ祭る、〇本朝式ふく異こ七ッの棚ごかき花こ折瓜果こ備へ、

七種の舟 七種の舟ハ色々の紙こ七色舟ふ積て手向空焼まごの事あり、

新吉原燈籠 一日より 享保元 三十日迄 年江戸 吉原の遊女玉菊う追薦のこゝめ、一年七月中の町の揚屋各燈籠こ出す、是より例こまりて毎年此事ありその燈籠綾羅と以こ禽獣諸物こ造こ奇麗壮観のこゝをこの節男女群集こそれこ燈籠見物こゝ、燈籠ふあ江玉菊の来る夜 墨雪棚 たの部灵祭 うゑ不知作者 抄 鹿鳴草 和名之々故ふ此名あるあらべ、八雲翼抄ふ波ふ 異名分類 稽尊こあり、敦長集、都ふも咲あをごも鹿ふく名ふ負ふ草ふ秋の山しふまゝ 大和本草 老鴉蒜こもごこれらふ四月或ふ九里、

石蒜 月赤き花こゝく下品、此時葉ふあて花こゝく故ふ號ふこ捨子の花こらく〇彼岸花くも いく曼珠沙華の条ふ出ッ、 大和本草 老鴉蒜 秋海棠 名花譜 秋海棠一名 断腸花 嬌姿柔軟真ふ美人の擬こ撓ごゝくこゝ性陰こ好ふ日と見るふ即痒ゝく九月枝上の黒子こ收め、地上ふ撒けば明春枝と発こ老根ふこ過る者ふ花発き更ふ茂る、 大和本草 實更年中中華ふり初めて長寄ふ来るそれ以前ハ本邦ふあり色海棠ふ似こ故ふ名づゝ 五雑〇 **榧** 特珍日榧 榧名悉 柀即ち榧ふ 苞蕚 秋海棠 西戎の色ふ咲あり

諸物を漬べ、澁取 和漢三才圖會 柿渋造る法、柿一斗故ふ漆の名ありり、帯を去水二升五合ふ和ふ搗こ補ふ盛り宿を經てこまを搾て渣も又水ふ和て二日を經ふとびこれを搾る其用甚多し、兼三秋物

ちら露 李白詩 秋露如白玉、伊勢物語 ちらくまのの何ぞと人のとふまで ちらと露ときこえて消やすき物

新月 みの部三日月の異名也、の条う注も、

ちいまほ〳〵 秘藏抄 朝敎

ちよふふくるみとりの空ふ凡ふけばうぐひすなきもせず星の影、常娥 淮南子 羿不死の藥を西王母ふ請入、姮娥こまを竊んて以月ふ奔さ 後天文志 嫦娥ハ羿

うまこ不死の藥を竊んで月ふ奔さんと蟾蜍となる、真如

の月 法華玄義 清淨眞如ハ雲外の月のごとし、〇衆生の真如ハ常ふ煩惱ふつゝまれても其体ハ少しも染ず汚ざること、喩ハ月の雲ふ掩ハるゝともその体ハ清く明らかなるが如しこを真如の月ともいふ、真ふハ不変の義如ふハ不異の義、

篠芒 宋祇曰ものまきこと縦ふ白ほを穂ふいでゝも薄とふ、縦芒 文あり、忍草 真

羽云おのゝ草ハ和名抄の苔の類ふ垣衣をいふよみくり、古き築地抔こ物の端古き軒端ちあどふ常ふ生る草と云、とこゆかしきハ山中ふおのるひとつの草をさてろのけしてねとつくそ軒ふうくるを云ハ古きをころ得ぬかの〳〵偽名也、〇今云忍州ハ本草ふいふ石長生のこひふぐ〳〵さんこを石長生ハ四時凋まで今俗の搓ふ揖るゆゑふ冬拮るく、〇後醍醐帝の廟前ふて 御廟手を經て忍ぶハ何をものぶ草 芭蕉是ハ垣衣ふよつてよめる、

新澁 七月の部淺取 鹿 格物論 鹿の性驚烈多し、能良草を別ふ他獣多くハ十二辰八卦ふ屬を惟鹿然らず、千年ふて蒼鹿となる又百年ふて白鹿と化し又五百年ふて玄鹿となる、鹿あり 麞あり 大和本草 鹿の角ハ春生し夏長し秋堅く冬脱壮麞ハ鳴き壮麞ハ鳴ず、七月の末より八月の中ふ至ふて鳴〳〵〇うせぎ、紅葉鳥、さをしか、夢野の鹿、肩抜鹿、まろし、各頭字の部ふこゝろて注も、但をづるを 獵人鹿角 鹿笛 鹿の根及ハ胎

鹿の皮或ハ蝦蟆の皮と以笛を作て吹ニ牡鹿の音と僞る牡鹿匍匐して来て竟ニ涼ふ罹ニ矢石ニ斃ル

つれく草 女のもてる日ニ翳ふして作る笛ふ乙秋の鹿の好ニつまし物ニ入こと防んがめふ垣を設く是を鹿垣と云 鹿垣 此獣田圃ニ出て穀菽を食ふ農

白虎通 王者諸侯田狩ふ害を除く 陳藏器拾遺 鶉ハ鶉の如く色青く嘴長く音速声をなして村民が云田鶉の化ニる所ニ時珍曰今田野の間ふ小鳥あり形状鶉ニ似て微ニ小ニ雨らざるの時鳴く是なり 和名抄 鶉 本草 云田鳥

畜会 按ニ俗ふ鳴字を用ふ益田鳥の二字を製ニる欤ニ時珍曰杉雞按ニ本草ニ云杉雞ハ常ふ杉の樹の下ふ在て鶉々ニ似て小ニ海畔ふ多し形状鶉ニ似て小ニ頭上ふ長き黄毛の冠あり頬青正色垂縷のごとくニ居ニ鳴ニ多識論 杉雞 音斗志義 ○時珍曰杉雞ハ常ふ杉の樹の下ふ在て鶉々ニ似て小ニ海畔ふ多し形状鶉ニ似て小ニ頭上ふ長き黄毛の冠あり頬青正色垂縷のごとくニ居ニ鳴ニ

突網

職業畫 下総国萩原辺原中ふ鳴の居ニ動ニ人ニ近ニ時ハ竿羅を持て鳴の正面ふ向ひ徐ニ行ニ付ニ漸々ニ近ニ寄ニ遂ニ網ふ入ニ段々ニ近寄ニ遂ふ小輪ふ巡ニて止ニ六七尺ふ間近ニ成ニ

てから竿羅を投てとらへ六七尺の所ニ羅ニとらへ得ニ手練の業ニ是を鳴突ニとらへ辺多しニ

鳴の羽撮

荒野 鳴突ハ萱津のあまの ひまころ 渕支 已ニ翳ニ

和訓栞 鶺鴒 羽ニもとゞく音の高く聞ゆれいとよく羽ニきことも数撮ニとりおこ暁天ふ必ニ鳴ニ事ニもとゞこと

十古ノ 暁の鳴の 龍鳴抄 百舌 羽ニきニ羽ニきニ君ニこゝ夜ハ我を数ニく

和訓栞 俗諺ニその田沢ふ居時ハ鰐の闇黙ニなるニもてなり 鰐 詳俗云志比良長崎の人呼て比以牟ニといふ按ニ鰐の状鰐ふ類して頭ハ広く尾鱗細ふ味もまた鰐ふ似て大ニ者二三尺九万足ニ名く其多ニこれニを以てニ名ニ

中華の魚ニて四五月唐舩多く入朝の時ニ来て群遊ニ唐舩帰ニ時九州の鰐唐人肉食の腥ニ気ニ慕ひ舩ふ著て入唐ニ夏月鰐日本ふ多く冬月鰐中華の湊ふ多し

大和本草 シイラ 又名ニヒキ

筑紫ふて猫ニラといふ味美ニ

八月

白髭

開帳 五日 神祇正宗近江打扇白髪大明神ハ猿田彦也社説比良明神と同体之〇昔ハ開帳あり元禄中より止む今ハ只内陣と開て宮殿を拝せしむるのみ

四月上の辰の日祭礼神輿渡御あり往古の神門石橋の遺ハ今水中二町ばかり湖水の沖ハあれども縁起おこせ鳥居のありし所を鵜川ならん社頭より二十町ばかり河あり鵜川と号す此川の北と鵜川領とへ別當と白頭山延命寺福寿院と号毎年二月八講あり開帳ハ八月也 志

賀八幡祭 十五日 淡海志 四十代天武天皇即位九年壬申近江國滋賀郡ハ壬申軍跡ハ幡一の御前八幡大井八今の聖真子是也唐光僧の形聖真子ハ阿弥陀八幡大井の分身之〇是山王七社の神ハ一と波海国滋賀郡坂本村ハあり見瀬村の神社ハ月令あり今ハ山王祭の外神事ハきこえずあり

活杖祭 廣我曆書云立秋の後五戊の日と秋社とハ註ハ云社ハ后土ハあり民ハてこれを祀りて以て農と祈る死ハ此祭ハ京都祇園三条の南福速の神社ハあり 雍州府志 昔刑部省此辺ハあり獄と断じて以て死刑と行ふ故ハ刑死の人の為ハこの社を建て祭祀と修せり毎年八月神事ありそのまゝと死活杖の祭というハ〇千本引接寺ハ生の地蔵ハあれども毎春修せる所の念佛會ハ元死刑人の為ハ修行せしむる始りとぞ

四手打、もろ打 条ハ註て

紫苑 頴頌曰紫苑三月の内地ハ布て苗と生ず其葉ハ二四相連り五月六月の内黄白紫花を開く黒子と結ハ万葉 昔草吾下紐ハ今著有跡鬼乃志許草事仁思安利家里 家持〇鬼醜女草ハ紫苑之ハ 袖中抄 鬼の忘草ハ別の草の名ハあらず忘草ハ愁と忘る草なれバ憂き人と忘れん料ハ下紐ハつけざれど更ハそ 俊頼抄 昔人の親ハ二人ありそれハ此ハ嫌ハ詞之山の字と云ハ

ゆきこぬ其ハ兄公おつくて私とうつるゐ堪こと思ひをるやうに只ハ止む時あり忘草ハ思ひをること塚ふこと植る弟ハいくこと悲と恨こと植る兄ハいつの程ありともれて行ぞ世ふ萱草と忘草といふことをもりけり弟ハきこと絶て詣てぬある日親の塚ふ声あり恐るべくもぞれい君ふ親の塚を守る鬼神ぐ兄ハ忘草と植て公おつくうゆるこころろ思ふそのの家を思ふと實ぐ其許ハ思ひ草と植てますく怠ら至孝ぐ天帝にくまれまりむるハ今ぞり盈あんてと夢ふ告ふまゝとりおひ帰ぬれ盈あること夢ふ見ふ違ふぞ徳と得うとこやこの繋死草ハ諺しきこと歟くことわゝ人ハ植へうぎる草ぐ故ふこもふとらくく鬼のとくくりいと恩の師子草ともいふ

和漢三才圖会 椎の木より生ず大小叢生も、松露 俗云 松露沙地松樹ある陰處ふ生ず松の津液と秋濕と相感じて菌ぐある繊柄ありく状ち零餘子ふ似て四く大き

し、外褐色内白く柔ふ淡く甘し香あり、

濕地菁 和漢三才圖会 野菁ともく状松菁ふ似てふくすぐろふ濕地ふ生ず故ふ濕地白色柔ふく脆く破ぬ易し九月盛ふ出つ又織の如黄色の者あり並ふ食ふべし 本朝食鑑 櫟才諸草 漂才ともく茅ぬ多く生ずる地の名下野國黒髪山の下ふ撰才原あり此則其處ふり此菁草才ともく草湿の地ふ生ず故ふ名づく

猪菁草 和漢三才圖会 華菁ふ似て黒く繊脂潤ひ其実裏ふ穴あり蜂の巣の如し毒ふり、

代ゝ雁 夜止宿ふ中更ふ店ふ換ことと代ゝることつく代ゝと田のそゝ、春の部黄代の条ふ注ふ

四十雀 五十雀 和漢三才圖会 小雀ふ似て大也頭黒ふく両頬白くして白き四紋黒き圏頬ふ至て胸背灰青翅尾鬱黒ふして白色ふして胸より尾ふ至て黒雲の如ふあり灰白の堅條ありく腹多く囀ふ四十ゝことりふ似し故ふ名ことりともく其名ありて其声清滑ふして形ち又大ふ異ふ色ゆ異ふこと俗呼て五十雀ともく雌ハ腹の垂紋幽微ふ

鶺鴒 種類百

鮮かに似て鶏の如し、胸の前に白き圏ありて真珠のごとし、背毛に紫赤の浪の文あり、〇時珍曰鶺鴒飛ときは必南へ翥る、晋南に懐南ふ江左に遂影ふ張華ふ注に飛と必南へ向く、東西に回翔するといへども翅と開くの始めは必先ッ南へ翥る其志し南に懐いて北に徂ざるなり、性霜露を畏ると早晩に出ること稍ゝ夜漏に応ずるが如し、多く鶺鴒と呼ぶ、和漢三才図会に鶺鴒其形鶏に似て数目に随ひ潔きことを好む、正月の初めに一さへ飛で止む、蓋未知然るやいなや、近年亦中華より来ることあり、最も珍しとす、状雀雛の雌に似て頭に鶏の如し、薬塩草に此鳥の来るときは紅葉の散ると前後せずぐゝ故に寄鳥の名ありと、

鶺鴒

和漢三才図会に今鶺鴒青鶺鴒一物ともするは非なり、鶺は山林に在て上毛の紅なるあり、

鶺鴒

本朝食鑑に新原野に出ること雀に似て黄赤色、翅に黒き縦の斑あり、脚掌黒し、

新酒

酒は凡新稲の白米一斗を用てこれを醸し、須加利酒を漉して舟に入其酒の水半滴る復布嚢に入て圧ときは酒おのづから滴り出づ、酒滴り尽て後汁と取滓とを去、これと新酒とをふたゝび合せ漉ときは清酒となる、

○新走、中汲、滓醸、袋洗、各其頭字の部にもとづき注す、

九月

四の宮祭

十日 近江国滋賀郡大津の駅なる比叡国常立尊此神天皇小禅師と申す神殿ふ故ふ四座と以この地ふ迚も里民五この神鎮座の旨を伝へ官幣使四位某の卿ゝ故ふ四座を以四位の官と号もと誤ゝ四神鎮坐のゆゑふ四位と号もとゝ社説云祭る神五座大比枝小比枝気比小禅師塩土の老翁ゝ小禅師ゝ事社ゝ故ふ四の宮とふ例祭九月十日大津浦中の大祭ゝ神輿二基ふ山十一遍物造花ふを出ゝ夜ふ入て相撲有、

下鳥羽祭

十日 山城国宇治郡下鳥羽ふあり、祭る神牛頭天皇ゝ日本紀ふ見ゆ及び横大路の上人木居神ゝす、神輿一基のり名勝志云

白川祭

十三日 名勝志云神の祭ふ

神社ふ法傳寺の巽二町ばかり森の中ふあり、洛北白川の里南山の上ふあり、稲荷社山王春日八幡紀事

神輿一基鉾五本あり、〇社説云祭る神天満宮ふ多名

の導振社ハ前ニ同じ、天満鎮座ハ延喜八年三月十三日之
旅所ハ本社鳥居の前二町ばかり西ニあり、例祭九月十三日
土人産沙 後の月二夜の月、高潔二五十三夜の
神ニそなへ、**十三夜** 一豆名月、栗名月、月見ハ我朝の風ニ
ちなと近世のことなり、儒者ハ天邊將滿一輪月又光彩通空
輪將滿といへる詩又明の十二家詩ニ鄭北谷何太復が
十三夜の月を翫ぶといへる詩を引て異朝ニも十三夜の月
と賞ぜしといゝ、附會の說ニ信ずべからず、今彼集 十二 豪寺ニて
るハ是ハ八月十三夜ニて九月十三夜ニあらず、其他一ツも九月十
三夜の月と賞せし詩文なし、〇句ニ章ありことを引ハ
異人臨時の興ニて、天下の名月ともする事ハ我朝のごとし
旧風ニ 右中記 七十五代崇徳院保延元年九月十三夜、今宵
雲清く月明らかニ見ゆ、寛平法皇明月無双のよし
仰出さる、依て我朝九月十三夜を以明月の夜とす、 常盤記
生熊 万里小路藤房光卿の御說を引て云、十三夜の月と賞
せざる起ハ天暦七年九月十三夜始て月の宴を行
ひそめしより、遺例となり来る、ニ〻但此宴ハ本八月十五夜の
御遊びとおぼえて行はるゝニ、其由ハ八月十五夜ハ先帝 朱雀

の御国忌ニ當るもの〻ハばゞ後れて此九月ニ其遊ゝを行ひ
そめしニや、此月ともニ十五日ハ猶其日次も忌ありぬべくて、
十三夜ニ定て此月の宴を開き行ふなるべし、〇忠道公十
三夜詠月詩云、閑窓寂々月相臨、従爲窮秋泪巾襟潘
室昔蹤凌雲訪蔣家旧徑蹄霜桑、十三夜影勝於古數
百年光不若今馮前軒圓見清明此夕價千金、〇唐ふ
富士あ〻いくへの月も見よ素堂 〇後の月といハ十五夜ニ對
していふ、〇二夜の月十五夜の月と賞をくらべ、二夜の月と賞を〇
栗名月、豆名月ハ浪華の俗、十五夜と芋名月 芝神明
といふがごとし、十三夜を栗名月、豆名月とハいふなり、

祭 十日より 江戸芝増上寺大門の傍ニあり、神領十五石
廿二日まで 別當金剛院神主西東氏當社旧地ニ増上寺の
山際ニあり、故ニ飯倉明神と号す、祭礼九月十一日より廿一日迄て
神幸あり、此節時として秋雨多しといへども以て世俗神明のめぐれ
祭とゝふ、祭礼の間社内ニ於て生姜と高ハ 是と根藤雑姜とふ と誤りて一品生姜と
ふ本朝醫方傳ニ云、薑ハ薤土と云神明ニ通ずと、土俗ゝの
事と誤て傳ふ〻生姜を賣もの〻ハ、其外擔割筥ニ藤
の花と恵き内ニ鮨を盛りてこれと風木箱と称ス但し

風木の餘りありて作れるといふる謂あるべし、
森詣の人必生姜と此ちき箱と買て帰る、

城南寺祭

廿日 神社啓蒙 城南の社ハ山城国鳥羽の里にあり祭る所二十二社の内七社の神、坐鳥羽天皇、○社説云祭る所二十二社の内七社、伊勢、石清水、松尾、稲荷、賀茂上下、平野、春日、以上城南神と号す、例祭九月廿日神輿二基あり、この地ハ皇七十四代鳥羽上皇の離宮ありて王城の南にあるゆゑ城南の離宮といふ、

鹿ケ谷祭

廿四日 紀事 浄土村

十禅師祭云 洛東銀閣寺の門前北の方ハ十禅師の社あり、同所ハ八所明神の社あり、神号詳ならず、土人庄湫神ともいふ、祭礼九月二十四日 今九 雍州府志 鹿ケ谷天皇祭云云 今祭祀微ありて記をハ及ばず、

捏々菊

黄捏々ハ方重大弁ん、乱捏々ハ本紅あて葩尖て、大弁ん、小捏々ハ捏々の如くあて小弁ん、

女花

菊の異名之 藻塩女節 女莖の異名あり、

兼和の色

菊の異名之 藻塩 草 唐ふて菊をかそへ、陶淵明ふたゝびまり、我朝まて、兼和帝仁和天皇より始てかて遊びめひ〳〵故ふ兼和の色と申よ、此

ろひまぐ菊の品も分ざまぞ、只黄ふと用ひられしゝも黄菊をさして兼和色とも蕪我菊とも申ことやゝ云、こ藻塩草より説ぐくの如くとも類聚国史ふ垣武帝の菊の御らんじ宴ありらるゝとされば兼和帝より菊とはじめて愛しかひ〳〵ふわ〳〵、只此帝わきて菊とかて遊びめひ〳〵し後の哥ふ多くもら菊とまり、

もら菊

和訓栞 菊ふ大要

黄を貴ぶり詩人の賞をる所薬用ふ入もまた同じさるふ哥ふ多ぐがよろ〳〵ふ新羅菊の義ことゝりつ、花史在編ふ菊品新羅一名倭菊千〳〵菊 苟菜其二花肥大葉純白とゝえとり、

苟薬の根分

壌とるゝふ毎年九月根を取割り去る、

柴栗

栃栗のこと

熟柿

熟柿哉

椎の實、椎柴、椎の葉

大和本草 椎ハ闕書ふこまごと載て支考

本草ふこまもあり 羅山文集 余幼年ふあるて太平御覧ふ在と聞く、後ふ考もて益胡説汝頂風書帙山志と見るふ椎ハ科子ふ其末尖て雖ふ似ふ、故ふ椎といふ宋志ふ椎ふ作る木に従ふ

の巣と戴く 夢華録 唐の時、立秋の日京師、梳の巣を賣る、婦女児童前て花の様ふあり
てれ と戴く、一巣 桐一巣 淮南子 一巣落而天下知秋〇一巣ハ桐をも柳をもいふ句体かるべ
一巣の舟 一巣の水み浮びるを舟ふ 御会 初秋の事ふ、一巣の舟詩文ふ多し、冷
暮秋ふハひとゝ〳〵志の部二星 彦星 の条ふ出づ、 火取香 棚機ふ手向
西北机三居香爐一口、納殿の百和香四両盛之 江次第
公事根源 机の上ふ火とうふ終夜之焼物あり、 萬寿子
唐胡麻くと 時珍曰秋蕎大ふして早く脱つ故ふれ
の部ふ洋も、 秋 を秋とふ榎ハ小ふして早く秀故
ふれを榎とらふ 花實 棚 品字箋 ヒサキ、キサゝゲ、カブ
テコブラ、ライテンキリ、人家徃々こゑと栽、高さ二三丈白
鐵樹ふ類して皮赤龍の鱗の如し、葉ハ杉木ふ類〳〵
大或ハ尖て或ハ三尖夏筒子の花をひらく小ふして白色
紫点あり、凋て莢を結ぶ數十簇、 蜩 大和本草 時珍
をもつて枝の間ふ垂る、長さ尺餘、 曰小ふして色青

會 椎子、鐵椎 其葉椚ふ似て鋸歯細ふ小強く冬もまさ
葉落ず、其実長く尖て筆頭ふ似て紫褐色、仁白く両岸
とある云〳〵凡椚 鉤栗椎子の揀相似ふり小椀の如し俗呼
で供器といふ〇季吟云堀川百首ふ椎葉と冬の題ふ出
せり、其故あや冬とまる一説あまて実ふつきて椎 松子
ハ秋季と持かゝふ椎柴も葉も実も秋ふ
から松と訓ずるハ非あるべし 松ふく大之子ハ果〳〵食
ふべし 日本の産ハ朝鮮より来るふおとこ 椿名抄 松子
漢語抄云五葉松〇音抹と 貞享式 此式
子和名万豆乃美 大坂の里語ふ新松子といふ ハ例の賞翫と
大坂の里語ふ新松子といふ 新蕎麥
奈何くれバ荊ハ冬ふして食ふ 新米 食療
ハ秋ある前後の働と賞〳〵てくれ 本草
粳米新熟の者ハ気と動し、 千首
年と経る者ハ亦病を発と、 霜踏鹿
霜置て岡べの道ハ をもつて一首
さをてふの声、称名院

に 俗せ出ん の部ふ

ひ 七月 楸

緑ある者、尓雅註云小青蝉也、此せゝ山中ふあり、晩ふるく故ふ名く、常の蝉より小ふして青赤ゝ音聒くゝ尤聞ふ堪くり、寒きときゝ鳴く、

兼三秋物引校

拾穂抄 校よ木と添て綱とつけて引ゆゝ

し鹿と驚ひ一本芒 大和本草 一寮よ 八月 菱

ア多く叢生まて、

物あり、

取 菱

千生 和漢三才画 青瓢薯 会 苦瓠 俗

時珍曰芰實一名菱或ハ沙角その角稜峭

これと菱ゝふ俗呼て凌角ゝす、中器自潮中

ふ生ま、葉実ともふふゝ其角硬ゝて人と刺、其色嫩うるる者青く老る者黒し、嫩うるる時剝食ふ甘美ゝ老る時ハ蒸

しゝて食ふ、大和本草 八月九月これと採、

穆

時珍曰穆苗芟柔柔の如し八九月莖と抽んつ三稜あり、細花と

栗の穂の如し、

瓢簞、百生

三云瓢簞ゝ壺盧と一類ありて別種ある者明けし巣花ふ

ありて垂盧ふ似て瓤の味食ふふ堪ハ田ゝる者多く

炭斗ふ作る長して細腰あるふ酒樽ふ作るゞ下長五六

すの者あり、俗百生と称ス、二三寸の者あり、千生と称ス、細

腰本来相近ゝき者俗呼て平蕈 和漢三才画会 平蕈山

て間夜とりふ、珍ゝそ 林の濕地ふ生ゞ苦辣

の掬多くゝそ と出も七月盛ふ其形松茸ふ似て痩傘

薄く而し故ふ名く大さ二四寸亦至て大ゝる者あり灰白

色裏白く細き刻こあり性柔ふふ脆く其柄多くて

正中ありゝど、暑偏て生を、大小叢生ゝて味決て美ふ

鴫

和漢三才画会 菱喰状ち雅ふ類ゝて大ありゝ背頸倶ゝ

灰色翮深黒色尾本白く末黒ゝ腹白く脚黄緑色黒ゝ

して鳥の辺ふ黄の條あり其肉の味雅ふ勝らる

鶴

和漢三才画会 俗云比与土里状ち鵞鴨ふ似て尾長く蒼灰色

頭上の毛乱ゝ起眼の辺ふ微赤色と帯ふ胸臆髪目臆

の下灰白く倶ふ黒き斑あり背利く脚脛短く掌ゝ蒼

黒く常ふ群ゝとありゝ飛啼好て草木の實と食ふ或ハ云

山茶花と食ふ、

鵲

和漢三才画会 古抄秋ゝ貞享式ふもろ〳〵注ゝ、冬の部ふそ

云比伽羅、状四十雀ふ似てふく頭背赤色頬の辺ゝ

ゝ白黒相交ふ腹白く翅尾黒く其根澤あ

日雀

画会 俗

鶺

河原鶏 和漢三才圖会 俗云比和止里雀より小く全体黄色ありて青と帯ふ頭背頸翅ハ黒きを交ふ尾黒し腹黄白嘴灰白く脚黒し其声清滑よく囀る又河原鶏状鶏ふ似て稍大く頭背灰白く眼の後微黒く背ハ黒き斑あり翅蒼黒みありて黄と交ふ 大和本草 唐鶏 紅鶏 蓼鶏 ホロホロ状略之 うりの小鰯を用て醢とす 造法鮮鶏一升洗ハずして塩三合和し三日ありて後石と以てよく壓すべし或ハ同く茄子生薑穂蓼蕃椒ハ漬るも又佳し 鰓の字未詳 本朝食鑑 鰓ハ小鰯ありと 魚名 公事根源 十月の旬のくハゐまで今日を氷魚と取てくふ 年中行事 菊のみぢ折〳〵氷魚を給ふときのちつき 滑稽雑談 いにて菊と愛ても中ハ殊ハ百菊とて百種の名あるものゝ傳ハ 足利将軍義輝公御園ハ植らまと御寵愛あり義景藤孝両人ハ贈られ 百種 和名 云云

鴨上戸 ほろ酔

かの部 時珍曰栗梢小きハ ふ出づ、

雏栗 くりのみ

栗の山ありて尖らざるを雏栗とも

の樹 き

和漢三才圖会 其木の葉ハ長く微淡し三四月小細花を開く深赤色実ハ結ぶ大さ豆の如し自ら裂る中子細小さく黒色別ふ其葉の面ふ子の如くあるもの脹出て中ハ小き蟲あり花し出づ、殻ふ孔口あり壁埃を吹去ハ空虚とあるハ 太平の者ハ桃李の如し、其文理椀椰子の如し人用ひて胡椒蔡椒ハ末の抹ニ収ぶる 雛飢ふ代ふ故ふ俗飢の木とふ或ハ小児戯ふ吹て笛と 駿州ふ多くこまあり、祭礼ふこの笛と吹て神輿ふ供奉を象る故ふ名く、紫黒色

蘡藤 えびかづら

時珍曰其子蘡の形ふ象る故ふ名く、紫黒色微光る大さ一二寸山ハそ偏ふ人多く肉を剔き去り蒸飢ふ作て腰ふ垂 廣州記

藤 ふじ

似て掏ふつく、通草のごとし、

稽 いなび

古今 川ハる田ふおふるいちのわふ出ぬハ 字彙 秫再び生る稲ハ、

七月

世と今さらふおきもそねとのよふ

百子姫 ももこひめ

棚機七姫の内ふ、百子の池ふ名くとふり、

百子の池 ももこのいけ

七子の部

の条ふ もみち 古今 天の川もみぢ葉流るかみなびの山の秋風吹きにけらしも、紅葉の橋 くれなゐのはし 万、真淵翁云、もみぢをそうとはいはでうつせみの人目も草もかれぬ間にとよめるごとく、紅葉の橋ハ秋ハもらぢと尊とすれバ、初秋のて緑葉甚ぬ比ももらぢで凡の秋のさまもそうふのこと、中暑此紅葉を橋やとこころ得ゐるよ、おそ今ごろむかしやまうくるが多し、〇青藍云此古今集の三の歌より、天の川原ふもみぢの橋ゐる趣ふ古くうよめるを、又棚機のつまごもれんと手ごとき、紅涙とおとしたを、もみぢのもゝとふ説ハ、後ふ設けるうべし、紅葉の帳 ふばり 藻塩草 紅葉の戸だりとよめるごとく、天木 かやぐさ ももぢの戸そう浪やうつらん、後九条内食、文珠會 八日 公事根源 是ハ東寺西寺ふて行ふる、仁明天皇天長十年七月八日、大法師泰善もづめて文珠会と修ま、天暦官府 其略曰、文珠会ハ畿内郡邑廣く此会を設け、兼食ホと共じて貧者ふ施しあふ是又文珠浣槃経の文ふ依るこ、云ゞ衆生ありて文珠師利の名と聞ん

ふ十二億劫生死の罪と除却せん若礼拝供養まる者ハ生々の處恒ふ諸公の家ふ生まれん云々、 秘蔵抄ふ出 もゝかぐ 桃の子 時珍曰桃の性早花植安く稲妻とふ、 ゝて子繁し故字ふ兆ふ従ふ十憶を兆しふ其多きをつゝまり、 兼三秋物堅月 説文 望ると日と相望む君ふ朝ふるゞ如し、月ふ 紅葉鳥 鹿の異名 ひと臣ふ从ひ壬ふ从ふ壬ハ朝ふるゞ也、 藏王 もれくるゝの田の山のもと 桃吹 この部木綿ち鳥もとちの衣きこゝやみくらん、の条ふ出川、 藻ふ住虫音ふ鳴 本草綱目 紫菜其中ふ小螺螄あり 大和本草 約言ふつふ處古哥ふうたふるべし、藻ふ付て殻の一片ある螺ゟ、分殻の意こ、 古今栄雅抄 蛩の川藻ふ付て此むし一我うと身とほろぶべふふまうて名づくるん、 古今 蛩のかる藻ふもむ虫のそれうこそねとこそふるめ世ごというこゝし直子朝臣 ○御傘 ふい雑ともり、 鵙 音臭 兼名苑又鶏雀 和漢三才畫会 鵙 と用ふ日本紀百古鳥こ用未詳 鵙形

鳩ふ似て小く、頭背尾ふ至て黄褐色、眼及び鬢顔の容小き
鶲ふ似て、眼の辺て黒く、眼上の白き條一條ふ引、嘴黒くして
末曲る、頬臆白く腹黄赤黒き横斑あり、翮白く羽黒し、脛
掌黒く爪利して毎ふ小鳥と撃てこれと食ふ、其声高く
喧しく奇異とするに如し、鵙の草莖、鵙の早贄 輿 俄

○秋ふ至てよく鳴く、鵙の草莖

抄 むかし男、野と行て女まのひぬとてかへらひつきて其家をとふふ、女鵙のおそる草ぐきをさして曰我家をの什草莖のまぢふ行てこよひとまれらむやとよめりし里ふかりけりとこたふ男後ふ思ふれらむやとうめづるよりも契りてきりぎりすの後心ふかなひなむやらねばやけふつくまのうらふ、私をとうりこるほどふとまれりてゆくぞまりみ、次のとしの春くるまくありし野ふ行てとくく草とこるふ、殿こらくく聲てまづく見そぎ、記れもまぐをむるく帰さなといひしを凡故将作の傳あり、

袖中抄 鵙の草莖とも、鵙の草ぐるとつまり、

哥林良材 鵙の草莖ふ、鵙ハ時鳥の眷ぬひそ有るが皆手と取てうぐ〳〵ふとりて其うりふろつゆのつ物と、草の莖ふさしをこめるといふとうり是と鵙の早

贄とゆのうへ、

藻塩草 鵙早贄らふとをしてよりの草莖ふ、ひをさくる虫かく蛙ふどとりて、刺て時鳥の為ふとく、こぶみ八雲の御説ふ説々あり、此説ふ過べうらぶ、

日くらせと 鵙の性とくせて必蛙或いとうげふどを取く、草木の立枝ふ刺貫き晒しおくありこれを鵙の早贄とのふ人気疎き別荘ふとふまくあり、

○諸説くうもる本説ふとるも後の人取用ひくよめる哥ともあれど、こゝにもとろの説ふとりてふ句作あるべし、

鵙ぞ落 紀事 山林の間四ふ鵙の目と縫ひ架頭う居候ふ鵙竿と設て鵙鳥と執る是を鵙を落ふ云、

八月

木犀 花の条ふ出、

九月

百夜草 菊の異名ふ、

藏主 名中

翁が庭の百夜草花さきそこそ白妙ふまれ一大和の國三輪の里ふ老翁あり、彼庭ふ一本の菊をとるて此翁かそのぞくの菊秋冬をぎて、春夏まぞも花も葉もうらぐ所の者不審して委くらぐ聞ふ七月一日より毎夜菊の下露を器物ふうくると百夜あり、毎月此花を並これよ依て此菊四季ふまぞ、仍百夜草と号く、

紅葉 和訓栞 紅葉とあり、

紅出しの義なり一の反ぢく、かといふ
てゆきぢくのいろ、中
略ことづてもゆみぢそ
ゆきぢくいとをみぢちすの反
ちふさとありぢちふの一反たまり、〇ゆきぢ
膠木 蔦 檀 柏 槲 柾 梅 櫻 正木ホ、各頭字の部ニもちく
註ニ、〇楓のゆきぢをぞ見てる故花と
ゆきぢといふ、楓のもうみぢ又ゆきぢい山もり深く里
へそめ下る花ハそとちくもり、ちふいちり麓のゆきぢ
こぐらとぢまぢ庭もふ 紅葉のゆきぢ 古 和訓栞 源氏ホ紅
うたきみぢ葉 古音法師 紅葉の舟
たる舟とも紅葉のちふ
ゆきぢのこぶねもそえろ、 紅葉ゆきぢ
時記ホ馬琴云、紅葉うちるのうつ
の花おどりつつふおろ、ぐくもぞ
又陸佃が埤雅ホ茶褐色ハ黄黒色ニといひ、樹々の下枝
ハ早く色つきくるが、雨露のくるふもの
色ふまりてちるをといふ色あらん、故ふうつちる秋ふり
下もみぢうちる山のタ〻どれぬれてやひとり鹿の鳴らん、

家離 家兄羅文云かつちるハ數々ちるみや、ニ、此説ニ
おほつるふ〻かりちるとのつるハ盛ホ深くるゆきぢのくろ
くいちりそぐひるといふまぢくろ
のかりといふことぐハ此心ホて毎ぢ
ると狩といふ 俊頼集 ちぐれゆくく
原のゆきぢ狩、ふのむ藍ふくゆ
紫染 表黄、裏萌黄、九月ふり一説ホ面裏青 又黄紅葉 面
黄裏青 青紅葉表青黄、裏紅、其外櫨紅葉、紅葉重、蝦手紅葉
等品々
ちれあり、 紅葉土器 麁文云増山の井ホ重陽ノ下ホ出ぶ
禁中重陽ノ宴まぢこふまぢあふ
こゝもと、御厨子所の預り高橋氏へもとひまぢと、紅葉
土器の名目ありとのつ、梅ぢるふ菊の盃ホ對〻ふる名ふ
るぐし、 紅葉鮒 和漢三才画会 深秋その鱗ちれふ
るつ、愛ぢこゝもと紅葉鮒とい、

七月

紀事 此月朔日ふり十
五日ホ至て、寺院の意ホ
任せてゐもと修もとその法門前ホ檀ノ四隅ホ構へこもと須弥
の四州ホ比ナ、寺僧その上ホ座し經を誦し、中央ホ種々の供

施餓鬼 施餓鬼棚
川施餓鬼 九

物と備ふ是ハ鬼子母神の子とう食ふ故ふ佛戒めて今よ
こ汝ぢ食ハ別ふ与へんと誓ひしふこの故ふ末世の仏弟子ふ
勧して毎日浄飯七粒づゝを與へその飢渇をやくいもむと云、
○一説ふ目蓮の母餓獄の中ふ堕ちてこの功徳をまうけ、
諸の餓鬼をして食と得さしむるとう、施餓鬼通覧
廣大施餓鬼の法、浄き所と点定ち地を掃ひ掃と作る長き
三尺ふ過ぐゝも、但桃樹柘榴の外用ふるとみれ鬼神のそ
ふとてことを食ふことをこえず、或ハ浄地の上大石の上或ハ泉池
江海流水中、これ川餓鬼ふ用ふ東ふ向うて施もて尤時を戒め時定め
てことと行ふ大幡三本こ玉ふ咒語と書て云唵嚂呢唵唎
呼咤娑婆訶、こと室樓閣経の咒ふ又七如来の幡とあぐ、
別ふ焦百鬼王と用ふれハ施食のそのふ面前鬼ふ始ふ
倶舎論頌 鬼ハ八月と日とをとゝ、五百 摂待 門茶 仏祖統紀
人間の一月と一日として壽五百歳、 宗暁傳日
義井と城南の棟社ふ鑿法華水とう以て行者ふ飲しむ、
亭とその上ふ作て施をふ湯茗を以す、屋と結びて數楹
創て摂待とらふ○従来の人
ふ茶と施まふり門茶とも云、洗車雨、灑涙雨、 天中記七

月の六日の雨と洗車雨とのひ、七日の雨を灑涙雨とう人、 藻
塩草 車と洗ふ雨とハ七夕の別とう人、○この夕へ雨ふれバ天
の川水漲りて二星會ふまでとう
俗説、こう灑涙雨となりし誤りしおや、 施火焼 大文字火
船形りの火 鳥居の火 紀事 七月十六日、今宵東山浄土寺の山上
妙法の火 ふ薪を以て大字と点ぜ、此字畫九筆の及ぶ
處ふあらを樽こう室町家繁昌の日、遠近遊観の為こと
点ぜり故ふ一文字通りと正面とを、○一説ふ延徳元年 七月十
六日、相國寺横川和尚始てこゝと作る是將軍義尚追悼
のこゝろ、凡この月六日よりふ薪を伐点火るふ至ることゝ
ふ預ろ其數十家あり、今日申の刻各伐乾ところの薪
と隅て薪木と積事一堆ちの數四百八十余所各薪こ積終り
て後日の没ると待て同時ふ火と点そこの外北山松が谷寺ふ
妙法の火と点じ、船岡山ふ船形りの火と点じ愛宕山うゝ
鳥居形の火と点ぜ洛外所々の山岳ふ原野ふ諸人集ゐて、
祐森の枝葉の枝破子公卿甚の類と焼く、 善福寺童
ふれと聖灵の送火とのひ又施火とう人、

相撲 十五日 江戸麻布 雑色町ふあり人麻布山と号そ、開山了海上人ハ親鸞上人の弟子ニ今日開山了海上人の忌日ふろ故ふまた寺内ふ祭る所の麻布仙花権現の社前ふて童相撲あり報恩のこころまるべし、

仙翁花 別紅羅 剪紅羅 剪沙羅 剪秋羅 ともいふ、花の形刻ミ有て小刀或ハ鋏を以てきざむごとく俗ふせんとりふく秋深紅の花をひらく種類穀品あり、松本セン 小倉セン ブシセン フレクロ 眼皮ハ二類異種ニ、カンヒ フシクロハ三四月ふ咲依て剪春羅ともいふ、

千秋樂 柏子八又〇 俗ふて此芸和種ニ昔崑崙清涼寺の北ふ寺ありふ仙翁寺と云ふ其寺絶て跡ふ珍花生ず時人仙翁花ともよづく則前羅紅あり又紅梅艸ともいふ、

盤渉調の曲也 体源抄 千秋樂 柏子八又〇 王子降誕七夜ふこゑと奏を盤渉調ハ秋の野ふ萩女郎花風ふ吹〳〵くが如く吹ぐきこゑ〇俳書ふ千秋樂と出〳〵そ万歳樂秋風樂ともいふ漢の武帝の時出来て秋声の辞ありと、秋季ふ出ふあるぐきやや、

八月

釋奠 献胙 続日本紀 聖武天皇天平二年八月癸卯釈奠服器及ビ儀式ヲ改メ定ム〇二月ふ同じ春の丁の部ふくわしく公事根源あるる日釈奠の胙とまわるくも藏人持て朝餉の前ふそゝび藏人答てうんやのつるさの奉ふとふくうひて高く擎持て簾の中ふ入事ふ此文ハ二月ふあるぐきや、胙と献もハ八月ふ限るもと承る、猶有識の人うの条ふ注ごとく尋ぬべし〇釈奠の翌日わる 事ふ昨といひうぐきのごとく、

鶺鴒 いの部 稲負鳥 千振 胡黄連ともいふ、

千生 ひの部 飢饉 の条ふ注ごとく、

九月

泉涌寺舎利會 八日 洛の泉涌寺舎利殿ふおゐて毎年九月八日舎利会と行ふ音樂あり、律師湛海宋の白蓮寺よ珊瑚ごさ受持の仏牙あり、

仙翁參 の部ふ出、

薄檀の實 時珍曰其子金鈴の如し熟そる時ハ黄色金鈴と名く、形ふ象る〇薄檀ハ棟ニ夏のあの部ふつの部 机洗の条下ふ出づ、

水灯會

七月

硯洗

十六日 城洲宇治郡大和田黄蘗山万福寺ふおゐて當寺
八華人黄檗隠元琦禅師明暦中の建立之 紀事 今貴
宇治川の舩中あそこゝもと修を水中施食の法事ゝ其
式舩二艘と双べ申の刻むうふ國屋の前ふ出先ゝ流ふ
沂つゝて宇治橋の下ふ至る暮ふ及で舩中數个の燈臺
と点し僧徒左右ふ座と列ねて七如来の牌ゝ安し供物と
備へ經巻と誦し音磬をうちて流ふ随ひ下ゝまりて
後三百六十个の燈ゝ宇治川ふ浮べ流ふまゝこゞひ水ふ頽ひ
散乱せむ恰も蛍火の如しその灯白紙と以小蓮花と
造りて内ふ艾心と堅そ熟艾ハ猫硝と以て煮る火と
その末ふ点じたまゝ或ハ流ふまゝこゞひ伏見豊後橋の
下ふ至さむのころ僧徒亥の刻ぞろふ岡屋の前ふ帰
る其間遊覧の舩數千之 月令廣義 南国の凡俗中
元の夜家ゝ各美飯と具へ齋供と門前ふ羅或ハ桐襴
の所傷亡の野鬼と祝祀一事ゝして水燈三十六をそゝげ
流水ふむうして浮む名づけて度孤とふ燈ハ紙燈あり

相撲

部頭使 漢書注 両々相當ゝて力と技藝射
騎ふ艇戯とをふ故ふ角艇とふ 事原

史記秦の二世甘泉宮ふ在て樂を角力戯俳優戯をふ
漢の武帝この戯と好む即ち今の相撲ゝ 垂仁紀 大和国當
麻蹶速と出雲國野見宿祢ゝこれ相撲ゝむ蹶速野見ふ
勝とあくまでその腰と踏折らとて死せゝ野見ハ當家
の祖ゝ 扶桑畧記 拍原天皇の時より代々天子皆柔ゝ相
撲と好む貞観以後衰微ゝて無事ゝ今聖主これを捨
ぜゞ又興ゝらるゝや、〇先ゝ二三月のころ大将以下陳の座
ふおゐて相撲使のことを定む諸国七道ふ遣ゝて相撲人を
召とこゝもと部領使とゝふ 公事根源 相撲 江次第ゝ仁寿殿
あり 東遊の相撲ゝ 仁寿殿ふおゐて云南殿出御のとき、是ハ諸国の供御人相
撲と奉行 諸司ゝ於て召合の抜出ふあり
の故入くをめ諸あつめて七月ふ相撲の節とゝふて、天子
の御覧ぜるゝまゝ先十六日の間ふ召仰あり上卿勅を
奉ゝて左右の次将ふ相撲あるべきよしを仰らる左右の
近衛方と分て国々へ使と下して相撲と召そゝれと万葉
ふことゝし使とゝゝり、廿六日ふ内取とゝふことあり、仁寿殿江
次第ふ五犬の月ハ廿六日ふ内取とゝふことあり、仁寿殿ふ於てこれと行ふ
御物忌のとき清涼殿ふおゐてこれあり 近年御物忌と申ことの
多くとゝふ内取とハちらゝくふ出御あるふ左右の角力人東
故ふ左と左右と右相撲あり、故障
あるときハ仰ふ随て進止そ、擯鼻の上ふ狩衣袴を着ゝ

始て長崎ふ種 本朝食鑑 水瓜ハ西瓜之俗ふ瓜中水多
故ふ名く 大和本草 三月種と下し蔓延て地ふ布四五月
黄花と開く甜
瓜の花のごとし、**鈴虫** 和漢三才圖会 金鐘蟲 日鈴児
俗ニ云鈴虫此ふ蟋蟀の類真黒ふ
松虫ふ似て首小く尻大ふ背窄く腹ふ黄白色あり夜鳴
声鈴と振が如し里里林里里林とふくくもの異名ふ
丹まの部松虫

すげの庭鳥 きりくもの異名ふ
異名分類ふる

兼三秋物芒 尓雅 蕪ふ草の裏ふ生ふ
ゆきの山ふふくころ
蓬が杣のもけの庭鳥
と蓬とふふ文芒とふ杜栄ふ○時珍曰芒葉皆ほそのごく
うて大ふ長さ四五尺其中快利ふて人と傷ること鉾又の
如しご月長き莖と抽んで穂をなす蘆葦の花のごとく
者ふ○緩芒 篠芒 鷹の羽芒 糸芒 簇芒 十寸穂芒
麻苧穂の芒 真蘇苧の芒 穂芒 花芒 和
尾花 鬼芒等各頭字の部ふ分ち注ふ 漢
三才画会 野原湿地ふ布て叢生ふ忍冬ふ似ふ
微扁ふ石菖ふ似て浅く秋莖と起て嶺ふ穂となす青白

延元三年江記云角力人三十人次第行列云々装束烏帽子狩衣
精鼻緒ふ差細狩衣の上ふ帯を着下衣袴ふ着ふ徒跣ふ各三十人
ふ二ときごよりまふ取て勝負ふあり廿八日 丸の月廿八九日 召合
小の月廿七八日
あつ 裏存云召合抜出ハ左右相撲相合ふ江次第云勝方乱声
時ふ次ふ左勝負右勝負のごとふ抜頭右勝ハ納曽利均ハふ奏ふ左軍最手
綾三と奏ふ又せんけいあるやうきハ右先ふ納曽利ふ奏ふ左
南殿ふ出御王卿参上ふ大将相撲の奏と執る十七番取て
勝方乱声あり又廿九日抜手ふて角力をごりて御覧ぜ
らるゝ神亀三年ふ始ふて諸國ふう召上せらるゝ寛平七
年ふ八重相撲と御覧あり又ふて角力の起りと申ふ日本紀
垂仁天皇七年七月當麻邑ふ勇士あり云々○助手最手加
まおとふ礼相撲ふのふ所ふ助手是と脱手とふ江次第ふ
ごとそう人今関脱をどうふごとふうう名と設けおごま
ろう欤○童相撲辻相撲谷頭字の部ふ分ち注ふ**葸茇仁**
和漢三才画会 苗ふ黍ふ類し葉の間ふ抜とゞろちて穂と出
し実と結ぶ其梢の尚ふ白花と開く九草木の花落
て実と結ぶ此ふ花と実と別ふ形ふく末尖ふ端ふ白絲二條と
出も暑乾くときハ絲脱去て孔とあり上下通ぜ小児絲を
貫きて念珠とも、**西瓜** 和漢三才画会 慶安中 黄蘗隠元入
朝の時西瓜扁豆ふの種と携ふ来り

色、細子ある〳〵なまこどもうごめく。其蓮扁く強健長さ六七寸小児莖と取こ穂を縮結こ纏の如くし、二筒こ用ひ、一ハ其稽めふさ〳〵そろへ、両人莖を持て透徹所伽羅枿くさの部こる歟〳〵、相引く切こる方輪こ千すゞ、

すゞのる

もぐと鹿とのそうごんて、秋の部ふ出そふよりて、そふ賛して其こゝろを注を、古今まぐろく人をの、こゝろん」真湖公翁云をぐるハ日本紀ふ螺螄と書てもぐるとあり、一あい似我蜂ともふ云、此蜂ハ菜の木の虫をねぐら来て、巳が巣ふ七日呪ひぬまごハ巳が如きこ蜂とあれりとのりて、其子ハ一度巣とさそちて又帰来らぬよりに、其如く今別ゆきて又のろともちられぬ人をまごハ帰るをいつとろまこんとうちかゞきこるあり、中器此三の何ともをちれねど萩原とのふふつきてもぐるい鹿の事こをごいらぬ説をもいつり会い俳諧の書ハ後の説ども誤こ多し、

八月　胡

芋

芋の莖をらふ大和本草唐の芋の整公煮て食し、生ふて酢とくゝて食へ鱸鉤勢鮗

大和本草鮒魚大なる者二三尺三月以後七月まで肥ゆ、暑月脂多くして味よし、八月より色もる夏秋さ〳〵鮗〳〵鮎とるすゝ夏月腸の味よし、ツモワタとらふ腸あり、脂多く味よし、小あるとヒイゴとらふ松江ろるゞ、中華松江の鮗ハ其大サ日本のヒイゴの如しと云、河鮗味尤よし、暑月の佳品こ海と河との間ふあるもの味よし、漁人これを鮗或ハ戈ふて突てとる、後蔓鰭つるところをとるもの〳〵鮗つり半残

九月　住吉相撲会

十三日　宝の市　拾芥抄九月十二日住吉相撲會社家説神外市　輿王出嶋頭宮ハ渡御、傳々供あり津守の神主勅使代〳〵て宣命と讀畢つそ相撲十二番童相撲三番あり、贋自昇褌の上ふ注連を纏ひて手合あり、是今日の神技こ〇一説ふのふくハ神前へ黄金の幷と作つて、新穀の稲を奉つるこよりて農家用ふる処の幷を此処ふ持来つて賣買り、こゝろをふて種々の市人群集ふる故宝の市こそふおもふ、古当社の新嘗会こ心得べし、今神輿と別殿へ迁し奉りて、五穀新嘗の神膳ふご奉る相撲会の事中頃より沙汰ふ〳〵宝の市幷市是こ〇幷買て

分別ゝる月 晦日 九月晦日、楯川住吉の神輿玉出嶋の御旅の後とゝふ

見ゝれ 芭蕉

住吉の神送

の仮殿（渡御、即祓と修まこれと住吉の御祭の後とゝふ

祝祠あり又北祭と称も出雲石とゝ入所おそ称宜出雲と遥ふ拝むこれと神送とゝふ今日四天王寺石の鳥居の遥おまつと神送つまりゝ大坂所々の神社も又神送りの神支あり、

爵入大水為蛤

月令 此記戌月之候爵為蛤蛤飛物化為潜物九月節

酔楊妃

百葡の内ゝ大白入薄紅おそ万重大々輪芒散 其花老る時絮の如く

ありて風おまこがして散乱まこと鷺毛の如ゝ

追加

は

八月

八朔梅

冬のふの部、冬の梅の条ふ注も、

七月

星草

大和本草 穀精草、沢中水田の中ふ叢生も、葉の中ゟ一莖と抽んで其形、真蘭ふ似て、莖の末ゟ白花の四きあつゝ ○俗太皷のブチといふ、

り

七月

琉球芋

大和本草 甘藷、葉ハ番薯と義葉のふ似ゝり、根の下ふ短き蔓あり、根ハ瓜樓根ゟ似卵ふ似て大きゝり、鴨の卵ふ似ゝり、又鷲ゝ八重と一斤あり、長きあつ四きこゝろ、夏月蔓長く生を、中畧此種元禄の末、琉球ゟ薩州ふ渡る、煖土ふよろし、寒地ふ植もそ生せそ、

ぬ

八月

鷸

大和本草 和品鬼ツゝこゝとの ふ常のゝ

九月

万年青ゝ前おき

此詞増山の井ふ出ゝ万年青のまゝ入おき、牡丹の胴、松の胴とそ立花ふ用ふるゝり、但し池の坊三ヶの傳受ある、ゝ委ゝくゝゝゝ

し

八月

鴫の羽盛

鴫の羽ゟり、千鳥の羽ゟりゝ料理ふそる事あり、切ゝる頭翅を以ゝく全体のそゝと作ゝそ、その脊のゝろへ焼ゝる肉を盛ゝれと鴫

の料盛
とりよ、

増補歳時記栞草秋之部終